

キ旨通達セリ同三十四年十一月地方官制改正ニ伴ヒ廢縣置廳ト爲リ學租事務ハ總督府ニ引繼カシメ同年十二月府令第九號ヲ以テ學租財產ハ臺灣總督府民政長官之ヲ管理シ其ノ學租ハ廳長之ヲ徵收シ學租財產ヨリ生スル收入ハ學事並學租ニ關スル諸費ニ充ツルコトト爲シ同三十六年三月ニ至リ學租金支出ハ行政區劃毎ニ特種ノ取扱ヲ爲サス全島共通シテ特ニ必要ト認ムル學事費ニ充用スルコトニ決定セリ (財政ノ部參照)

大正六年度ノ收支決算ヲ示セハ左ノ如シ

學租收入	四八、一一五
財產收入	三〇〇
貸付金收入	二四
雜收入	四八、四三九
總計	
學租支出	

諸稅負擔	一〇、七五七
學事諸費	二三、二五三
學租諸費	九、三八八
總計	四三、三九八

第十六章 宗教及救恤

第一節 神社及宗教

要旨 本島ニ神社アルハ我領臺後ノコトニ屬ス宗教ハ(一)本島人ニ固有セルモノ即チ儒教、道教及佛教(支那的)ト(二)内地ヨリ傳來セルモノ即チ神道及佛教(日本的)ト(三)領臺前後ニ涉リテ西洋人及内地人ニヨリテ傳ヘラレタル基督教トアリ左ニ其ノ概略ヲ説述スヘシ因ニ大正四年九月ヨリ著手セル本島宗教ニ關スル實情調査ハ今ヤ略々其ノ業ヲ了ヘタルモ尙調査洩レノ廉尠カラス從テ本章ニ掲記セル統計表中寺廟ニ於ケル儒道佛ノ分類信徒數宗教的團體會員數等ハ今後ノ調査ニヨリテ多少ノ増減ヲ來スヘキヲ豫想ス尙本島人ニ在リテハ基督教ト言ヘハ新教ヲ意味シ舊教ニ對シテハ特ニ天主教ト稱スレトモ本章ニ於テハ一般ノ用語ニ從ヒ基督教ヲ以テ新教及舊教ヲ包括セルモノトセリ

第一 神社

第十六章 宗教及救恤

一官幣大社臺灣神社 ハ臺北市街ノ東北約一里劍潭山ノ中腹ニ在リ總地積約十一萬六千坪其ノ内三千八百九十坪ヲ以テ神社宮域トシ大國魂命、大己貴命、少彥名命(以上一座)能久親王(一座)ノ四神ヲ奉祀ス

初メ本島ノ我領土ニ歸スルヤ神社ヲ斯土ニ創建シテ民心ノ歸嚮ノル所ヲ定ントスルノ議アリ貴衆兩院ノ建議及總督府ノ具狀ニ依リ明治三十三年九月十八日內務省告示第八十一號ヲ以テ官幣大社臺灣神社創建ノコトヲ發表セラレタリ

是ヨリ先キ明治三十二年二月既ニ土工ヲ起シ同三十三年五月建築ニ著手シ翌三十四年十月二十日全ク竣工ヲ告ケシカハ同月二十七日ヲトシ鎮座式ヲ行ヒ越エテ二十八日ヲ以テ例祭ヲ執行セリ爾來毎年十月二十八日ヲ以テ例祭日ト爲ス神靈赫トシテ日ニ新ナリ本島人ノ參詣スル者其ノ初メ毎年四五千人ニ過キサリシモ今ヤ三萬ヲ算スルニ至レリ

二縣社臺中神社 臺中公園内ニ在リ臺灣神社ト同一ノ祭神ヲ祀ル結構壯嚴ニシテ形勝ノ優チ占ム島民ノ參詣スルモノ跡ヲ絶タス

三縣社嘉義神社 嘉義西堡山仔頂ニ在リ天照大神(一座)大國魂命、大己貴命、少彥名命(三神一座)能久親王(一座)ヲ奉祀ス大正四年十月ノ建立ニ係リ大正六年十月縣社ニ加列セラレ

四縣社開山神社 臺南市ニ在リ鄭成功ヲ祀ル明治三十年一月縣社ニ列セラレ現在ノ社殿ハ大正四年四月ノ竣工ニシテ結構宏壯廟宇重麗ヲ極ム

五無格社 現在ニ於ケル無格社ハ宜蘭神社、基隆神社、臺北稻荷神社、五間厝神社、打狗金刀比羅神社、臺東神社、花蓮港神社、吉野神社、臺田神社、林田神社ノ十社ニシテ新竹神社、阿緜神社ハ目下建立中ナリ

第二宗 教

本島ニ於ケル宗教ヲ説明ノ便宜上領臺前ヨリノ宗教ト領臺後ニ傳來シタル宗教トノ二ニ分ツ

一領臺以前ヨリノ宗教 領臺以前ヨリ本島ニ行ハレタル宗教ヲ分チテ舊慣ニ依ル宗教ト基

二舊慣ニ依ル宗教 舊慣ニ依ル宗教ヲ分チテ儒教、道教、佛教及齋教ノ四ト爲ス

イ儒教 儒教ハ孔子カ堯舜禹湯文武周公ノ言行ヲ祖述憲章セシモノニシテ道德ノ實踐ヲ説キ治國ノ要道ヲ示スト同時ニ祭祀ヲ以テ政務ノ一部トシテ頗ル之ヲ重ンセリ蓋シ支那ハ遠ク唐虞三代ノ古ヨリ既ニ自然崇拜及靈魂崇拜ノ思想行ハレ天地祖靈ヲ始トシ日月星辰山川河海風雨雲雷聖賢偉人ノ靈ニ對シテ官設ノ祠廟ヲ建テ或ハ天子自ラ之ヲ祀リ或ハ大小ノ官吏(地方ニ在リテハ地方官吏)ヲシテ之ヲ祀ラシメタリ從テ本島ニ於テモ文廟、城隍廟、文昌廟、武廟、節孝祠等ノ儒教ニ屬スル祠廟多シ然レトモ文廟以外ノ祠廟ニシテ官設(領臺以前ニ於ケル)ニ係ルモノ極メテ少シ

現時本島ニ於ケル祠廟ニシテ純然タル儒教ニ屬スヘキモノハ文廟、節孝祠、祖廟ノ類ノミ文昌祠、關帝廟、城隍廟ノ如キモ學者讀書人相集リテ或ハ神前ニ降筆ノ術ヲ演シ或ハ擲筭ノ戲ヲ行ヒ全ク道教的色彩ヲ帶フルモノトナレリ其ノ餘ハ推シテ知ルヘキノミ

儒教ノ經典ヲ講習シ聖賢ノ教ニ遵ヒ道德ノ實踐躬行ヲ期スルコトハ上流ノ學者君子人ニ在リテハ最必要ノコトトセラレタルモ今ヤ臺灣ニ於テハ斯風大ニ頹廢シ斯道ノ講究ニ從事スルモノ少シ

。口道教 道教ハ黃帝老子ニ本ツクト稱スルモ其ノ實ハ方士ノ假託ニ出ツ

。周末ノ比ニ方士ナルモノアリ仙術ヲ行フト稱シ山ニ入テ神丹靈藥ヲ求メ世ニ出テテ不老不死ヲ説キシカ後ニ至リテ老莊ノ説ニ附會シ虛心養性ニヨリテ昇天化仙ヲ得ヘシト説クニ至レリ尋テ後漢ノ末ニ張道陵(張天師)ナル者出テ祕籙ヲ老子ニ受ケタリト稱シ符水禁咒ノ法ヲ行ヒ盛ニ愚民ヲ惑惑セシヨリ漸ク宗教的の道教ノ基ヲ立テ更ニ佛教ノ流入スルニ及ヒテ之ト衝突シ之カ刺戟ヲ受ケ佛教ニ模倣シテ經典ヲ作り終ニ現時行ハルル所ノ道教ヲ形成セリ

道教ノ神ノ主ナルモノハ玉皇上帝(此ノ神ヲ祀レル場合ハ多クハ太乙救苦天尊及雷聲普化天尊ヲ配祀ス)、三清天尊(玉清元始天尊、上清靈寶天尊、太清道德天尊ノ三ヲ總稱ス)、

靈官王天君（或ハ豁落大帝トモ云フ）、三官大帝（天官賜福大帝、地官赦罪大帝、水官解厄大帝ノ總稱ナリ）、太上老君（老子、李老君若ハ老君爺ト云フ）、張天師（張道陵）、呂仙祖、鬼谷子、劉真君、許真人等ニシテ其ノ經典ノ主ナルモノハ太上感應篇、三官感應妙經、高上玉皇本行集經、玉皇錫神真經、神農五谷真經、北斗延壽經等ナリ
本島ニハ道教ニ屬スル祠廟多シ然レトモ其ノ純乎タルモノハ極メテ少ナク多クハ儒教附屬ノ神靈若ハ觀音佛等ヲ其ノ祠廟内ニ同置奉祀セリ

道教ノ祠廟ニ奉仕スル者ヲ道士ト云フ然ルニ本島ニハ道教的教育機關ヲ缺クノミナラス福建廣東地方ニモ之ナキヲ以テ道士タル者ニシテ道書ヲ講習シ其ノ教義ヲ知レル者ナシ加之道教的祠廟ニ於ケル願廟（堂守）ハ僧侶ヲ以テ之ニ充ツルヲ例トシ道士ハ概ネ祠廟ニ住セスシテ自家ニ居住シ常ニ人ノ需ニ應シテ治病攘災等ノ祈禱或ハ葬儀ヲ行フヲ以テ生業ト爲ス要スルニ儒道佛ノ三者全ク相混淆シテ其ノ間ニ截然タル區別ヲ爲スコト頗ル難キモノアリ

ハ佛教 佛教ハ印度ノ釋迦ノ説キシ所ニシテ其ノ西域ヲ經テ支那ニ流入セシハ漢代ニ在リ晋末ヨリ南北朝ニ至リテ漸ク各州ニ傳播シ高僧智識亦輩出シ隋唐ニハ其ノ盛ヲ極メタリシカ其ノ前後ニ三武一宗ノ厄アリ其ノ間ニ於テ道教ハ唐朝ノ保護ヲ得テ頓ニ其ノ勢力ヲ増加シ別ニ又回教、喇嘛教ノ流行スルアリ斯クテ佛教ハ漸ク衰運ニ向ヒ清朝ニ至リテ其ノ極ニ達シ僧侶ハ皆無學ノ徒ノミニシテ空シク堂塔伽藍ヲ擁シテ糊口ノ具ニ供スルノミ口ニハ經ヲ誦スルモ心ニ其ノ義ヲ解スル者ナク能ク教法ヲ説キテ民衆ヲ濟度スル者ニ至リテハ誠ニ晨星ノ寥々タルカ如シ

現時ニ於ケル支那特ニ南方支那ノ佛教ハ概ネ其ノ傳燈ニ於テハ禪宗ニ屬スルモ其ノ内容ハ淨土教ニ傾ケリ其ノ奉祀スル所ノ諸佛ハ主ニ阿彌陀、觀音、勢至、文殊、普賢、藥師、彌勒、釋迦、地藏等ニシテ特ニ觀音佛ハ到ル所ニ奉祀セラレ本島人カ信仰ノ中心點タリ其ノ平常念誦スル所ノ經典ハ觀音經、阿彌陀經、金剛經、般若心經、楞嚴經、梁皇懺、慈悲水懺、血盆經等ナリ

本島人ハ多ク福建廣東ヨリ移住セル者ノ子孫ナルカ故ニ本島寺院ハ大抵福州ニ於ケル巨刹タル鼓山湧泉寺ノ末徒カ開拓セル所ニ係ル特ニ本島ニハ從來佛教的教育機關ヲ缺クカ故ニ現時ニ於テモ尙僧徒ノ修業ヲ望ム者ハ遠ク鼓山ニ遊フノ風アリ然レトモ斯ノ如キハ本島僧侶ノ百分ノ一二過キス現時ノ本島人僧侶ハ大抵無智無學ノ徒或ハ晩年ニ孤獨ト爲リ或ハ貧困爲スナキ者ノ身ヲ佛寺ニ投シテ修業半歲僅ニ二三卷ノ經ヲ口誦スルコトヲ得ハ則チ僧ト稱スルカ如キ有様ナリ從テ彼等ハ殆ト其ノ社會的地位ヲ認メラレス本島ニ於ケル和尚ナル語ハ内地人カ「坊主」ト罵倒スルヨリモ尙侮蔑の意味ニ富メルノ觀アリ既ニ述ヘタルカ如ク本島ニ於ケル寺廟ハ總テ儒道佛ノ三者ヲ混淆セリ蓋シ本島人ノ神佛ヲ信仰スルヤ教義ノ如何ハ其ノ間フ所ニアラス彼等ハ極端ナル現世利益主義ニ陷レルカ故ニ彼等ハ神佛ニ依リテ安心ヲ得ントスルニアラスシテ唯、眼前ニ於ケル幸福ニ向テ希求スルノミ而シテ彼等ハ神佛ニ對シテ希求スル所ハ大抵招財、求子、治病ニ在リ故ニ例之ハ茲ニ嘗テ某氏カ某ノ神佛ニ賽シテ宿痼ヲ治セリトノ傳説アリトセン乎其ノ傳説ノ流行

スル間ハ其ノ神佛ハ人民カ信仰崇拜ノ對象ト爲ルナリ其ノ信仰の對象ノ觀音佛タリ關帝タリ上帝爺タルハ彼等ノ關スル所ニアラス彼等カ觀音佛ノ祭日ニ當リ佛前ニ於テ數百頭ノ豚ヲ屠リテ犧牲トスルノ一事適、以テ其ノ信仰狀態ヲ推知スルニ足ルヘシ

ニ齋教 齋教ハ佛教ノ一種ナリ明朝ノ比ニ禪宗ヨリ變胎シタルモノニシテ其ノ教義トスル所ハ一般佛寺ト異ナル所ナシ但シ佛教ノ教義以外ニ儒道ノ教義ヲ加味シタルモノ多シ其ノ徒ノ僧侶ト異ナル所ハ出家セス法服ヲ纏ハス頭髮ヲ剃ラス一般ノ俗人トシテ市井ニ生業ヲ營ミ而モ佛弟子トシテ其ノ身ヲ持スルコト嚴正ニ能ク戒律ヲ守レルニ在リ

齋教ハ常ニ肉食シテ肉食セサルヲ以テ本義ト爲ス故ニ之ヲ持齋宗ト云ヒ又俗ニ其ノ徒ヲ食菜人ト云フ信徒相互ニハ齋友ト呼ヒ宗外ノ者ヨリハ之ヲ齋公(男)、齋姑(女)ト呼フ齋友ニ死亡スル者アルトキハ齋友間ニテ讀經其ノ他ノ儀式ヲ行ヒ僧道ヲ招請セス往時ハ齋友ト僧侶トノ間ニ明ナル區別アリシモ今ハ兩者漸ク相近ツキツアルカ如シ

齋友ハ之ヲ先天、龍華、金幢ノ三派ニ分ツモ教義上大差アルナシ但シ先天派ハ妻帯ヲ禁

シ絶對的榮食ヲ守ルモ龍華派及金幢派ニハ妻帯ヲ爲シ且一定ノ日時ニ限リ榮食ヲ實行スル者アリ尙龍華派ハ其ノ齋友ニ小乘、大乘、三引、小引、大引、四偈、清齋、大空、空、空ナル九品ノ階級ヲ規定セリ

三舊慣ニ依ル宗教的團體 宗教的團體ニ神明會、祖公會等アリ又本島人ノ迷信ニ對シテ禁歷祈禱ヲ行フヲ業トスル者アリ

イ神明會 神明會ハ身分ノ相同シキ者即チ讀書人、同業者、同郷人、同姓者等ノ關係ニ緣リテ數名乃至數百名(稀ニハ千名ヲ超ユルモノアリ)ノ同志者カ或ル神佛ヲ祭祀スルノ目的ヲ以テ組織セル一種ノ宗教的團體ナリ然レトモ其ノ會員ノ資格ニ付身分、其ノ他ノ制限ヲ規定セサルモノ無キニアラス又其ノ目的モ單ニ祭祀ノミニアラスシテ副目的トシテ會員相互ノ利益ヲ増進シ或ハ其ノ親睦ヲ計リ或ハ同業者間ノ規則ヲ明ニシ或ハ共同的財産ノ維持ヲ圖リ或ハ道路、橋梁、義渡等ノ保存ヲ計ルモノアリ而シテ其ノ會員ハ入會ノ際ニ必若干ノ金額ヲ捐出スルカ故ニ神明會ニハ必多少ノ財産アリ多クハ田畑山林等ノ

不動産ヲ所有シ其ノ財産ヨリ生スル收益ヲ以テ毎年一回或ハ二、三回ノ祭祀ヲ行ヒ其ノ際ハ會員相集リテ演戲ヲ開場シ酒宴ヲ催シ一日乃至數日ニ互リテ興樂ス若シ剩餘金アルトキハ其ノ會ノ規約又ハ慣例ニ依リテ或ハ之ヲ積立テ或ハ學校、其ノ他ノ公共事業ニ寄附シ或ハ該會ト特別ノ關係アル寺廟ノ經費ノ補助ニ充テ或ハ會員間ニ分配シ或ハ爐主(其ノ場合ニ於ケル祭事擔當者)ノ所得トス

ロ祖公會 祖公會ハ略神明會ト相似タルモノナレトモ其ノ異ナル點ハ會員ノ資格ヲ同姓又ハ同宗ノ者ニ限リ且祭神ハ必其ノ會員一同ノ祖先タルニ在リ

ハ父母會孝子會等 上記ノ外ニ父母會、孝子會等ノ團體少カラス父母會或ハ孝子會ハ會員ノ父母、祖父母等ノ死亡シタルトキ相互ニ喪葬ノ費用ヲ補助スルノ目的ヲ以テ組織セラレタル團體ナリ即チ一種ノ保險事業ニシテ所謂講會ニ似タルモノナリ如是ノ會ハ神佛祭祀ノ目的ヲ兼ヌルト否トニ依リテ其ノ宗教的團體タルト否トチ區別スルモノトス

ニ巫覡術士 本島人ノ迷信ニ對シテ禁歷祈禱占候等ヲ業トセル者ヲ巫覡術士ト云フ巫覡

トハ法官、童乩、女巫ノ徒ノ總稱ニシテ神下ロシ、厄拂ヒ、調伏等ニ類似セルコトヲ行フモリナリ術士トハ日師、算命師、地理師、相命師、卜卦師ノ類ノ總稱ニシテ日柄、運氣、人相、手相、家相等ヲ推算豫言スルモノナリ清律ニテハ巫覡ヲ禁シ術士ニ對シテハ其ノ易說或ハ五行說ニ依リテ吉凶禍福ヲ卜スルヲ認容セシモ其ノ言ノ政治時務ニ涉ルコトヲ禁止セリ然レトモ事實ニ於テハ政令行ハレスシテ巫覡術士ノ徒到ル所ニ其ノ邪術妄說ヲ恣ニセシカ如シ領臺以後ハ其ノ特ニ治安ニ妨害アリト認ムルモノハ之ヲ禁止セルモ大體ニ於テ放任ノ姿ニ在リ

四基督教 西曆一六二七年和蘭ノ宣教師「カンデグッス」天主教ヲ南部臺灣ニ傳フ恰モ之ト前後シテ西班牙ノ宣教師北部臺灣ニ渡來シ天主教ヲ弘ム之ヲ本島ニ於ケル基督教傳來ノ始トス西班牙人ハ基隆及淡水ヲ中心トシテ布教ニ從事シ其ノ宣教師三人相次テ蕃害ニ斃レシニモ屢セス銳意土蕃ヲ教化セルカ一六四二年ニ至リテ和蘭人ノ爲ニ驅逐セラレテ臺灣ヲ退去セリ和蘭人ハ新港ヲ中心トシテ土蕃ノ教化ヲ圖リ或ハ聖書ヲ蕃譯シ或ハ會堂ヲ建設シ或

ハ學校ヲ開キ據臺三十餘年其ノ教化ノ及フ所、南ハ鳳山附近ヨリ北ハ鹿港附近ニ至リ受洗者五千餘人ノ多キニ達セリ其ノ後一六六〇年鄭成功ニ斯土ヲ奪ハルルト共ニ基督教ハ一旦其ノ跡ヲ絶ツニ至リシカ鄭氏亡ヒテ清領ト爲ルノ後約二百年ヲ經テ西班牙人更ニ天主教ヲ傳ヘ別ニ英國長老教會及加奈陀長老教會相踵テ新教ヲ傳來セリ

五天主教 西曆一八五九年西班牙人ハ再ヒ本島ニ向テ天主教ノ布教ヲ企テ「ゼンス」博士ヲ派遣セリ博士ハ南部臺灣ニ據リテ土人ニ傳道シ爾來幾多ノ宣教師ノ奮闘努力ニ依リテ漸次北進シテ今ヤ臺北、打狗、臺中、羅厝、樹仔脚等ノ附近各地ニ其ノ教勢ヲ擴張スルニ至レリ其ノ附屬事業トシテ臺北ニ傳道學校、私立靜修女學校、臺中ニ仁慈堂(孤兒院)、打狗ニ養生堂(孤兒院)ヲ經營ス

六英國長老教會及加奈陀長老教會 長老教會ノ傳道ハ西曆一八六五年「マクスウエル」博士カ蘇格蘭長老教會ヨリ派遣セラレテ臺南ニ來リタルニ濫觴ス次テ一八七一年「キャンベル」博士ノ渡來セルアリ別ニ一八七二年加奈陀長老教會ヨリ「マカイ」博士ノ北部臺灣ニ派遣セ

ラルルアリ孰モ備ニ辛苦ヲ嘗メ教土ノ開拓ニ盡瘁セシカ爾來幾多ノ宣教師ノ渡臺セルアリ
南北相呼應シテ熱心布教ニ從事シタルノ結果今ヤ兩教會ハ臺中廳大甲溪ヲ境トシテ其ノ傳
道地域ヲ區劃シ英國長老教會ハ臺南新樓ヲ、加奈陀長老教會ハ淡水及大稻埕ヲ根據地トシ
テ本島到ル所ニ其ノ布教ノ影ヲ印スルニ至レリ今兩教會ノ經營事業ヲ學クレハ左ノ如シ
(英國長老教會ハ蘇國長老教會ト云フヲ妥當トスレトモ今ハ臺灣ニ於ケル一般ノ稱呼ニ從フ)
英國長老教會

臺南長老教會中學校附屬小學校

臺南長老教會中學校豫備科(在彰化)

臺南長老教會中學校

臺南長老教會女學校

臺灣基督長老教會臺南神學校

長老教會新樓病院

彰化耶蘇病院(目下休止)

加奈陀長老教會

私立淡水中學校

淡水女學堂

臺灣基督長老教會臺北神學校

馬偕紀念病院(在臺北)

七領臺後ニ傳來セル宗教 領臺以後本島ニ渡來セル宗教ヲ分チテ神道、佛教、基督教ノ三
ト爲ス共ニ内地人ニ依リテ傳道セラレタル宗教ニシテ從來主トシテ在臺内地人ノ教化ニ力
ヲ注キ本島人ニ對スル布教ハ殆ト之ヲ措テ顧サルノ觀アリシモ近時漸ク之カ教化ニ力メン
トスルノ氣運ヲ生セリ

イ神道 神道十三派中現ニ本島ニ行ハルルモノハ天理教、金光教、御嶽教及實行教ノ四
派ニシテ黑住教、扶桑教、神理教、神習教ノ四派モ嘗テ一度渡來シタルコトアリシモ幾

何モナクシテ消滅セリ

□天理教 天理教ハ明治三十三年以來金光教ハ同三十五年以來ノ傳道ニ係リ當初信徒ハ孰モ内地人ノミナリシモ近來本島人ノ之ニ歸依スル者漸ク多ク其ノ教勢頗侮リ難キモノアリト云フ

ハ佛教 内地佛教ノ本島傳來ハ領臺當時征討軍ニ加ハレル從軍布教師等本島ニ駐錫シテ開教ニ努メシ者アルニ濫觴ス當初ハ各宗本山孰モ臨時局ナルモノヲ置キ專ラ出征軍人軍屬ノ慰問ニ從事セシカ土匪ノ戡定漸ク其ノ緒ニ就クニ從ヒ新領土ノ布教ヲ畫策シ特ニ曹洞宗、眞宗本願寺派、眞宗大谷派、淨土宗、眞言宗等ノ活躍大ニ囑目ニ値スルモノアリキ當時ノ狀況ヲ回顧スルニ内地人ノ渡臺者尙少ナク從テ布教ノ對象ハ土人本位ヲ必要トセシヲ以テ各宗競フテ本島各地ニ布教所ヲ設ケ或ハ國語講習所ヲ建設シ或ハ慈惠醫院ヲ設立スル等兵馬倥傯ノ間ニ幾多ノ不便困難ヲ忍ヒ百方布教準備ニ努力シタリシモ明治三十二年ノ頃ヨリ各本山ハ經濟上ノ困難ヨリ其ノ方針ヲ一變シ布教費ノ支出ヲ節減或ハ

中止シタルヲ以テ在臺布教師ハ茲ニ止ムナク獨立自營ノ必要ヲ生シ爲ニ其ノ傳道モ何時シカ内地人本位ニ傾キ且内地人ノ渡臺者漸ク増加スルニ伴ヒ其ノ佛事法要ヲ營ムニ忙殺セラレ終ニ全ク本島人ノ布教ヲ閑却スルニ至リシハ甚遺憾ニ堪ヘサル所ナリ

佛教諸派中現時本島ニ行ハルルモノハ天台宗、眞言宗(高野派及醍醐派)、淨土宗、曹洞宗、臨濟宗(妙心寺派)、眞宗(本願寺派及大谷派)、日蓮宗ノ九派ナリ然レトモ臺北、臺中、嘉義、臺南等ノ大市街ヲ除ケハ概ネ一市街若ハ一地方ニ一寺宇アルノミ故ニ在任内地人ハ其ノ本來ノ所屬宗派ノ如何ヲ問ハス之カ檀信徒ト爲リテ歸依敬禮ヲ捧クルノ状態ナリ而シテ本島人ニ對スル布教ニ就テハ近年更ニ曹洞、臨濟、眞宗(本派)等ノ諸宗派ノ之ニ著手セルアリ特ニ曹洞宗ハ本島僧侶及齋友ニ對シテ領臺當時ヨリ引續キ維持シ來リタル關係ヲ利用シ大ニ其ノ教勢ノ擴張ニ努力シツツアリ本年新ニ設立セラレタル曹洞宗及臨濟宗ノ學林ハ共ニ本島人僧侶及齋友ノ教育機關ニシテ將來大ニ本島佛教ノ發展ヲ促進スルモノアルヘシ各宗派ノ經營セル事業左ノ如シ

私立臺灣佛教中學林

曹洞宗 (臺北)

私立臨濟宗鎮南學林

臨濟宗 (臺北)

私立嘉義幼稚園

淨土宗 (嘉義)

臺北成德學院(感化院)

眞宗本願寺派 (臺北)

護國十善會附屬寄宿舍及宿泊所

眞言宗高野派 (臺北)

臺灣孤兒院

臺北佛教團 (臺北)

打狗免囚保護場

眞宗本願寺派 (打狗)

ニ基督教 内地基督教ノ本島ニ布教セラレタルモノバ日本基督教會、日本組合基督教會、日本聖公會及希臘正教會ノ四派ニシテ(一)日本基督教會ハ元來領臺以前ヨリ英米ノ宣教師ニ依リテ本島ニ傳道セラレタル長老派ト同一教派ニ屬スルモ其ノ布教者及信徒ノ内地人タルト否トノ差異アルカ爲各々殊別ノ行動ヲ執レリ此ノ派ノ本島ニ於ケル傳道ハ内地基督教各派中最古キ歴史ヲ有シ改隸ノ翌年即チ明治二十九年五月既ニ教師ヲ本島ニ派遣

シ布教ニ著手セシメタリ是レ内地基督教徒ノ本島傳道ノ嚆矢ナリ是ヨリ先キ臺北ニ於テハ數名ノ信徒相集マリ基督教徒一致會ナルモノヲ組織シ所屬教派ノ如何ヲ問ハス時々集會シテ信仰ノ修養ニ努メ居リシカ右教師ノ渡臺スルヤ相率キテ來リ投シ途ニ臺北西門外街ニ教會ヲ設立ス爾來同派ハ數名ノ教師ヲ本島ニ送り全島各地ニ教線ヲ張り銳意布教ニ努メシカハ教勢漸ク振興シ會員ノ數年ト共ニ増加セリ(二)聖公會ハ明治三十一年臺北ニ教會ヲ設置セシニ始マリ爾來堅實ナル發達ヲ遂ケ布教ノ範圍亦擴大シ今ヤ臺中、臺南等ニ及ヘリ(三)日本組合基督教會ハ大正元年以來ノ傳道ニシテ創業日尙淺ク現時ハ臺北ノ外他ニ傳道ノ地ヲ有セスト雖教勢頓ニ發展シ信徒増加ノ傾向ヲ有ス(四)希臘正教會ノ傳道ハ大正四年以來ノ事ニシテ現時臺北及嘉義ノ兩地ニ布教ヲ試ミツツアルモ教勢尙微々ナリ

神社及神職

大正六年十二月三十一日

五四四

神	官幣大社		縣社		無格社		計
	神職數	社數	神職數	社數	神職數	社數	
臺北	×	一					×
宜蘭							
桃園							
新竹							
臺中							
南投							
嘉義							
臺南							
阿緞							
臺東							
花蓮							
澎湖							
計	×	一					×
	一五	一					一七

×ハ兼職者ナリ

八正六年十二月三十一日

七區區 彰 明 十

×ハ兼職者ナリ

廟宇及舊慣ニ依ル宗教的團體並僧侶、道士、齋友等

種	寺		齋		小		僧侶及道士		齋友		宗教的團體數		宗教的團體會員數		巫覡及術士		通計	
	廟	堂	龍	先	龍	先	廟宇ニ屬ス	廟宇ニ屬セ	龍	先	神	祖	神	祖	日	地		相
臺北	149	22	19	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
宜蘭	151	26	23	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
桃園	71	33	14	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
新竹	198	37	18	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
臺中	474	131	38	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
南投	107	22	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
嘉義	428	140	53	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
臺南	345	199	68	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
阿緜	108	43	19	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
臺東	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

大正五年十二月末日調査ノ數ニ比シ著シク増減異動アルハ宗教調査ノ結果ニ依ル

第十六章 宗教及救恤

五四五

臺	阿	臺	嘉	南	臺	新	桃	宜	臺
東	縱	南	義	投	中	竹	園	蘭	北
		五	三		三				七
		二	二		一	一			二
		九	五		五	一			X 五六
		九	五		五	一			X 五六
		一六五八	五〇一		六三四	五四			三〇八六
		九八	二五〇〇		四九〇六				一、四二四
			三						
		一、七五六	三、〇一四		五、五四〇	五四			四、五一〇

神 道

大正六年十二月三十一日

廳
教會
所 教務
所 布教
人內地 布
人本島 教
人外國 師
計
人內地 信
人本島
人外國
計 徒

廳	臺北	宜蘭	桃園	新竹	臺中	南投	嘉義	臺南	阿緞	臺東
寺院	10	1	1	2	3	1	1	1	2	1
所 教務	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
所 布教	18	1	1	1	1	1	1	1	1	1
人內地	19	1	1	1	1	1	1	1	1	1
人本島	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
人外國	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
計	49	1	1	1	1	1	1	1	1	1
人內地	19,024	10	100	1,100	4,947	730	4,462	1,195	1,132	2,000
人本島	5,818	200	75	200	2,649	130	2,950	1,503	1,700	1
人外國	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
計	24,842	806	85	1,400	7,596	860	7,412	3,458	2,933	2,000

佛 教

大正六年十二月三十一日

×ハ兼職者ナリ

種別	實行教	御嶽教	金光教	天理教
教會	2	2	7	8
所 教務	1	1	1	1
所 布教	1	1	1	1
人內地	3	2	2	2
人本島	1	1	1	1
人外國	1	1	1	1
計	3	2	2	2
人內地	235	300	3,570	2,048
人本島	76	1	885	892
人外國	1	1	1	1
計	235	300	3,646	2,091

更ニ之ヲ教派別ニ示セハ左ノ如シ

×ハ兼職者ナリ

種別	花蓮港	澎湖
教會	1	1
所 教務	1	1
所 布教	1	1
人內地	2	1
人本島	1	1
人外國	1	1
計	2	1
人內地	210	625
人本島	1	892
人外國	1	1
計	210	1,509

花蓮港		澎湖		計	
布教所	寺院	布教所	寺院	布教所	寺院
1	1	1	1	2	2
内地	本島	内地	本島	内地	本島
3,775	21	5,022	282	5,022	282
外国人	計	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1
計	徒	3,775	310	6,547	658

△ハ本島人ノミノ經營ニ係ルモノナリ
×ハ兼職者ナリ
更ニ之ヲ教派別ニ示セハ左ノ如シ

天台宗		眞言宗		淨土宗		曹洞宗		計	
布教所	寺院	布教所	寺院	布教所	寺院	布教所	寺院	布教所	寺院
3	3	7	7	4	4	9	9	13	13
内地	本島	内地	本島	内地	本島	内地	本島	内地	本島
416	2,150	4,105	7,542	1,099	7,491	7,491	8,400	18,234	8,382
外国人	計	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
計	徒	416	2,150	4,105	8,382	8,382	8,382	18,234	18,234

臨濟宗		眞宗(本派)		眞宗(大谷派)		日蓮宗		計	
布教所	寺院	布教所	寺院	布教所	寺院	布教所	寺院	布教所	寺院
1	1	1	1	1	1	1	1	3	3
内地	本島	内地	本島	内地	本島	内地	本島	内地	本島
1,430	1,689	2,289	5,036	2,085	2,000	2,954	2,954	5,022	5,022
外国人	計	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
計	徒	1,430	1,689	2,289	2,286	2,954	2,954	6,547	6,547

△ハ本島人ノミノ經營ニ係ルモノナリ
×ハ兼職者ナリ

基督教

大正六年十二月三十一日

臺灣		宜蘭		計	
布教所	寺院	布教所	寺院	布教所	寺院
2	2	1	1	3	3
内地	本島	内地	本島	内地	本島
1,009	3,126	1	1,009	1,009	4,135
外国人	計	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1
計	徒	1,009	3,126	1,009	4,135

第十六章 宗教及救恤

種別	澎湖	花蓮	臺東	阿緞	臺南	嘉義	南投	新臺中	桃園
計	三	一	一	一	一	一	一	一	一
教務所	一五六	二	三	一	七	三	四	八	九
禮拜堂	三	一	一	一	五	八	一	四	一
講義所	△	二	一	一	三	二	一	一	一
內地人	○△	一	三	一	一	四	二	六	一
本島人	△	三	一	一	五	七	二	二	五
外國人	○△	一	三	一	一	五	六	一	三
計	一六〇〇	一	三	一	一	一	一	一	一
內地人	○	三	八	一	三	二	一	九	五
本島人	○	七	八	一	三	二	一	九	五
外國人	○	三	八	一	三	二	一	九	五
計	三六	一	一	一	一	一	一	一	一
信徒	三一	二	二	一	三	二	一	七	一
計	三二五八	七	八	五	九	〇	〇	一	二

講義所中ニハ布教所、説教所及出張所ヲ含ム
 布教師中△ハ女、○ハ熟蕃ナリ
 信徒中○ハ熟蕃ナリ

更ニ之ヲ教派別ニ示セハ左ノ如シ

種別	日本基督	日本組合	基督教會	日本聖公會	天主教會	正教會	長老教會	計
教務所	一	一	一	一	一	一	一	一
禮拜堂	五	一	一	二	二	二	二	一五六
講義所	三	一	一	一	二	一	八	三三
內地人	△	一	一	二	一	二	一	△
本島人	○△	一	一	一	一	一	一	○△
外國人	△	一	一	一	一	一	一	△
計	一	一	一	二	二	二	二	○△
內地人	八二四	一	一	三〇九	一四一	一二九	一六〇〇	一六〇〇
本島人	一	一	一	一	一	一	一	○
外國人	一	一	一	一	一	一	一	○
計	八二四	一	一	三〇九	一四一	一二九	一六〇〇	一六〇〇

講義所中ニハ布教所、説教所及出張所ヲ含ム

布教師中△ハ女、○ハ熟蕃ナリ

五五二

信徒中○ハ熟蕃ナリ

天主教會布教師外國人一二名中三名ハ支那人ナリ

第二節 救 恤

一 要旨 本島ニ於ケル慈善救濟事業ハ遠ク端ヲ清國政府ノ當時ニ啓キ其ノ成立ハ德政ヲ標榜セル政府ノ勸誘ニ由ルアリ或ハ所在紳董ノ義舉ニ係ルモノアリ即チ育嬰堂、郵務局、養濟院、普濟堂、義塚、棲流所、同善堂、留養局、保嬰局等各種名稱ノ下ニ嬰兒ノ養育、貞操ナル寡婦ノ救恤又ハ窮民ノ救助等各種ノ救濟ニ從ヒ賑恤ノ事ニ當レリ然ルニ本島領有ノ際是等ノ事業モ一時廢絶ニ歸セシカ統治機關ノ整備ト共ニ之カ再興ヲ計畫シ諸般ノ調査ヲ進メタルニ際シ 英照皇太后陛下ノ御大喪ニ丁リ慈惠救濟資金ノ御下賜アリタルヲ以テ在來ノ慈惠施設ヲ併合按配シ右御下賜金ヲ分與シテ各基本財産ニ加ヘシメ舊制ヲ斟酌シテ全島ニ五箇ノ慈惠院ヲ開設シ所在地ノ廳長ヲ以テ之カ院長ニ充テ銳意畫策専ラ力ヲ救養ニ效シ傍ラ

基本財産ノ安固ト充實トニ努メ鰥寡孤獨ノ救養ヨリ盲生ノ訓育等ニ至ルマテ皆之ニ仰カシメタリ然レトモ是等ノ設備ハ島内一般ノ窮民ニ及ハサルノ虞アルノミナラス天災地變等ノ災厄ニ對シテハ尙別ニ備フルノ必要アルヲ以テ明治三十二年十二月律令ヲ以テ臺灣罹災救助基金規則ヲ發布シテ非常ノ災害ニ備ヘ又同年勅令ヲ以テ行旅病人及行旅死亡人取扱法ヲ本島ニ施行シ尙府令ヲ以テ臺灣窮民救助規則ヲ發布シテ各種ノ方法ヲ網羅シ前記慈惠ノ施設ト相俟テ救濟上遺漏ナキヲ期スルニ至レリ其ノ他團體及個人ノ經營ニ屬スル慈善設備亦少カラス左ニ重ナル救恤事業ヲ略録セン

二 罹災救助 明治三十二年十二月律令ヲ以テ非常災害ニ罹リタル者ヲ救助スル爲臺灣罹災救助基金規則ヲ制定シ地方稅又ハ國庫ヨリ基金ノ蓄積ヲ爲シ之ヨリ生ヘル收入ヲ以テ救助ヲ施行スルコトトセリ從來罹災救助ノ大ナルモノヲ舉クレハ明治三十九年嘉義地方ノ震災、同四十四年大正元年ノ兩年ニ於ケル數回ノ風水害等ニシテ元年度ノ支出ハ約二十萬圓ニ達セリ現在基金ノ總額ハ二百四十餘萬圓トス

三窮民救助 明治三十二年窮民救助規則ヲ定メ地方稅ヲ以テ窮民ヲ救助スルコトト爲セルモ次項ノ如ク慈惠院ノ設備アルヲ以テ本規則ノ救助ヲ受クル者少ナシ

四慈惠院 慈惠院ハ清國時代ニ於ケル救濟事業ナリシカ改隸ノ際一時廢頓ニ歸シ之ヲ再興セントスルトキ 英照皇太后陛下ノ御大喪ニ丁リ慈惠救濟資金ノ御下賜アリタルヲ以テ在來ノ慈惠施設ヲ併合按配シ恩賜金ヲ頒チテ各基本財産ノ安固ト充實ヲ計ルコトトナシ明治三十二年臺北仁濟院、臺南慈惠院及澎湖普濟院ヲ開設セリ超エテ同三十七年七月府令第五十七號ヲ以テ臺灣慈惠院規則ヲ定メ爾後漸次改正ヲ加ヘテ今日ニ及ヘリ現在ノ慈惠院ハ前記三院ノ外彰化慈惠院及嘉義慈惠院ノ二院ニシテ都合五院ナリ各院ノ概況左ノ如シ

イ臺北仁濟院 臺北廳艋舺ニ在リ沿革古ク舊清國時代ノ養濟院ノ後身ナリ改隸ノ當時兵馬倥傯ノ爲該院收容者ハ糊口ノ途ナク路頭ニ食ヲ乞ヒテ僅ニ飢餓ヲ免レシコト約二箇月無告ノ窮民七十五名ヲ算スルニ至レリ明治二十八年八月假ニ規則ヲ設ケ現在入院者ニ限リ軍事費中ヨリ之ヲ救恤シ同二十九年軍政ヨリ民政ニ移リシ後モ依然救恤ヲ繼續セシカ

三十一年五月兒玉總督ハ濟貧救恤ノ急ヲ主唱シ邇ヨリ遐ニ及ホスノ方針ヲ以テ先ツ艋舺養濟院再興ノ義金ヲ募集ス全島ノ官民翕然トシテ贊同シ忽チ四千五百圓ヲ得タリ同三十二年九月 英照皇太后陛下ノ御大喪ニ丁リ慈惠救濟資金ノ御下賜アリタルヲ以テ臺北縣下ニ散在シタル各慈善財團即チ養濟院、同善堂及育嬰堂ノ附屬財産ヲ調査合併シ縣立仁濟院ヲ設立セリ同三十四年十一月臺北縣廢止ニ際シ本院ハ從前ノ規程ニ依リ臺北廳ニ於テ管理シ臺北仁濟院ト改稱ス超エテ同三十七年七月府令第五十七號ニ依リ所在地廳長ヲ以テ院長ニ充テ救養區域ヲ臺北、桃園及新竹ノ三廳ニ改メ尋テ宜蘭廳ヲ加ヘタリ經費ハ明治三十一年度ヨリ同三十五年度マテハ地方稅ノ補助ヲ受ケ基本財産ヨリ生スル收入ハ貯蓄利殖ヲ講シタルヲ以テ今ヤ基本金二十八萬餘圓ヲ有シ之ヨリ生スル收入二萬三千餘圓ニ達シ優ニ獨立經營ヲ爲シ得ルニ至レリ

ロ彰化慈惠院 臺中廳彰化街ニ在リ清國時代既ニ留養局、養濟院及育嬰堂等ノ慈善事業アリシモ領臺當時ノ變亂ニ際シ自ラ廢頓ニ歸シ明治三十七年七月府令第五十八號ヲ以テ

本院ヲ開設セリ救養ノ區域ハ臺中及南投ノ二廳ニシテ經費ハ慈善事業ニ屬シタル各種ノ資産ニシテ曠廢後地方官ノ保管ニ係リタル財産竝ニ英照皇太后陛下御大喪ノ際ニ於ケル慈惠救濟御下賜金ヲ基本トシ其ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ爾來年々收支ノ殘金ヲ積立テ今セ基金約七萬圓ニ上レリ

ハ嘉義慈惠院 嘉義廳嘉義街ニ在リテ清國時代ニ於ケル育嬰堂ノ後身ナリ明治三十九年三月府令第十六號ヲ以テ嘉義街ニ育嬰院ヲ開設シ育嬰堂ノ事業ト共ニ其ノ財産ヲ引繼キタリ後同院ノ事業擴張ノ必要ヲ生シ同年十月府令第六十二號ヲ以テ現在ノ慈惠院ニ改メ設立區域ハ嘉義廳管内一圓ト定ム

經費ハ在來ノ育嬰堂所屬ノ財産及 英照皇太后陛下御大喪ノ際ニ於ケル慈惠救濟御下賜金竝元斗六、嘉義、鹽水港地方ノ大震災ニ際シ集マリタル義捐金ノ殘額トヲ以テ基本財産ト爲シ其ノ收益ヲ以テ充用シ現在ノ基本金ハ約七萬餘圓ニ達シ尙年々若干ノ收支剩餘金ヲ積立ツツアリ

ニ臺南慈惠院 明治三十二年九月元臺南縣ニ於テ本島在來ノ育嬰堂、郵務局、養濟院、義塚等ノ事業ヲ再興スル目的ヲ以テ設立ス設立區域ハ同三十七年七月府令第五十七號ヲ以テ臺南、阿緞、臺東及花蓮港ノ四廳トス同三十七年十二月基督教牧師ノ創設シタル盲生ノ教育事業ヲ繼承シ盲生教育部ヲ設ケ之ニ獨立自營ニ必要ナル學術技藝ヲ授クルコトトセリ大正四年明治救濟會ヨリ二萬五千圓ノ寄付ヲ受ケ校舍其ノ他ヲ建築シテ盲啞教育ニ從事スルコトナレリ

經費ハ在來ノ各種慈善事業ニ屬シタル財産ニシテ地方官ノ管理シ來レル土地建物等及英照皇太后陛下御大喪ノ際ニ於ケル慈惠救濟ノ御下賜金ヲ以テ基本財産ト爲シ之ヨリ生スル收益ヲ以テ充用ス現在ノ基本金十八萬餘圓ニ達シ尙年々收支ノ殘金ヲ基金ニ加ヘツツアリ

水澎湖普濟院 明治三十六年九月在來ノ育嬰堂ヲ復興シタルモノニシテ初メ育嬰堂ノ名ヲ襲ヒ貧民ノ幼兒ヲ養育スルヲ目的ト爲セシカ同三十四年四月普濟院ト改稱シ救濟ノ範

園ヲ擴大シテ他ノ慈惠院ト同一ナラシメタリ設立區域ハ同三十七年七月府令第五十五號ヲ以テ澎湖廳ト定ム

經費ハ舊清國時代ノ育嬰堂所屬ノ財産ニシテ地方官ノ管理シ來リタル土地建物及英照皇太后陛下御大喪ノ際ニ於ケル御下賜金トヲ以テ基本財産ト爲シ之ヨリ生スル收利ヲ以テ支辨ス現在資産ハ壹萬五千餘圓ニ達セリ

慈惠院ニ關スル統計左ノ如シ

慈惠院資産及被救養人員並救養費

種別	臺北仁濟院	彰化慈惠院	嘉義慈惠院	臺南慈惠院	澎湖普濟院
預金及貸付金	六、一八一	一〇、八九七	五、四八二	四、〇〇八	八九
有價證券	二〇〇	一〇〇	二一〇	三〇〇	五三六
土地建物	二二、五八八	四九、四九五	四、二二二	九八、三〇五	一、二七六
計	二八、九〇七	六〇、八一二	一〇、九一四	一〇六、六一三	一、九〇一
資産(圓)	二八、九〇七	六〇、八一二	一〇、九一四	一〇六、六一三	一、九〇一

救養費(圓)	被救養人員				
	不癱疾具	病傷疾具	老衰	幼弱	盲寡生
計	三三	二八	一五	一七	一
費(圓)	六、八五九	二、〇三〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

資産ハ大正七年三月三十一日現在ニシテ被救養人員及救養費ハ大正六年中ノ事實ナリ

×ハ盲生ノ救養費ニシテ再掲ナリ

五恩賜財團明治救濟會 明治天皇御大喪ニ丁リ下賜セラレタル御内帑金四八、六〇〇圓ヲ基本金ト爲シ本島ニ於テ慈惠救濟ノ事業ヲ爲スカ爲大正元年十一月恩賜財團明治救濟會ヲ設立セリ後 昭憲皇太后御大喪ニ丁リ下賜セラレタル二九、〇〇〇圓ヲモ併セテ基本金ト

第十六算 宗教及救恤

シ廣大無邊ノ聖恩ヲ曠フセサランコトヲ期セリ

六 恩賜財團大正救濟會 今上天皇御即位大禮ニ方リ地方賑恤ノ資トシテ下賜セラレタル御
内帑金四八、六〇〇圓ヲ基本金トシ本島ニ於テ慈善救濟ノ事業ヲ爲スカ爲大正四年十二月
恩賜財團大正救濟會ヲ設立セリ

七 其ノ他 前述セシカ如ク行旅病人及行旅死亡人取扱法ヲ本島ニ施行シ又感化院成徳學院
及三成協會ニ補助金ヲ交付シテ保護監督ヲ爲ス等各般ノ施設ト相俟テ救濟上遺憾ナキヲ期
シツツアリ此ノ他臺灣婦人慈善會、仁濟團爲善團等慈善救濟ニ關スル幾多ノ私設團體アリ

第十七章 衛生

第一節 要旨

本島ニ於ケル衛生事務ハ明治二十八年五月創定臺灣總督府假條例ニ依リ同年七月總督府ノ
開カルルニ當リ總督官房ニ衛生事務所ヲ設置シ全島ノ衛生事務ヲ管掌シタルニ始マリシカ
同年八月總督府條例ノ制定ニ依リ之ヲ廢止シ保健衛生ノコトハ民政局内務部警保課ニ於テ
掌理シ醫事衛生ノ事ハ陸軍局軍醫部ニ於テ取扱フコトト爲セリ越エテ同二十九年三月總督
府條例ノ改正ニ依リ民政局官制ノ發布アリ同年四月ヨリ施行セラルルヤ衛生事務ハ軍隊衛
生ノ外總テ民政局ノ主管タルニ至リ同月同局總務部ニ衛生課ヲ創設セリ爾來官制改正等幾
多ノ變遷ヲ經テ今日ニ及ヒ現制ニ在リテハ民政部警察本署ニ衛生課ヲ置キ保健、醫務、臨
時防疫、阿片及蕃地衛生ノ各係ヲ設ク中央衛生事務ヲ管掌シ地方機關トシテハ廳警務課ニ
衛生係ヲ置キ專ラ之ニ任セリ

領臺當初ニ於ケル本島ノ状態ハ匪賊各地ニ蜂起シテ暴威ヲ振ヒ加フルニ土疫亦各所ニ猖獗
 ナ極メ慘害ヲ逞フシ之カ爲斃ルル者多數ニ上リ内地人ヲシテ轉々不安ノ念ヲ懷カシムルモ
 ノアリキ由來本島ノ人民ハ衛生ノ觀念甚々幼稚ニシテ其ノ日常用ユル飲料水ノ如キ概ネ潮
 濁セル河水又ハ瀦水ヲ使用シ下水ノ施設亦見ルヘキモノナク各戸ヨリ排泄スル汚水ノ如キ
 ハ唯、屋外路傍ニ瀦溜シテ汚穢不潔實ニ名状スヘカラス又住家ノ如キモ多クハ竹材土塊ヲ
 以テ築造シ其ノ通風採光ノ法甚ダ不完全ニシテ晝間尙燈火ヲ用フ其ノ他日常飲食物、市場
 屠畜場並醫療機關等一トシテ衛生的施設ノ見ルヘキモノナク寧ろ惡疾ヲシテ偽成セシムル
 ノ感アリキ是ニ於テ總督府ハ夙ニ之カ改善ヲ企畫シ漸チ遂フテ完成ヲ圖レリ

第二節 衛生機關

一 醫療機關

イ 醫院 醫療機關ノ普及ハ新附民衆ノ啓發救治ニ最須要トスル所ナリ是ヲ以テ總督府ハ
 兵馬倥偬ノ間ニ於テ夙ニ明治二十八年六月臺灣病院ヲ臺北大稻埕ニ創設シ同年七月總督

ヨリ臺灣事務局總裁ニ電請シ在臺北臺灣醫院及第一、第二診察所ニ必要ナル醫師一〇人、
 調劑師九人、看護人二〇人ノ派遣ヲ請ヘリ

明治二十九年五月臺北、臺中、臺南ノ三縣ニ病院ヲ設置シ更ニ同年六月各地方廳ノ具申
 ニ依リ臺北縣ハ淡水、基隆、新竹及宜蘭ノ四箇所ニ、臺中縣ハ鹿港、苗栗、雲林及埔里
 社ノ四箇所ニ、臺南縣ハ嘉義、鳳山、恒春、臺東及澎湖ノ五箇所ニ病院(恒春、臺東ハ診
 斷所)ヲ設置セリ越エテ明治三十年五月醫院官制ヲ獨立セシメ以テ一層規模ノ擴張ヲ圖
 リ臺北、新竹、臺中、嘉義、臺南、鳳山、宜蘭、臺東及澎湖ニ醫院ヲ新設シ且樞要ノ地
 ニ之カ分院ヲ設ケ地方長官ヲシテ監督セシメシカ更ニ三十一年ニ至リ之ヲ改正シテ總督
 直轄トシ臺北、基隆、新竹、臺中、臺南、嘉義、鳳山、宜蘭、臺東及澎湖ノ十醫院ト爲
 セリ其ノ後地方ノ發展ニ伴ヒ之カ開廢ヲ行ヒ現在ニ在リテハ臺北、基隆、宜蘭、新竹、
 臺中、嘉義、臺南、阿緱、臺東、花蓮港、澎湖及打狗ノ十二醫院ニシテ打狗醫院ハ大正
 三年ノ新設ニ係レリ

初メ醫療機關ノ創設セラレルヤ時恰モ民政ノ創始ニ際シ病舎ノ如キ民屋又ハ廟宇ヲ充用シ來リシカ現今ニ在リテハ總テ新築又ハ改築サルルニ至リ就中目下改築中ノ臺北醫院ノ如キハ其ノ規模大ニシテ設備亦完全セリ而シテ大正六年中各醫院ニ於テ取扱ヒタル患者治療日數ヲ明治三十四年中ノ取扱患者ニ比スルニ次ノ如クニシテ殆ト約三倍ニ達セリ是レ本島人カ文明的醫術ノ效果ヲ知悉シ信賴スルニ至リタル結果ニ外ナラサルナリ

年	入	院	外	來	計
明治三十四年		一〇四、五二三		三九〇、五〇六	四九五〇一九
大正六年		二七五、四五四		一一五、四〇五	一、四二九、四六九

口公醫 醫院制度ト同時ニ明治二十九年臺灣公醫規則ノ制定アリ公醫ハ一定ノ土地ニ開業ヲ命シ之ニ月手當ヲ給シテ一般ノ診療並公衆衛生及醫事ニ關スル諸件ヲ輔翼セシメ尙官廳ノ命ニ依リ傳染病豫防並檢案、診斷、鑑定等ノ事務ニ從事セシムル者ニシテ初メ一〇二名ヲ採用シ漸次増員セシカ醫院制度ト相俟テ本島人ノ信賴日ニ益々加ハリ實ニ衛生

保健ニ止ラス統治啓發上ニ裨益スルモノ少カラサルヲ以テ益々之カ必要ヲ認メ明治四十年臺灣公醫規則ヲ改正シ人材ヲ登用スルノ途ヲ開ケリ大正六年末ニ在リテハ一〇三名ニシテ内地人七三名、本島人三〇名アリ而シテ本島人公醫ハ孰モ本島醫學校卒業生ニシテ良好ノ成績ヲ收メツツアリ大正六年中各公醫ノ取扱タル患者數ヲ明治三十八年ニ比スルニ次ノ如クニシテ著シキ増加ヲ呈セリ

年	患者			計	死亡者	公醫一人平均一日取扱患者數
	内地人	本島人	外國人			
明治三十八年	三九、二二三	四、一〇一	一	八〇、三三三	一、三三三	二〇、二
大正六年	七、七五六	二四、一六三	四九九七	三二、四〇八	七、三七一	三、九七

以上ノ外一般醫師ノ取締トシテ臺灣醫業規則ヲ發布シ本島ニ醫師タル者ハ内務大臣ノ免狀ヲ有スル者及臺灣總督ノ醫業免狀ヲ得タル者ニアラサレハ開業スルコトヲ得ストセリ(大正五年一月律令ヲ以テ臺灣醫師令及臺灣齒科醫師令ヲ發布改正ス)然ルニ本島ニハ醫生ト稱シテ同シク一般ノ治療ニ從事スル者アリ醫生ハ本島在來ノ醫師ニシテ是等ハ一ト

シテ正式ノ醫學ヲ修メタル者ニアラス唯、自ラ醫ト稱スル輩ニ外ナラス故テ以テ總督府ハ明治三十四年七月臺灣醫生免許規則ヲ發布シテ取締ヲ爲シ地方廳限リ之ヲ免許シ尙醫術ニ關シテハ公醫ノ監督ヲ受ケシメ三十五年以降ハ新ニ免許ヲ爲ササル結果漸テ逐フテ其ノ數ヲ減シ當初ノ免許人員一、九二八名ニ對シ大正六年末ニハ八八五名ニ遞減セリハ助産婦養成 本島ニテ先生媽ト稱シ助産ノ業ヲ營ム者アリト雖素ヨリ一定ノ教育ナキノミナラス其ノ處置ヤ迷信ニ依ルモノ多ク當ニ救ヒ得ヘキ妊産婦及嬰兒ヲシテ徒ニ重症ニ陥ラシメ遂ニ救フヘカラサルニ至ラシムルコト往々之アリ是ニ於テ乎助産婦養成ノ必要ヲ認メ假ニ臺北醫院ニ使役中ノ本島婦女ニ對シ之カ教養ヲ試ミタルニ其ノ成績意外ニ良好ナルモノアリ故ニ總督府ハ明治四十年助産婦講習規程ヲ定メ官費ヲ以テ養成シ臺北醫院ヲシテ之ニ當ラシメ大正七年四月既ニ第十一回ノ講習ヲ了シ其卒業生累計二〇四名ヲ出セリ

二 調査機關 調査機關ハ臺灣地方病及傳染病調査委員會、臺灣中央衛生會並臨時防疫委員

會、市區計畫委員會等ニシテ以上ハ總督府文官並技術官等ヨリ任命組織セラレ常ニ必要ニ應ジ調査報告其ノ他諮詢審議ノ事ニ從ヘリ

其ノ他各地方廳ニ衛生試驗室アリテ飲食物其ノ他ノ試驗ヲ行ハシム

三 檢疫機關

イ 臨時海港檢疫所 由來本島人ノ多數ハ支那民族ノ移住ニ屬スルヲ以テ對岸支那各地トノ交通頻繁ヲ極メ加フルニ産業ノ發達ト共ニ出入船舶ノ數亦増加チ來シ海港檢疫ノ急務ナルモノアリ領臺當時總督府ハ假ニ船舶檢疫ニ關スル規定ヲ設ケ各地方廳ヲシテ施行セシムル所アリシカ明治三十二年臺灣海港檢疫規則ヲ發布シ更ニ同三十三年ニ至リ臺灣總督府臨時海港檢疫所官制ノ發布ト爲リ臨時必要ニ應シテ之カ開設ヲ爲スコトトセリ大正五年七月以降内地各府縣並對岸支那及南洋方面ニ「コレラ」病ノ大流行アリ海港檢疫ノ必要ヲ認メタルヲ以テ大正五年十月十日臺南廳下打狗港ニ臨時海港檢疫所ヲ開設シ引續キ目下檢疫事務ヲ掌レリ

口港務所 港則及港内警察、其ノ他海港檢疫事務ヲ管掌スル爲明治四十四年臺灣總督府
 港務所官制ノ發布アリ現在ノ港務所ハ基隆ノ一箇所ニシテ淡水ニ其ノ出張所アリ港務
 官、港務醫官、書記、港吏、港務醫官補、港務獸醫、港務藥劑手等ノ官吏アリテ常ニ其
 ノ事ニ當レリ

ハ其ノ他 臨時傳染病ノ流行ニ當リ檢疫委員ヲ設置スル規程アリ廳長又ハ港務所長之ヲ
 任命ス又船舶檢疫規則及汽車檢疫規則ナルモノアリ臨時必要ニ應シ總督ノ認可ヲ受ケ廳
 長及港務所長之ヲ行フ

衛生機關及海港檢疫ノ統計左ノ如シ

衛生機關

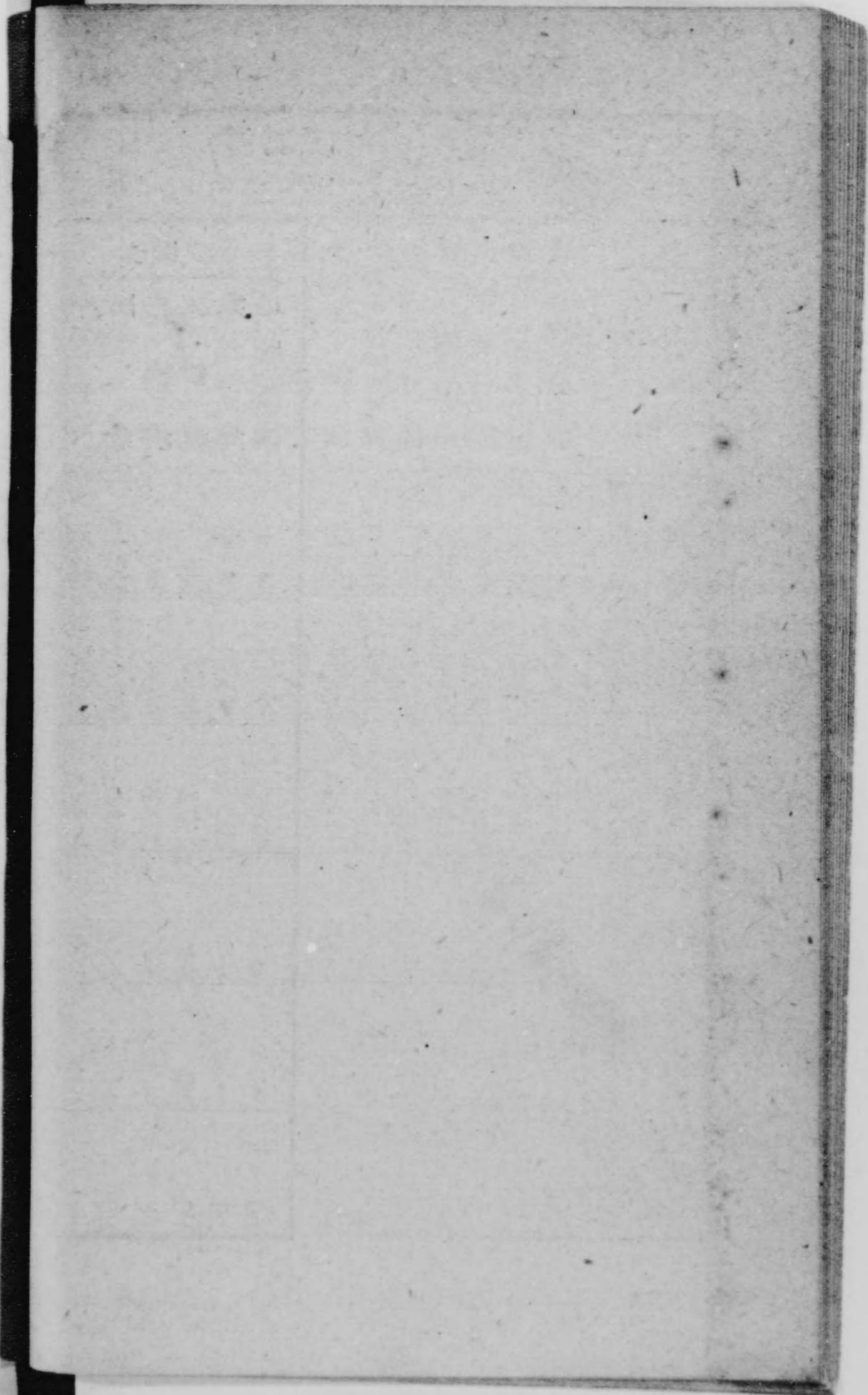
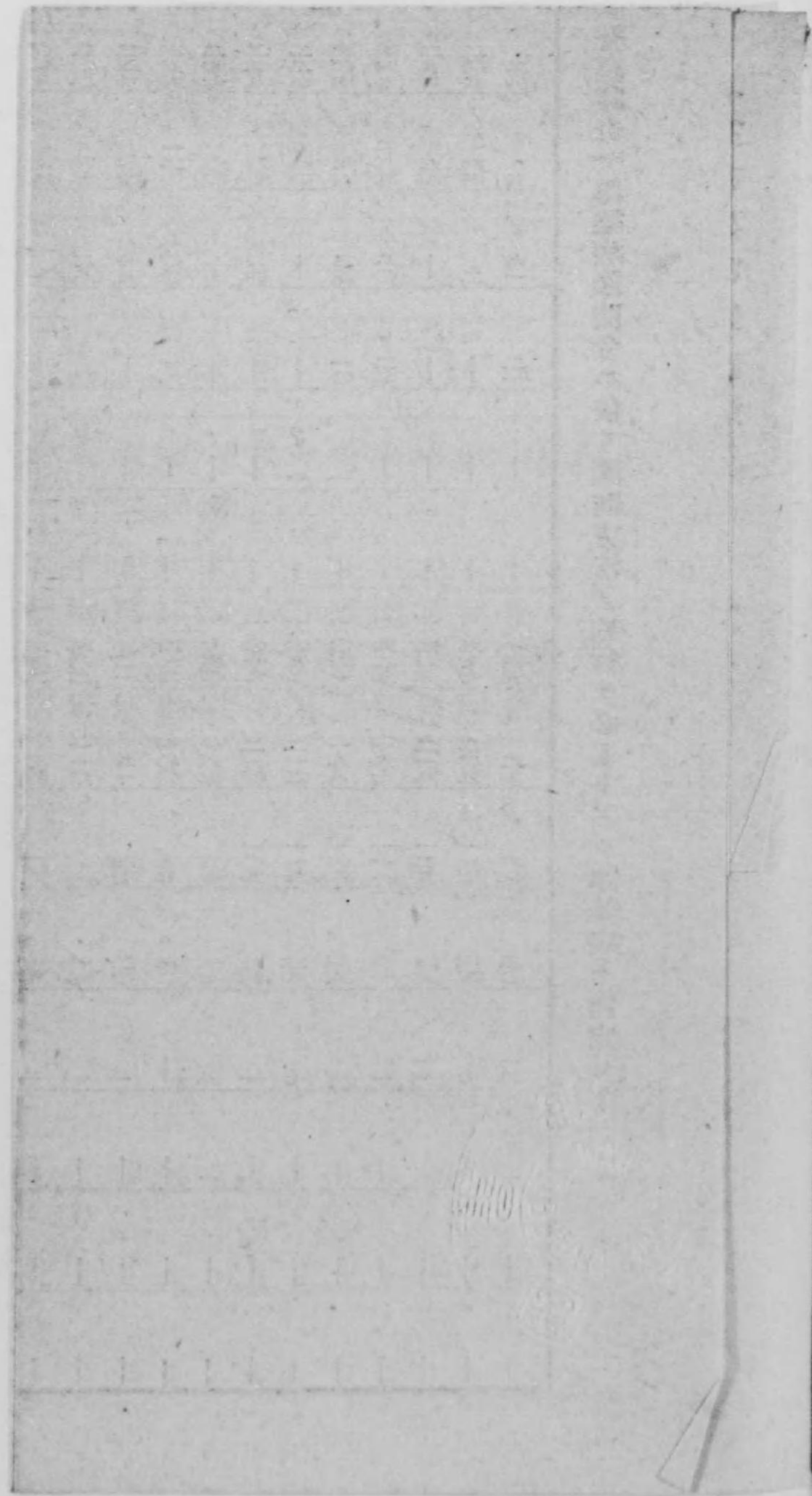
大正六年十二月三十一日

種別	臺北	宜蘭	桃園	新竹	臺中	南投	嘉義	臺南	阿緞	臺東	花蓮港	澎湖	計
醫院	八	二	一	一	二	一	二	三	一	一	一	一	一九
官立	二	一	一	一	一	一	一	二	一	一	一	一	二

醫師及醫生	醫師		醫生		藥劑師	助產	製藥
	公立	私立	公立	私立			
醫師	一五	二五	四七	一三	九	七	一六
醫生	一三	八三	九	一三三	二八	四	九
藥劑師	一	一	一	一	一	一	一
助產	一	一	一	一	一	一	一
製藥	一	一	一	一	一	一	一
計	一五	二五	四七	一三三	二八	四	九
公立	一	一	一	一	一	一	一
私立	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一
藥劑師	一	一	一	一	一	一	一
助產	一	一	一	一	一	一	一
製藥	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一
公立	一	一	一	一	一	一	一
私立	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一
藥劑師	一	一	一	一	一	一	一
助產	一	一	一	一	一	一	一
製藥	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一
公立	一	一	一	一	一	一	一
私立	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一
藥劑師	一	一	一	一	一	一	一
助產	一	一	一	一	一	一	一
製藥	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一
公立	一	一	一	一	一	一	一
私立	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一
藥劑師	一	一	一	一	一	一	一
助產	一	一	一	一	一	一	一
製藥	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一
公立	一	一	一	一	一	一	一
私立	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一
藥劑師	一	一	一	一	一	一	一
助產	一	一	一	一	一	一	一
製藥	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一
公立	一	一	一	一	一	一	一
私立	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一
藥劑師	一	一	一	一	一	一	一
助產	一	一	一	一	一	一	一
製藥	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一
公立	一	一	一	一	一	一	一
私立	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一

病類	取扱患者實數			百分比		
	明治三十三年	明治四十年	大正六年	明治三十三年	明治四十年	大正六年
傳染性病及全身病	四二、六四四	六四、五〇一	一一〇、二五九	三二・八	二八・四	二二・九
發育及營養的病	一七、五五六	三三、六三三	四七、七二一	一・三	一・五	一・〇
皮膚及筋病	一九、九五五	一八、〇四〇	三二、七三三	一五・四	七・九	七・一
骨及關節病	二、九五六	二、五五二	四、二八〇	二・三	一・一	〇・九
血行器病	五五〇	一、九九〇	二、六七三	〇・四	〇・九	〇・六
神經系及五官器病	一三、八三七	二九、五三六	五八、二一一	一〇・六	一三・〇	一三・六
呼吸器病	一三、二八六	三二、九二〇	九〇、三二一	一〇・二	一四・〇	一九・六
消化器病	二二、四〇七	四六、三〇〇	一〇〇、八一〇	一六・五	二〇・四	二二・九
泌尿及生殖器病	五、五三九	一〇、六九六	二〇、九八五	四・三	四・七	四・六
外傷及外科的病	七、四五七	一六、九三三	三〇、九三五	五・七	七・五	六・七
中毒病	四七	五二九	四三二	〇・〇	〇・二	〇・一
病症不詳	六一五	一、〇〇三	四八、一三	〇・五	〇・四	一・〇
計	一三〇、〇四九	二二七、三六三	四六一、一〇七	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

前欄ノ内		マ	ラ	リ	ア
脚氣	脚柳病	花柳病	肺核病	癩病	甲狀腺腫
二七、四四一	一九八五	?	六五七	?	?
四九、一三九	一、五二〇	?	二、〇七七	?	?
八一、七三九	二、五三〇	一四、八三八	三、二一六	六一	八五
二二・二	一・五		〇・五		
二二・二	一・五		〇・九		
一七七	〇・六	三・二	〇・七	〇・〇	〇・〇



傳染病患者及死亡

年	コレラ		ペスト		赤痢		痘瘡		發疹チフス		腸チフス		ゲフテリア	
	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡
明治二十九年	1	1	258	157	?	155	401	401	1	1	77	33	1	1
同三十二年	1	1	730	566	253	94	282	33	1	1	93	44	7	2
同三十三年	1	1	1,233	882	253	94	282	33	1	1	93	44	7	2
同三十四年	1	1	2,637	1,995	373	96	398	5	1	1	69	24	5	2
同三十五年	1	1	1,079	809	381	99	416	6	1	1	157	37	7	1
同三十六年	1	1	4,496	3,670	658	261	261	2	1	1	24	37	4	1
同三十七年	1	1	886	709	170	51	39	1	1	1	141	53	8	1
同三十八年	1	1	4,500	3,374	160	55	23	1	1	1	189	56	39	6
同三十九年	1	1	2,308	1,853	754	188	285	1	1	1	192	41	4	1
同四十年	1	1	2,398	2,100	110	47	23	1	1	1	141	42	5	1
同四十一年	1	1	3,272	2,609	147	71	19	1	1	1	248	86	6	1
同四十二年	1	1	2,592	2,241	207	74	21	1	1	1	352	74	26	1
同四十三年	1	1	1,270	1,059	202	95	28	1	1	1	382	110	31	1
同四十四年	1	1	1,026	848	249	84	15	1	1	1	321	91	47	1
同四十五年	1	1	191	181	359	120	102	1	1	1	454	100	67	1
同四十六年	1	1	380	334	207	80	3	1	1	1	760	163	100	1
同四十七年	1	1	223	185	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同四十八年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同四十九年	1	1	333	334	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同五十年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同五十一年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同五十三年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同五十四年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同五十五年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同五十六年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同五十七年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同五十八年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同五十九年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同六十年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同六十一年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同六十二年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同六十三年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同六十四年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同六十五年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同六十六年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同六十七年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同六十八年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同六十九年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37
同七十年	1	1	256	254	225	87	4	1	1	1	109	22	109	37

大正七年六月一日ノ府令第三十六號ヲ以テ流行性腦脊髄膜炎ヲ傳染病豫防令ニ依リ豫防方法ノ施行ヲ必要トスル傳染病ト指

四月末

傳染病患者及死亡

患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡				
コレラ	七四六	六三三	ハスト	二五八	赤痢	患者	死亡	痘瘡	患者	死亡	發疹チアス	患者	死亡	腸チアス	患者	死亡	デフテリア	患者	死亡	猖紅熱	患者	死亡	流行性腦脊髄膜炎	患者	死亡
患者	一〇七九	一〇七九	患者	一〇七九	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者
患者	一〇七九	一〇七九	患者	一〇七九	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者
患者	一〇七九	一〇七九	患者	一〇七九	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者
患者	一〇七九	一〇七九	患者	一〇七九	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者
患者	一〇七九	一〇七九	患者	一〇七九	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者
患者	一〇七九	一〇七九	患者	一〇七九	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者
患者	一〇七九	一〇七九	患者	一〇七九	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者
患者	一〇七九	一〇七九	患者	一〇七九	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者	死亡	患者

府令第三十六號ヲ以テ流行性腦脊髄膜炎ヲ傳染病豫防令ニ依リ豫防方法ノ施行ヲ必要トスル傳染病ト指定セリ

第三節 防疫

一臨時防疫 防疫ノ事務ハ初メ衛生課ノ一部ニ屬セシカ明治三十六年「ペスト」ノ猖獗ヲ極ムルニ當リ之ヲ分離シテ特ニ臨時防疫課ヲ設置セラレシカ其ノ後更ニ復舊シテ衛生課ノ一部ニ屬セリ而シテ臨時防疫係ノ主ナル事務ハ傳染病中最傳染竝經過ノ劇烈ナル「ペスト」ノ豫防撲滅ト本島風土病中最廣ク蔓延シ而モ其ノ害毒ノ甚大ナル「マラリア」ノ防遏ヲ爲スニアリ

イ「ペスト」防遏 本島ニ「ペスト」ノ發生ヲ見タルハ領臺ノ翌年即チ明治二十九年五月臺南縣安平街ニ發生セルヲ以テ初トス爾來日ニ發生隣接セル臺南ヲ侵シ北部ハ同年九月臺北市街ニ發生ヲ見漸々流行ノ勢ヲ呈セリ更ニ三十二年中部鹿港街ニ流行ヲ見ルニ至レリ而シテ之カ病原ハ孰モ對岸廈門地方ヨリ安平、淡水若ハ鹿港ニ輸入セルモノニシテ病毒逐年其ノ根底ヲ固メ漸次蔓延シ東海岸地方ヲ除ク各廳全部之カ侵襲ヲ蒙ルニ至レリ當初ニ於ケル防疫措施ハ單ニ患者ノ發見、隔離消毒ニ在リシカ明治三十四年末鼠族ノ驅除

ヲ以テ防疫ノ大方針トシ不潔家屋ノ取毀並市區改正ヲ行ヒ之ニ兼メルニ隔離消毒ヲ併行シ爾來此ノ方針ニ基キ銳意之カ防遏ニ力ヲ盡シタル結果十數年ニ互リテ慘禍ヲ逞フセシ本病モ全ク其ノ跡ヲ絶ツニ至レリ然ルニ大正五年七月初旬突然臺北淡水街ニ新患者發生シ同六年四月迄發患一二名ニ及ヒタリ而シテ其ノ病系ハ明ナラサルモ同五年五月頃ヨリ對岸福州地方ニ於テ該病流行シ頗ル猖獗ヲ極メタルヲ以テ同地方ト交通ノ頻繁ナル淡水街ニ新患者ノ發生ヲ見ルニ至リシハ全ク對岸地方ヨリ新ニ病毒ヲ輸入セシモノナルヘシ依リテ臺北廳ニ於テハ檢疫委員ヲ設ケ淡水街及臺北市街ニ防疫作業ヲ施行シ極力之カ防遏ニ努メタル結果其ノ後患者ヲ出サス全ク終熄ヲ告ケタルヲ以テ大正六年八月三十一日限檢疫委員ヲ廢止シ依然鼠族買収ヲ爲シツツアリ

明治三十五年以降大正六年ニ至ル國庫傳染病豫防費及公共衛生費、捕鼠過怠金ニテ買収並義務捕鼠頭數各廳累計五千四百四十四萬六千二百九十頭ニ及ヘリ

ロ「マラリア」防遏 「マラリア」ハ風土病トシテ其ノ病毒全島ニ彌蔓シ年々其ノ患者數ナ

カラス總督府ハ夙ニ之カ豫防撲滅ノ急務ナルヲ認メ明治四十三年防遏策ヲ樹テ先ツ各廳ニ對シ一般的防遏作業ヲ督勵シ主要ナル「マラリア」流行地ニ對シテハ特別防遏方法ヲ施行シ爾來銳意之カ撲滅ニ努メ漸次其ノ效果ヲ收メツツアリ而シテ今後尙經費ノ許ス限リ益々擴張ノ要ヲ認メ其ノ畫策中ニ在リ防遏方法ハ主トシテ施行地域ノ住民ニ對シ血液検査ヲ行ヒ依テ檢出セル原蟲保有者及患者ニ對シ一定期間(三十日間二十八日)無料服藥ヲ命シ且蚊帳ノ使用其ノ他防蚊施設並蚊族發生防止ヲ目的トスル清潔保持ヲ勵行スルモノトス最近五箇年間ノ成績ヲ概括スルニ左ノ如シ

年	施行箇所檢血延人員	原蟲保有者總數	治療人員	マラリア患者死	マラリア死亡
大正二年	一五	六三九九	九二三七	四八一七	二七
同三年	一五	六八九一	九九七一	四七三二	四五
同四年	一九	二五八三六	一八、五三一	一一、三二七	一六八
同五年	二二	四二、六七四	一八、九九七	一〇、〇一四	一一〇
同六年	四四	六一〇、六七六	二二、九九八	一一、五四一	一七二

一三六
 一三二
 〇五九
 二一六
 二〇三
 二〇九
 一四七

一三六
 一三二
 〇五九
 二一六
 二〇三
 二〇九
 一四七

大正六年度ニ於ケル檢血成績左ノ如シ

廳別	施行地名	檢血延人員	原蟲保有者總數	檢血人員百ニ付原蟲保有者											
				大正六年四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	大正七年一月	二月	
臺北	北投	四〇二〇	二二	〇・六七	〇・六四	〇・二九	一・七九	〇・三〇	〇・三二	〇・三三	〇・三五	〇・三五	〇・三六	〇・三七	
	小基隆	六六四五	三五	〇・五〇	〇・一六	〇・三四	〇・八五	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・三五	〇・三五	〇・三五	〇・五六	
臺北	金包里	一一三〇	二〇			二・七七									
	焱仔寮	八二〇三	一四												
宜蘭	頂雙溪	一二七四四	一三〇	〇・八九	一・〇〇	二・五六	二・九〇	二・〇〇	二・〇〇	二・一五	一・九五	一・九五	一・七八	一・〇九	
	石碇	六二〇二	一〇七	三・九七	一・六五	二・二一	二・二六	一・三二	一・〇一	一・〇一	一・〇一	一・〇一	一・〇一	一・〇一	
桃園	蘇澳	一四八五一	三六六	七・三九	五・八	二・二	二・二八	〇・九五	一・〇九	一・〇九	一・〇九	一・〇九	一・〇九	一・〇九	
	成福	五七六九	一〇六	〇・八九		一・一五		一・二六							
新竹	橫溪	九〇一七	七二	〇・七〇		〇・九二		一・〇〇							
	大寮	一九三五	一〇六												
新臺南	桃園	二一四九八	二九五												
	員林	三三〇三三	四六六	一・四四	一・二八	一・九八	一・八四	一・七四	二・〇七	二・二六	二・二六	二・二六	二・二六	二・二六	
嘉義	林圯埔	一八四四八	三三九	一・九七	一・九七	一・七二	二・九四	一・二四	一・七四	二・〇七	二・〇七	二・〇七	二・〇七	二・〇七	
	鹽水	四一三一八	八八八	一・〇四	一・四八	一・三三	二・七五	二・四三	四・二三	五・三一	五・三一	五・三一	五・三一	五・三一	
臺南	嘉南	二六六三五	一三五四												
	關仔頭	二七九	一六二	二・八七	三・三三	二・八七	一・〇三	一・〇三	一・〇三	一・〇三	一・〇三	一・〇三	一・〇三	一・〇三	
阿緞	馬稠	三三九	二八九												
	竹仔門	五九六一	二八九												
臺東	鳳山	三五四二	二二四	六・七一	六・七五	六・〇七	八・八一	八・〇一	四・六六	四・六六	四・六六	四・六六	四・六六	四・六六	
	嗎吧	一〇八二	四五四	五・一四	二・九五	四・一〇	二・七九	四・六四	三・九三	四・二九	四・二九	四・二九	四・二九	四・二九	
澎湖	阿港	一六九九六	二五九	二・四〇	二・二三	二・一五	一・六九	一・七三	一・四四	一・四四	一・四四	一・四四	一・四四	一・四四	
	潮州	六三〇三	二二二												
花蓮	枋寮	七九一八	一七九	三・七〇	〇・七四	一・七二	五・五五	二・二八	二・二八	二・二八	二・二八	二・二八	二・二八	二・二八	
	蕃仔埔	三三七八	六六	二・四八	〇・八八	二・〇七	二・二七	一・一五	一・一五	一・一五	一・一五	一・一五	一・一五	一・一五	
澎湖	澎湖	一四九一	二九六												
	萬里	五八五八	二六五												
澎湖	成廣	六六七九	三六四	四・九一	七・三三	八・七一	一・〇二八	四・五三	五・七二	五・七二	五・七二	五・七二	五・七二	五・七二	
	卑南	九六二三	四四五	七・八一	二・〇四	二・八二	六・一七	四・二二	二・七五	三・三二	三・三二	三・三二	三・三二	三・三二	
澎湖	鹿野	一八四四七	四三一												
	旭野	九二五	三〇												
澎湖	花蓮	一七四	二六												
	玉里	三三三三	四一八	一・一三	一・五四	一・八四	二・〇五	一・九六	二・一一	一・八六	一・八六	二・〇三	一・八一	一・八一	
澎湖	壽里	二六四九	一七一	〇・八一	〇・六五	一・一六	〇・九六	〇・七八	〇・七五	〇・七五	〇・七五	〇・七五	〇・七五	〇・七五	
	鳳林	一三五六三	三四〇	二・七三	一・九四	二・〇四	二・一五	三・〇四	二・九三	二・九三	二・九三	二・九三	二・九三	二・九三	
澎湖	吉野	一一〇〇五	七七	一・〇三八	二・〇〇	九・四七	六・〇二	五・六九	五・四九	五・四九	五・四九	五・四九	五・四九	五・四九	
	澎湖	二二四一五	六四八	二・六一	二・一九	二・〇二	二・四五	三・一九	二・九一	二・九一	二・九一	二・九一	二・九一	二・九一	
澎湖	澎湖	六〇六七六	一六二九三												
	澎湖	六〇六七六	一六二九三												

馬稠後ハ大正六年五月ヨリ竹仔門、吉野村ハ八月ヨリ蘇灣、桃園外五庄大湖、林圯埔、埤仔頭、關帝廟、六龜里、卑南各地ハ九月ヨリ大寮外六庄、店仔口、萬丹ノ各地ハ十月ヨリ旭村、鹿野村ハ大正七年二月ヨリ防遏方法ヲ施行ス
施行地名中〇印ハ國庫支辨△印ハ公共衛生費支辨無印ハ自辨ナリ

大正六年度ニ於ケル檢血成績左ノ如シ

施行地名	檢血延		檢血人員百ニ付原蟲保有者											
	人員	者總數	大正六年四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	大正七年一月	二月	三月
北投	四〇二〇	二二	〇・六七	〇・六四	〇・二九	一・七九	〇・三〇	〇・三二	〇・三二	〇・三二	〇・三五	〇・三五	〇・三五	〇・三五
小基隆	六六四五	三五	〇・五〇	〇・二六	〇・三四	〇・八五	〇・三八	〇・三八	〇・三五	〇・三五	〇・三五	〇・三五	〇・三五	〇・三五
金包里	一一三〇	二〇	〇・一四	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇
焮仔寮	八二〇三	一一	〇・八九	〇・〇〇	〇・二五	〇・二九	〇・三〇	〇・三〇	〇・三〇	〇・三〇	〇・三〇	〇・三〇	〇・三〇	〇・三〇
頂溪	一二七四四	一三〇	〇・八九	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇
石碇	六二〇二	一四	〇・七三	〇・一五	〇・二二	〇・二八	〇・二八	〇・二八	〇・二八	〇・二八	〇・二八	〇・二八	〇・二八	〇・二八
蘇澳	一四八五一	三六	〇・八九	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇
成福	五七六九	一〇六	〇・八九	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇
大嶺溪	九〇一七	七二	〇・七〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇
外園	一九三五	一〇六	〇・七〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇
外五庄	一一四九八	二九五	〇・六六	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇	〇・一〇
員林	三二〇三二	四六六	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
大埔	一八四四八	三一九	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
林埤	二六六三五	一三五	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
嘉水	九四六七七	二四四	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
鹽水	四一三一八	八八八	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
店仔口	一九二二五	六七七	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
竹塹	一〇八二二	四七	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
南義	三三九四九	二六二	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
馬仔頭	三五四二四	二六二	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
鳳山	一〇八二二	四七	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
關帝廟	七二五八	一三三	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
阿帝廟	二七七七九	四七二	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
潮寮	三三七八	六六	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
枋寮	七九一八	一七九	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
阿里港	六三〇三	二二二	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
萬丹	一六九九六	二五九	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
萬龜里	九一九	一七	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
成廣	五八五八	二九六	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
成廣	六六七九	三六四	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
鹿野	九六二二	四四二	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
鹿野	一八四四七	四三一	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
鹿野	九二五	三〇	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
鹿野	一一七四	二六	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
花蓮港	三四三三三	四一八	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
花蓮港	二一六四九	一七一	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
玉里	一三五五三	三〇四	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
壽里	一一二五二	七七	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
鳳林	一一〇〇五	二〇二	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
吉野村	一四九二二	三五二	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
澎湖島	一二四一五	三五二	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
澎湖島	二二四一五	六四八	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八
澎湖島	六〇六七六	一六二九三	〇・一四	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八	〇・一八

馬欄後ハ大正六年五月ヨリ竹仔門、吉野村ハ八月ヨリ蘇灣、桃園外五庄大湖、林埤埔、埤仔頭、關帝廟、六龜里、卑南ノ各地ハ九月ヨリ大嶺外六庄、店仔口、萬丹ノ各地ハ十月ヨリ旭村、鹿野村ハ大正七年二月ヨリ防遏方法ヲ施行ス
施行地名中〇印ハ國庫支辨△印ハ公共衛生費支辨無印ハ自辨ナリ

大正七年度施行ノ箇所ハ左ノ如シ (大正七年五月末日調査)

廳	國庫支辨	公共衛生費支辨	自辨
臺北	北投、頂双溪、淡水、蘇灣、叭哩沙	煥仔寮、石碇、小基隆、下中股	
宜蘭	蘇灣、叭哩沙	廳直轄、八庄大崙、外十	
桃園	咸菜礮	一庄、三角湧外二庄、成福	
新竹	大湖、南湖		
臺中	員林		
南投	林圯埔、集集		
嘉義	嘉義街外二庄、鹽水港、店仔口、竹頭崎、中埔	馬稠後、竹仔門、關仔嶺	
臺南	鳳山、關帝廟、楠梓坑、大目降、阿緞街、阿里港、六龜里、潮	萬丹	
阿緞	州、枋寮、甲仙埔		阿緞街區域內、蕃仔埔
臺東	卑南、成廣灣、里壠、巴聖衛		旭村、鹿野村
花蓮港	花蓮港、壽村、吉野村、玉里、豐田村、鳳林、瑞穗村		

第十七章 衛生

五七七

ハ腸窒扶私 年々多少ノ發生ヲ見シカ近年稍々増加ノ傾向ヲ示シ殊ニ臺北市街ニ在リテハ至ル所ニ發生スルヲ以テ總督府ハ之カ根本的防遏ヲ策シ大正二年臺北廳ニ特ニ防疫掛ヲ設置シ防疫組合ト協力シテ專ラ之カ撲滅ニ當リシメ諸種ノ施設ト共ニ患者ハ全部病院ニ收容スルノ方針ヲ執レリ大正元年以降臺北市街ノ患者及死亡者次ノ如シ

年	患者	死亡者
大正元年	三九五	六四
同 二年	四一九	七七
同 三年	四〇九	七三
同 四年	三二〇	六三
同 五年	四六四	七〇
同 六年	三九二	九一

同 七年(五月末)

三四

七

ニ防疫組合 傳染病及風土病豫防ノ爲臺灣防疫組合規則ニ依リ廳長ニ於テ防疫組合ヲ設置セシメ區域内ノ各戸ヲ以テ組合員ニ加入セシム現在本島主要ノ市街地ニ二箇所ニ之ヲ設置シ各組合著々事業ノ目的ヲ遂行シツツアリ

第四節 種痘及檢徴

一 種痘 種痘ハ本島領有以前ヨリ醫生又ハ外國宣教師等ノ手ニ依リテ一部地方ニ施行セラレタルモ固ヨリ各自ノ任意タリ依リテ總督府ハ明治二十九年種痘普及ノ訓令ヲ發シ爾來之ニ基キテ各廳適宜ノ方法ヲ講シタリシカ公衆衛生上統一法規ノ下ニ強制スルノ必要ヲ認メ明治三十九年律令ヲ以テ臺灣種痘規則ヲ發布シ定期及臨時種痘ノ二種ニ分テリ定期種痘ハ毎年二月ヨリ四月マテノ間ニ於テ生後一箇年未滿ノ者ニ行ヒ臨時種痘ハ廳長ニ於テ特ニ必要ト認ムル場合之カ施行ヲ爲スコトトセリ

當初本島人ハ甚々之ヲ嫌厭スルノ傾向アリシモ近來自ラ進ミテ之ニ應スルニ至レリ

二檢徴 領臺當時ハ一時花柳病著シク蔓延セリ依リテ總督府ハ之カ豫防ニ關シ明治三十年七月標準ヲ示シテ地方官ニ内訓スル所アリ爾來密賣淫ノ取締ト驅徴院設立等各地適宜ノ方法ヲ執リシカ取締上統一ヲ缺ク嫌アルヲ以テ更ニ三十九年四月娼妓檢診及治療規則標準ヲ定メ地方長官ニ通達シテ其ノ方法ヲ劃一ニスルヲ得タリ

種痘

年	定期種痘		臨時種痘	合計		百分比例			
	第一回	第二回		合計	合計	感	不感		
大正二年	一三〇、二二五	七〇、九六六	四八	六二	一三四、〇〇七	八、二三五	一四二、二四二	九四、二一	五、七九
同 二年	二八、七五四	五八、五三三	—	—	一三、五四六	七、三五三	一三〇、八九九	九四、三八	五、六二
同 三年	二七、一四七	五七、五六	—	—	一四六、八九七	四、五、三四七	一九二、二四四	七六、四〇	二、三六〇
同 四年	二七、八五〇	八六、五九九	—	—	一三五、一三三	二、三、六八	一五六、四八一	八六、三四	一、三、六六
同 五年	二六、二二八	五八、一五	—	—	一二、一八二	七、三九二	一二八、五七四	九四、三〇	五、七〇
同 六年	一〇九、二八九	六〇、七六	—	—	一一三、五八一	七、二二四	一二〇、七九五	九四、〇〇	六、〇〇

治療

大正六年

病者	延者	人員	治療		付患者	療日數
			日數	員數		
結核性癩病	接吻傳染	計	無病者	計	—	—
—	—	—	—	—	—	—

妊娠四箇月以上又ハ稼業ニ堪エスト診断シ休業ヲ命シタル者左ノ如シ

計	澎湖	花蓮	臺南	嘉義	臺中	新竹	宜蘭	臺北	廳	
									内地人	本島人
二五	一	一	四					一九	内地人	妊娠四箇月以上ノ者
六			三	三					本島人	稼業ニ堪エスト診断シタル者
三	一	一	七	三				一九	計	三箇月以上治療ヲ要シタル者
									内地人	
									本島人	
									計	
二	一		二					八	内地人	
									本島人	
二	一		二					八	計	

第五節 衛生工事其ノ他ノ施設

一 上水下水

イ 上水 凡ソ衛生保健ノ施設トシテ上水制度ノ緊要ナルハ論ヲ俟タサル所ナリ熱帶植民地ニ於テ特ニ然リ領臺當時ハ主トシテ掘井又ハ河水ニ之ヲ需メタリシカ河水ハ勿論掘井ノ如キモ土地ノ不潔ト構造ノ不完全ナル爲ニ水質甚タ不良ニシテ飲料ニ適スルモノ少ナシ幸ニ臺北附近ニ於テハ鑽井ヲ穿チテ地下水ヲ噴出セシムルヲ得タルモ衛生思想ニ乏シキ島民ノ汲取、其ノ他不潔ヲ極メ水質ヲ穢ス者甚シク爲ニ總督府ハ中央給水法ヲ採ルニ決シ漸チ逐フテ之カ工事ヲ各地ニ施シ既ニ完成シ又ハ起工中ニ係ルモノノ外尙其計畫中ニ屬スルモノ多シ(水道ノ部參照)

ロ 下水 驟雨多キ南部二、三市街ニ於テハ稍々排水工事トモ見ルヘキ下水アリト雖而モ自然ノ放流ニ任セ各戸ヨリ排泄スル汚水ノ如キハ屋外路傍ニ瀦溜シ不潔ヲ極ムルヲ以テ總督府ハ夙ニ之カ改善ヲ企畫シ漸次全島各市ニ適切ナル下水路ヲ施設シ現今凡ソ市街ト

名付クルモノハ小市街ト雖之カ多少ノ施設ヲ見サルナキニ至レリ

二 住家ノ改善 本島ニ於ケル住家ハ由來何等ノ建築制限ナカリシ結果採光通風ノ不完全ナルハ勿論其ノ他衛生上ノ缺點少カラス其ノ建築材料ノ如キモ多クハ竹又ハ土塊ヲ使用セル爲鼠族ノ繁殖ニ便シ又一朝風雨ノ來襲ニ際會セハ破損倒潰四隣相次キ死者ヲ出スコト少ナカラズ殊ニ市街地ニ在リテハ街衢甚不整ニシテ交通上ノ不便亦甚シキモノアリ故ニ總督府ハ明治三十一年市區改正委員會ヲ組織シ同三十三年ニ至リ律令ヲ以テ家屋建築規則ヲ發布シ新築家屋ノ取締並舊家屋ノ改築補修又ハ取毀ヲ命スルコトトセリ而シテ現在之カ施行ヲ爲セルハ臺北、基隆、新竹、打狗、臺南、嘉義、臺中及阿緞ノ八市街ニシテ其ノ結果ハ下水路ノ敷設ト相俟テ市街ノ體裁ヲ一新シ又衛生上ノ效果大ナルヲ認ム然レトモ一面家屋賃貸價格ノ暴騰ヲ助長シ細民ヲシテ住居ノ缺乏ヲ嘆セシムルノ傾向アリタルヲ以テ廳公共衛生費ヲ以テ臺北ニ二二九戸、臺中ニ五三戸、嘉義ニ五〇戸、阿緞ニ二八戸ノ細民家屋ヲ建築セシメ尙打狗ニハ婦人慈善會ノ事業トシテ二六〇戸ヲ建築シ以テ之カ急ニ應セシメタリ

三市場及屠畜場

五八四

イ市場 本島ニ於ケル市場ハ單ニ街路ノ兩側又ハ廟宇ノ近傍ニ飲食物又ハ日用雜貨類ヲ陳列シテ之ヲ販賣シ何等施設ノ見ルヘキモノナシ從テ衛生上ノ缺點少カラサルヲ以テ初メ之ヲ私人ニ經營セシメタルモ衛生上ノ要求ト私人ノ利益トハ動モスレハ一致セサルモノアルヲ以テ更ニ之ヲ公共衛生費ノ經營ニ移シ其ノ收益ハ公共衛生費ノ費途ニ充當スルコトトセリ而シテ現今ニ在リテハ臺北、臺中、臺南各市街ヲ初メ島内樞要ノ地ニハ之カ設立ヲ見サルモノナク大正六年末ハ大小合シテ一六〇箇所ニ及ヒタリ

ロ屠畜場 屠畜ハ古來本島ニ行ハレタリト雖屠場ノ設置ナク任意ノ場所ニテ各自屠殺セリ領臺後地方廳ハ私設屠畜場ヲ設置セシメ之カ取締ヲ爲シタルモ未タ衛生上ノ要求ヲ満足セシムルニ至ラサルヲ以テ明治三十三年之カ管理ヲ公共衛生費ニ移シ更ニ四十四年屠畜場設置規程ヲ定メ之カ設備ノ改善ヲ圖リタル結果近時稍々完全ナルモノヲ見ルニ至レリ大正六年末ノ數ハ九一二箇所ニ及ヒ屠畜頭數牛豚及山羊ヲ合セ一箇年約九〇萬頭ニ達

セリ

四墓地及火葬場 明治二十九年民政施行ノ初ニ當リテ舊政府時代ニ於ケル墓地及埋葬ニ關スル例規ヲ調査セシカ何等制限の規定ナシ而シテ當時ノ民度事情ハ内地ノ如ク劃一ノ取締ヲ實行シ能サルモノアリ然レトモ之ヲ從來ノ如ク放任スルハ衛生上ノ缺點少カラサルモノアルヲ以テ當時適應ノ取締標準ヲ定メ土地ノ狀況ヲ察シ適宜取締ヲ設クヘキ旨同年六月地方官ニ訓令セリ其ノ後渡臺内地人ノ増加ニ伴ヒ火葬場ヲ設置スルモノアリシモ其ノ構造不完全ニシテ等閑ニ附シ難キモノアルヲ以テ構造及掃除等ニ關シ標準ヲ定メ三十年二月地方官ニ通達セリ次テ三十九年二月府令第八號ヲ以テ墓地火葬場及埋火葬取締規則ヲ發布シ同時ニ之カ施行細則標準ヲ各廳長ニ通達シ其ノ地方ニ適應セル取締規則ヲ設ケシメタリ本則ノ大要ハ私有墓地ヲ禁止シ街庄社ノ共同經營タルヘキコトヲ定メ其ノ位置ニ就キ(一)道路鐵道河川ニ沿ハス人家ヲ距ルコト凡ソ六十間以上ナルコト、(二)高燥ニシテ飲用水ニ關係ナキ土地タルヲ要スルコトトシ又墳穴ノ深サヲ定メ棺ノ頂面ト地盤面トノ間隔ハ二尺以上

タルヘキコトトシ從來ノ地上ニ棺ヲ置キ之ニ土ヲ蓋フノ式ヲ禁止セリ是レ犬ニ發掘セラレ雨水ニ暴露セラレル等風俗上、衛生上ノ缺點少カラサレハナリ又火葬場ノ設置ニ就キ制限ヲ置キ(一)人家及公衆輻輳ノ地ヲ距ル百二十間以上ナルコト、(二)市街村落ニ對シ主ニ風下ニ位セル土地ナルコト、(三)火爐煙筒ヲ備ヘ臭煙ヲ防クノ裝置ヲ爲スコト、(四)周圍ニ高サ六尺以上ノ墻塼ヲ設クルコト但シ山林原野等ニシテ人家ヲ隔ツル場所ナルトキハ此限ニ在ラスト定メタリ又本島人ニハ洗骨殮殮ノ奇習アリ洗骨トハ埋葬死體腐朽セル時ヲ待チテ發掘シ骨ヲ洗ツテ之ヲ骨堂ニ納メ又ハ改葬スルヲ謂ヒ殮殮トハ死體ヲ棺ニ納メ之ヲ密閉シテ一週間乃至二三年間自宅ニ保存スルヲ謂フ共ニ衛生上、風俗上干渉ヲ加フルノ要アル習慣ナルヲ以テ出願許可ヲ受クヘキモノトシ又傳染病ノ死體ニハ殮殮ヲ許ササルコトトセリ而シテ火葬ハ未タ本島人間ニ行ハレス唯、内地人之ヲ利用スルノミ

五療養所 本島ハ鑛泉殊ニ溫泉ニ富ミ療養所ヲ設クルニ適セリ總督府ハ地方廳ニ命シ公共衛生費ヲ以テ之カ施設ヲ爲サシメタルモノ多シ其ノ最有名ナルモノハ北投溫泉ニシテ公共

浴場ノ如キハ工費數萬圓ヲ投シ其ノ設備十分ナリ其ノ他金包里、草山(ニウライ)、礁溪、關仔嶺、日月潭、知本等ニ公共浴場ヲ設ケ尙海水浴場トシテ基隆、舊港、打狗、安平等ニ相當ノ施設ヲナセリ

次ニ結核療院トシテ臺北廳ニ錫口養生院アリ大正三年廳公共衛生費ヲ以テ之ヲ經營シ患者三二名ヲ收容スルニ足り土地閑靜ニシテ山水ニ富ミ患者ノ希望ニ適ス實ニ此ノ種ノ病院ハ本邦否東洋ニ冠タルモノニシテ正ニ本島ノ誇リト爲スヘク爾後各廳ニ之カ設立ヲ爲スノ豫定ナリ

第六節 飲食物等ノ取締

領臺當時ニ於ケル本島ノ飲食物取締ハ單ニ事實上有害物發見ニ當リ說諭等ノ手段ヲ用ヒ廢棄ヲ爲サシメ其ノ將來ヲ戒ムルニ止メシカ取締上種々ノ不便ヲ感スルモノアリ爾來二、三地方廳ニ於テ取締規則ヲ發布シ違反者處罰ノ制ヲ設ケタリシモ有害物自體ニ對スル處分ノ途ヲ缺ク等不傾少カラサルモノアリ故ニ明治三十六年勅令ヲ以テ飲食物、其ノ他ノ物件取

締ニ關スル法律ヲ本島ニ施行シ同年十一月ヨリ之ヲ實施シ從來ノ不便ヲ免ルルヲ得タリ
 次テ時勢ノ要求ニ鑑ミ牛乳營業ノ取締、清涼飲料水並其ノ他一般飲食物ノ取締及獸肉營業、
 防腐劑、人工甘味質、有害性著色料、飲食物用器具取締規則ヲ制定シ大正三年ニ至リ氷營
 業、メチールアルコール取締規則ヲ發布セリ其ノ他主ナル取締規則トシテハ理髮營業、賣
 藥營業及墓地火葬場取締規則等ノ制定アリ

第七節 阿片制度

領臺當初ニ於テ統治上大ニ内外ノ注意ヲ喚起シタルモノハ島民ノ阿片吸食ニ關スル處分間
 題ニシテ世論ハ概テ禁斷說ヲ唱ヘ僅ニ一部少數ノ者ハ實行難キ理由トシテ現状放任ヲ主張
 シタルモ元來帝國ノ方針トシテ已ニ阿片嚴禁ノ令ヲ發シ夙ニ之カ刑典ヲ定メ各國トノ訂盟
 ニモ政府以外ノ阿片輸入ヲ禁スル旨ヲ掲記セリ然ルニ當時臺灣ノ事情ヲ鑑査スルニ島民ハ
 既ニ久シク阿片吸食ノ惡習ニ染ミ其ノ習癖ノ根底甚タ深ク一朝一夕ニシテ之カ絶對禁止ヲ
 斷行シ難キモノアリ是ヲ以テ阿片吸食ノ公衆保健上大害アルコト言ヲ俟タスト雖政府ハ已

△ナク彼レ癮者ノ餘命ヲ保タシメントスルノ仁慈ノ恩典ヲ以テ漸禁ノ政策ヲ執ルコトニ決
 定シ明治二十九年二月政府以外ノ阿片輸入ヲ禁止シ島民中已ニ吸食ノ習癖アル者ニハ一定
 ノ規則ノ下ニ藥用トシテ阿片ノ使用ヲ許ス旨諭告シ其ノ翌三十年一月臺灣阿片令ヲ發布シ
 一般ニ阿片ヲ禁止スルト共ニ政府ノ指定スル醫師ノ診斷ニ依リ阿片癮ニ陷レル者ニ限り官
 製ノ阿片烟膏購入吸食ヲ許可セリ又阿片烟膏ノ販賣、吸食所ノ開設、吸食器具ノ製造、販賣
 等ニ就テハ政府ノ許可ヲ要スルモノトシ同年四月ヨリ阿片令ヲ施行シ島民ニ對シテハ本令
 發布ノ要旨ヲ諭告シ又ハ教育上ヨリ阿片ノ有害ヲ周知セシムル等ノ施設ニ努メタルモ領臺
 早々匪徒各地ニ出沒シ政令ノ普及容易ナラス漸クニシテ明治三十三年九月全島ノ阿片癮者
 ナ網羅シ一六九、〇六四人ニ對シ阿片吸食特許鑑札ヲ付與シ同三十五年阿片吸食者ノ名簿
 ナ整理シ茲ニ始メテ阿片行政創始ノ事業ハ一段落ヲ告グルニ至レリ爾來阿片ノ輸入、製造、
 密吸食等ノ取締ヲ勵行シテ今日ニ及ヘリ而シテ漸次其ノ嗜好ヲ絶タントスルモノナレハ之
 カ實行ノ困難ナルコト言語ニ絶セリト雖今日迄ニ收メタル成績即チ阿片吸食特許者ノ遞減

及阿片烟膏消費ノ状態ニ徴スレハ其ノ目的ヲ達セルモノト謂フヘシ
阿片吸食特許者ノ遞減ハ左表ノ如シ

阿片吸食特許者

各年十二月三十一日

年	吸食特許者		人口百ニ付
	男	女	
明治三十年	四七、六八八	二九、〇九	一九
同 三十一年	八八、四八六	六九、六三	三七
同 三十二年	一一、六〇二	九、三六〇	五〇
同 三十三年	一五、二九〇	一一、八〇二	六・一
同 三十四年	一四、二六七	一一、三五二	五・七
同 三十五年	一三、〇一四	一三、三四三	五・〇
同 三十六年	一一、九五九	一一、九四四	四・六
同 三十七年	一一、二二八	一四、七二四	四・七
同 三十八年	一一、五四二	一五、〇二四	四・四
同 三十九年	一〇、七一九	一四、一三一	四・〇

第八節 蕃地衛生

蕃地ニ於テモ傳染病及傳染性疾患ノ措置等平地ト均シク施設ヲ要スルモノ多クアリト雖既
往數年間ハ兎蕃制壓ニ主力ヲ注クノ止ムヲ得サリシ結果衛生施設事項トシテ顯著ナル事實
ナシ然レトモ其ノ歸順蕃人綏撫ノ手段トシテ樞要ナル監督所及駐在所ニ藥品ヲ備ヘ内服劑

年	吸食特許者		人口百ニ付
	男	女	
同 四十年	九九、八八三	一三、二八二	三七
同 四十一年	一〇五、〇一九	一四、九七二	四〇
同 四十二年	九六、〇三二	一三、九二三	三六
同 四十三年	八六、二八二	一二、七〇五	三二
同 四十四年	八〇、九四七	一一、〇二八	二九
大正元年	七五、九九九	一一、三三二	二七
同 二年	七一、三八一	一〇、七四七	二五
同 三年	六六、八四〇	一〇、一五五	二三
同 四年	六二、一五六	九、五五九	二一
同 五年	五七、八二九	九、〇一八	二〇
同 六年	五三、八三八	八、四七九	一八

トシテ「マラリア」丸、「アンチペリン」丸ノ如キ又外用トシテ切創、刺創ニ塗布スヘキ膏藥、點眼劑、其ノ他ヲ給與シ又炎熱ノ候ニ於テ農作、其ノ他ノ勞働ニ從事スル者ニ對シ口腔清涼劑トシテ寶丹、仁丹等ヲ惠與セルカ如キ單純ノ方法ヲ試ミシカ之ヲ蕃族傳來ノ藥品ニ比スレハ效驗著大特ニ清涼劑ノ如キハ一種ノ爽快ヲ感スルコトトテ最彼等ノ意ニ適シ恰モ兒童ノ食ヲ需ムルカ如ク當事者ヲ困惑セシメタル事例アリ此ノ方法タル蕃族ヲ薰化スルノ最良手段ナルコトヲ確認シタルヲ以テ更ニ歩ヲ進メ歸順蕃人多數ノ地點ニハ蕃人療養所ヲ設置シ其ノ擔任者トシテ陸海軍看護長、看護手及看護卒タリシ者又ハ五箇年以上開業醫ノ助手タリシ者ヲ選抜シ巡查或ハ雇員ニ採用シ輕易ナル疾患ノ診療ニ從事セシメタルニ蕃人ノ信賴甚大ニシテ成績良好ナリ尙撫蕃上蕃地醫療機關ノ設備ハ益々緊要ナルヲ認メ大正五年度ニ於テ前記蕃人療養所及施藥所ノ外ニ資格アル醫師ヨリ蕃地公醫ヲ採用シ最必要ノ箇所ニ之ヲ配置シタリ而シテ施藥所ハ全島六二箇所ニシテ蕃地公醫配置箇所及療養所數左ノ如シ

蕃地 公醫配置箇所及療養所數

大正六年十二月三十一日

廳	蕃地公醫配置箇所	療養所
臺宜桃新臺南嘉阿臺花		
北蘭園竹中投義維東港		
合 計	六	五〇
	- - - = -	八 - 八 - 八 五 七 四 六 二

第九節 重ナル地方病

本島ニ於ケル地方病中其ノ主ナルモノヲ舉レハ「マラリア」、熱帶性(アメーバ性)赤痢、肺

「ダストマ」、十二指腸蟲病、甲狀腺腫、黒水熱、恙蟲竝脚氣病等トス而シテ「マラリア」ハ其ノ主ナルモノニシテ廣ク各地ニ蔓延セルハ既述ノ如クニシテ總督府ハ夙ニ之カ防遏ニ努力セル所ナリ次ニ熱帶性赤痢モ「マラリア」ニ次テ最多キ地方病ニシテ全島各地ニ蔓延シ殊ニ南部地方ニ多シ本病ハ大正三年傳染病豫防令ノ改正ニ依リ眞正赤痢ト同シク法定傳染病ニ編入セラレ現在同令ニ依リ取扱ハルルニ至レリ肺「ダストマ」ハ中部以北ノ山地地方ニ之カ患者ヲ見殊ニ新竹廳ニ多ク發生ス先年本病ノ第二中間宿主ハ同地山地ニ棲息セル蟹ナルコト發見セラレ目下引續キ之カ傳染徑路等ニ就テ地方病傳染病調査委員會ノ研究中ニ屬ス次ニ十二指腸蟲病モ亦全島到ル所ニ蔓延シ殊ニ農夫ニ其ノ多キヲ見ル本病ハ「マラリア」ト同シク患者ヲシテ貧血ニ陥ラシメ頭痛眩暈、其ノ他種々ノ症狀ヲ呈ス其ノ人體ニ侵入スルハ皮膚ヨリスルコトアリ

甲狀腺腫ハ其ノ病因未タ明ナラサルモ本島地方病ノ一ニ屬ス而シテ本病ハ廣ク全島ニ蔓延セルカ如シト雖南部即チ恒春、鳳山、臺南、鹽水港地方竝北部即チ基隆、深坑地方ニハ稍

少ナキカ如シ而シテ其ノ最蔓延セルハ濁水溪ノ上流郡大溪一圓ノ蕃地ニシテ其ノ蕃人間ニ在リテハ五〇%以上ノ患者アリト云フ

次ニ黒水熱ハ「マラリア」ニ繼發スル危險症ニシテ「マラリア」流行ノ甚シキ中南部竝東海岸各地ニ多シ總督府ハ目下本病ノ調査ヲ地方病傳染病調査委員會ニ附シ研究中ニ屬ス

恙蟲病ハ由來東部海岸地方殊ニ花蓮港廳ニ多ク發生セル所ナルカ本病モ亦其ノ病因久シク不明ニ屬シ單ニ花蓮港廳木瓜溪附近ニ其ノ患者發生多キ所ヨリ之ヲ木瓜熱ト稱シタリ然ルニ最近ニ至リテ其ノ病因ハ恙蟲刺螫ニ依リ發病スルモノナルコトヲ發見セラレ爾來之カ豫防上效果ヲ得ルニ至レリ

脚氣ハ本島到ル所ニ之ヲ見其ノ罹病數亦少ナシトセス領臺當初ニ於テハ「マラリア」ト共ニ内地人ノ最苦惱セル所ナリシカ近時幾分其ノ數ヲ減セルカ如シ

第十節 公共衛生費

公衆衛生上共同施設スヘキ上水下水ノ改良、汚物掃除、避病舎建築等ニ要スル經費ヲ支辨

スルモノニテ其ノ財源ヲ飲食物市場、屠畜場、渡船場等ヨリ得ルモノトス從テ市場、屠畜場ヲ經營シ其ノ得タル利益ハ舉ケテ之ヲ衛生事業經營費ノ補足ニ充ツルモノトス一箇年ノ總收入大正六年度全島收支豫算一二六萬餘圓ニ及ヘリ

第十八章 水利

第一節 官設埤圳

一 要旨 島民經濟上ノ基礎ハ主トシテ農業ニシテ地味氣温ハ能ク米稻及甘蔗ノ耕作ニ適ス水利ニシテ一層充足スルヲ得ハ荒蕪地ヲ開キテ良田ト爲シ一作田ヲ變シテ年二回ノ收穫ヲ得セシムヘキ區域少カラス本島米作ノ前途ハ實ニ栽培、其ノ他耕作上ノ改良ト共ニ大ニ水利ヲ開發シテ產額ノ増加、品質ノ向上ヲ圖ルノ必要アリ加之近時長足ノ進歩ヲ爲セル製糖ノ原料タル甘蔗モ亦其ノ優良ナル品種ハ總テ灌溉ヲ必要ト爲ス等諸般産業發展ノ情勢ニ鑑ミ總督府ハ灌溉事業ニ對シ單ニ保護監督ヲ爲スニ止マラス一步ヲ進メテ工費等ノ關係上自ラ其ノ施設經營ニ任セサルヘカラサルモノアルヲ認メ明治四十一年度以降大正十七年度ニ至ル二十一箇年(當初十六箇年ナリシヲ繰延ヘタルモノ)繼續事業トシテ豫算額三千萬圓ヲ以テ總督府直營ノ水利事業ヲ施設スルコトトセリ而シテ一般計畫ハ灌溉洽カラサル地方ニ

對シ新ニ完全ナル灌溉用水路ヲ開鑿シ又ハ在來ノ灌溉施設ノ改修工事ヲ施行シ其ノ普及ヲ計リ同時ニ各種工業用動力ノ不足ヲ補ヒ竝日常生活ニ供スル爲其ノ附帶事業トシテ溪水ノ落差ヲ利用シ水力電氣ヲ起サントスルモノニシテ全部竣功ノ曉ハ二期作田十一萬八千餘甲電力一萬七百五十馬力ヲ得ルノ見込ナリ

事業著手以來臺中、臺南、阿緜各廳ニ於テ工事ヲ施行シ灌溉工事トシテ荊仔埤圳、后里圳、獅仔頭圳ノ改修ヲ完成シ又曹公圳改修工事ノ一部タル下淡水溪護岸工事ヲ竣工セリ電氣工事ハ后里圳、獅仔頭圳ノ附帶工事ヲ竣リ現今ニ於テ一萬一千五百一甲餘ノ灌溉ト三千二百馬力ノ發電ヲ爲セリ今是等工事ノ大要ヲ表示スレハ左ノ如シ

工事	起	工竣	功	工事費	灌溉甲數 又ハ發電 馬力數	摘	要
荊仔埤圳 工事	明治四十三年度	明治四十四年度		四二六・八三四〇 円	三、九二三 甲	臺中廳官設埤圳荊仔埤圳ハ排水其ノ宜シキヲ得サルニ依リ之カ排水設備ヲ施工セシモノナリ	

獅仔頭圳 工事	同	四十二年度同	四十四年度	七四三・九〇五・五〇	四、三三二	阿緜廳元公共埤圳獅仔頭圳ニ改良ヲ加ヘタルモノナリ	
后里 工事	同	四十二年度	大正二年度	九九五・九六二・八〇	三、二四六	臺中廳元公共埤圳大安圳及星山圳ニ改修ヲ加ヘ施工セシモノナリ	
下淡水溪 護岸工事	同	四十四年度	同	二年度	七〇三・二六五・一八〇	臺南廳公共埤圳曹公圳改修工事ニ先チ下淡水溪ニ於ケル取入口附近一帯ノ河身整理ノ爲ニ施工セシモノナリ	
獅仔頭 電氣工事	同	四十二年度	同	元年度	九八・四六五・九三〇	馬力 二、〇〇〇	獅仔頭圳工事ニ附帶セルモノニテ圳路上流ニ於テ落差ヲ利用シ發電ヲ爲シ臺南、彰化、鳳山、阿緜、東港、蕃薯寮、橋仔頭等ノ市街其ノ他ノ燈用及動力用ニ供給ス
大甲 電氣工事	同	四十三年度	同	元年度	三七九・四二・五四〇	馬力 一、二〇〇	后里圳工事ニ附帶セル工事ニシテ電力ハ中部臺灣ノ市街即チ臺中、彰化、鹿港、葫蘆墩、大甲、南投等ニ供給ス

次ニ目下工事進行中ノモノハ二層行溪埤圳及同電氣工事並八塊厝、中壠附近埤圳工事ニシテ其ノ概要左ノ如シ

二層行溪埤圳工事 本工事ハ阿緜廳楠梓仙溪東里庄ニ於テ楠梓仙溪ニ取入口ヲ設ケ隧道、暗渠、開渠等七、一四六間餘ノ導水路ヲ開鑿シ之ニ依リテ導キタル水ヲ二層行溪ノ上流ニ落シ此ノ流末臺南廳界ニ近ク堰堤ヲ築キ此所ニ楠梓仙溪ヨリ導キタル水ト二層行溪ノ溪水トノ二水ヲ貯溜スル一大貯水池ヲ造リ是ヨリ給水隧道(六三〇間)及給水幹支線ニ依リ臺南廳中部一帶ノ地域ヲ灌溉セントスル施設ニシテ明治四十五年七月工事ニ著手シ大正四年度末日迄ニ楠梓仙溪ヨリ導水工事ノ一部タル圓潭仔隧道(八三七間)、上流開渠(一〇三間一)水橋(五三間三)等九九四間ノ水路開鑿ヲ竣功セシモ尙本工事ニ付テハ幾多ノ調査ヲ爲スノ必要アルヲ以テ大正五年度ヨリ一時工事施行ヲ延期スルコトナリ今日ニ至ル

三層行溪電氣工事 本工事ハ阿緜廳楠梓仙溪東里新開庄ニ於テ下淡水溪ノ上流老濃溪ニ自然取入口ヲ設ケ水量毎秒四五〇立方尺ヲ取入レ隧道、暗渠、彎管、開渠等二、四〇〇間ノ

導水路ニ依リ中庄附近ノ水櫃ニ導キ一〇一尺ノ落差ヲ以テ四、〇〇〇馬力ヲ發電シ竹仔門發電所ノ發電力トヲ合セ以テ臺南、打狗ノ市街地ヲ主トシ其ノ他一般南部臺灣ニ於ケル電力ノ需要ニ應セントスルモノニシテ明治四十五年六月工事ニ著手シ大正六年内ニ全部完成ノ見込ナリシモ工事豫定通進行ヲ見ルニ至ラス導水工事ノ一部及電線路建設工事ノ一部ヲ殘セリ

四八塊厝、中壠附近埤圳工事 本工事ハ廣漠タル桃園高原ニ二萬三千餘甲ノ完全ナル良水田ヲ得ンカ爲經費六百萬圓ヲ以テ大正十二年度竣成ノ豫定ニテ淡水河ノ上流大巔炭石門ノ地ニ取入口ヲ設ケ隧道、暗渠、開渠、其ノ他一一、一四〇間ノ導水路ヲ開鑿シ是ヨリ圳路ノ幹支線ヲ通シ或ハ各所ニ貯水池ヲ築キ天水ト共ニ圳水ヲ貯溜シ以テ灌溉ヲ爲スノ施設ニシテ大正五年十一月導水路ノ一部タル第三號隧道(二、六九二間)及第四號隧道(一、八九五間)ノ開鑿工事ニ著手シ大正六年度末ニハ第三號隧道工事ハ五分二厘九毛第四號隧道工事ハ四分四厘二毛通竣功セリ更ニ大正六年五月第四號隧道(一部)及暗渠開渠(隧道一四〇間暗渠

四四五間)ノ工事ニ著手シ大正六年度末ニハ大部分竣功ス尙大正六年十二月第二號隧道第三號隧道間ニ水橋及附屬工事ニ著手セリ

第二節 公共埤圳

米穀ハ本島産業ノ大宗ニシテ水利灌溉ノ施設ハ古ヨリ開ケ埤塘ヲ築キ瀦水ヲ蓄ヘ圳路ヲ開キ溪流ヲ導クモノ所在之アリ其ノ創設ノ舊キハ二百年ヲ過キ灌溉ノ廣キハ萬甲ヲ超ユルモノアリ是レ古來埤圳ナクンハ何ヲ以テ水ヲ得ン水ナクンハ何ヲ以テ田ヲ成サン田ナクンハ何ヲ以テ生ヲ賴マンノ語アル所以ナリ然レトモ其ノ施設經營ハ専ラ關係人民ノ力ニ委シ政府ハ直接ニ干渉スル所ナカリシモ領臺以來埤圳ノ産業上ニ及ホス關係ノ大ナルヲ認め明治三十四年律令第六號臺灣公共埤圳規則ヲ制定シ公共ノ利害ニ關係アル埤圳ニ對シテ特ニ管理上ノ監督ヲ施スコトトセリ此ノ規則ニ依リ認定シタル公共埤圳ハ明治三十四年度ニ於テ其ノ數二一、灌溉面積一八、〇三八甲ナリシカ逐年認定數ヲ加ヘ大正六年度末ニ於テハ埤圳ノ數一四三、灌溉面積(排水區域ノ面積ヲモ含ム)一七七、八二九甲ニ達シタリ

埤圳ヲ創設シ之ヲ利用スル者ハ舊慣上合約字ヲ作り其ノ關係ヲ定ムルヲ以テ公共埤圳規則ニ於テモ大體此ノ舊慣ヲ認め埤圳ノ灌溉ヲ受クル田園ノ業主、典主、佃人及埤圳主ヲ以テ利害關係人ト爲シ規約ヲ設ケ相互ノ權利關係ヲ定メ管理者ヲ定メテ埤圳ノ經營ニ當ラシメ規約及豫算並埤圳ノ變更等ニ就テハ總督ノ認可ヲ受ケシムル等監督ノ方法ヲ規定シ尙組合組織ノ認可ヲ得タル埤圳ハ之ヲ法人トセリ現ニ組合組織ノ公共埤圳一二三アリ
 管理者ハ原則トシテ規約ノ定メタル方法ニ依リ選舉セラルルモノナルモ廳長ハ必要ト認めルトキハ管理者ヲ選任シ或ハ自ラ代リテ之ヲ管理スルコトヲ得ルモノトス現ニ廳長ノ管理ニ屬スルモノ一四〇埤圳アリ

各埤圳ハ固有ノ目的ニ依リ各箇獨立ニ經營セラルヘキモノナレトモ經費ノ節約、事務ノ進捗、其ノ他ノ事由ニ基キ數埤圳ヲ聯合シテ其ノ事務ヲ共同處辨スルハ有利ナルヲ以テ同一廳内ニ限リ總督ノ許可ヲ得テ聯合會ヲ設クルコトヲ得ルコトトシ現ニ聯合會ノ組織アルモノハ臺北、宜蘭、新竹、臺中、南投、嘉義、臺南及阿緞ノ各廳トス

公共埤圳ノ經費ハ主ヤシテ其ノ灌溉ヲ受クル土地ノ負擔ニ屬スル水租ヲ以テ之ニ充ツ水租ハ當初協定シタル一定ノ額ニ依リ溢ニ變更セサルヲ常規トスルモ灌溉地ノ擴張ニ伴ヒ水路、工作物ノ規模ヲ大ナラシムル等ノ事由ヨリ租額ヲ變更増加スルモノ多シ就中改修又ハ災害復舊等ノ工事ヲ起セル埤圳ニ在リテハ概ハ然リトス又其ノ工費ノ巨額ナルモノニ在リテハ一時起債ヲ以テ之ヲ支辨シ數年ニ互リ漸次償還ノ方法ニ出ツルモノ亦多シ總督府ハ一面此等ノ經營ニ對シ監督ヲ爲スト共ニ一面埤圳永遠ノ利益タルヘキ起業ニ對シテハ企畫ノ大小、民力ノ厚薄等ヲ斟酌シテ工費ノ幾部ヲ補助シ其ノ發達ヲ圖レリ

第三節 認定外埤圳

大正六年度末ニ於テ公共埤圳ノ認定ヲ受ケサル埤圳ハ其ノ數一二、一二八、灌溉面積八〇、七七四甲アリ
以上各節ノ埤圳ニ關スル統計左ノ如シ

埤圳ノ一(箇所)

各年度三月三十一日

年 度	埤 圳			計	指 數	百 分 比 例		
	官設 埤圳	公共 埤圳	認定外 埤圳			官設埤圳	公共 埤圳	認定外 埤圳
明治三十八年度	—	—	—	—	—	—	—	—
同三十九年度	—	—	—	—	—	—	—	—
同四十年年度	—	—	—	—	—	—	—	—
同四十一年度	—	—	—	—	—	—	—	—
同四十二年度	—	—	—	—	—	—	—	—
同四十三年度	—	—	—	—	—	—	—	—
同四十四年度	—	—	—	—	—	—	—	—
大正元年	—	—	—	—	—	—	—	—
同二年	—	—	—	—	—	—	—	—
同三年	—	—	—	—	—	—	—	—
同四年	—	—	—	—	—	—	—	—
同五年	—	—	—	—	—	—	—	—
同六年	—	—	—	—	—	—	—	—

年 度	灌溉面積			計	指數	田畑百甲ニ付灌溉歩合		
	官設 埤圳	公共 埤圳	認定外 埤圳			官設 埤圳	公共 埤圳	認定外 埤圳
明治三十八年度	—	九三、四九一	一〇八、〇六二	二〇一、五五三	一〇〇	—	一四五	一六八
同三十九年度	—	一四、一八五	九二、七五七	二〇六、九四二	一〇三	—	一七五	一四二
同四十年	—	一三九、九四二	八五、八四一	二二五、七八三	一一二	—	二〇七	一二七
同四十一年	—	一四八、六三三	七五、三六七	二二四、〇〇〇	一一一	—	二二二	一一二
同四十二年	—	一五三、九七七	七四、八九六	二二八、八七三	一一四	—	二二六	一一〇
同四十三年	—	一五四、五二二	七四、四九六	二三二、八三五	一一六	〇六	二二二	一一〇
同四十四年	八二、四四	一五八、六七九	七二、八七四	二三九、七九七	一一九	一三	二二四	一〇三
大正元年	一一、〇九四	一五七、四八九	七二、六〇〇	二四〇、一八三	一二九	一六	二二一	一〇一
同二年	一一、一五五	一五五、九二二	七二、〇〇一	二三九、〇七八	一二九	一六	二一九	一〇一
同三年	一一、一七七	一五七、八八四	七六、八二四	二四五、八八五	一二二	一六	二二一	一〇八
同四年	一一、二二六	一六二、三二〇	七六、四五四	二四九、九八〇	一二三	一六	二二五	一〇六
同五年	一一、二二七	一六六、九四九	七七、一八四	二五五、三六〇	一二七	一五	二二六	一〇五
同六年	一一、五〇〇	一七七、八二九	八〇、七七四	二七〇、一〇三	一三四	一五	二三九	一〇九

第十九章 土工

第一節 土木

一市區改正及下水 從來本島ノ市街ハ巷衢陝隘陰濕ニシテ大氣ノ流通及光線ノ透射共十分ナラス惡水常ニ浸潤シ其ノ不潔汚穢ノ結果、病菌ノ潜伏所タリ惡疫ノ發生所タルヲ免レサリシヲ以テ領臺後此等非衛生的的狀態ヲ改善スルノ急要ナルヲ認メ明治二十九年事業費ノ一部ヲ割キテ臺北市街ノ一部ニ排水工事ヲ施行スルト共ニ大體ノ計畫ヲ立テ下水溝ノ設備ニ著手シ同三十一年臺北市區改正委員會ヲ組織シ市街ノ計畫及衛生施設ニ關スル審査機關ヲラシメ同三十三年始メテ臺北市區改正工事ノ一部ヲ施行スルニ至リ又同年基隆市街ヲモ計畫ノ範圍ニ加フルコトト爲セリ然ルニ各地發展ノ機運ニ伴ヒ隨所ニ應急姑息ノ改良施設ヲ爲スモノアルニ至リ之カ統一の計畫ヲ立ツルノ必要ヲ認メタルヲ以テ同四十三年更メテ市區改正計畫委員會ヲ組織シ廣ク全島主要市區ニ就キ完全ナル規畫ヲ立テシムル諸詢機關

ト爲シ爾來銳意改善ノ歩ヲ進メ現ニ市區改正計畫ヲ發表シタルモノ一七箇所ニシテ孰モ一部ノ工事ニ著手セリ就中臺北、基隆、新竹、臺中、嘉義、臺南、打狗、阿緞等ヲ其ノ重ナルモノトス此ノ他街路ニ面セル一部ノ下水ヲ改修セル市街ハ全島ヲ通シ五十餘ニ上レリ、然レトモ孰モ一部分ノ竣成、一工事ノ段落ヲ告ケタルニ過キス其ノ完成ノ期近キヲ望ムヘカラサルモ著々工ヲ進メテ市街ノ面目ヲ一新シ交通、衛生、其ノ他ニ及ホス利益甚大ナルニ至ラントス

今市區計畫ノ一例トシテ臺北市區改正工事ノ概要ヲ擧ケンニ同工事ノ始メテ計畫セラレタルハ明治三十三年八月ニシテ爾來市街ノ發展ニ伴ヒ屢々其ノ設計ヲ變更シ同三十八年十月ニ至リ全市三百餘萬坪ニ亘リ人口十五萬ヲ容ルヘキ計畫ニ改メタリ即チ市街中央ニハ約二三、〇〇〇坪ノ公園ヲ設ケ舊城壁跡ニハ遊覽道ヲ作り市内各地點ニ圓形又ハ橢圓形ノ綠樹帶ヲ設ク、道路ハ總延長二二里ニシテ幅一〇間乃至三間ノ各種ニ分チ孰モ兩側ニ步道ヲ設ケ或ハ之ヲ亭仔脚ニ利用シ又ハ竝木ヲ栽植シ市街ノ美觀ト行道者ノ利便ヲ得セシムルヲ期

シ下水ハ總延長四五里ニシテ幅約三尺以下ノモノハ開渠トシ幹線ハ暗渠トスヘキ計畫ナリ
 二道路橋梁 領臺前ニ於ケル本島ノ道路、橋梁ハ専ラ地方人民ノ共同施設又ハ富豪紳商ノ特志經營ニ委シ稀ニ官府ノ補助アリシニ過キス官府自ラ資ヲ投シテ施設セルモノナキニアラサリシモ一定ノ方針ノ下ニ規畫セラレシニアラス又維持ノ方法備ハラスシテ當時ニ於ケル運輸交通ノ不便困難實ニ名狀スヘカラサルモノアリキ領臺後ニ於テハ明治二十八年工兵隊ノ手ニ於テ南北縱貫軍道ヲ開鑿シタルヲ第一著トシ爾後或ハ保甲民ノ出役ニ依リ或ハ寄附ニ依リ或ハ地方稅ヲ支出シ或ハ關係地方ノ特別賦課ヲ財源トシ延長三千餘里ノ道路ヲ開鑿修築スルニ至レリ然レトモ其ノ大部分ハ勾配急峻ナルノミナラス橋梁ノ多クハ備ハラス僅ニ應急ノ便ヲ得ルニ止マリ運輸交通上尙幾多ノ缺點アルヲ免レヌ此等既成道路ノ維持ニ付テハ其ノ内重要路線約七百餘里ヲ指定シ地方稅ノ負擔トシ其ノ他ハ沿道人民ヲシテ維持ニ任セシム橋梁ニ至リテハ大ナル河川ニハ一トシテ架設セルモノナシ小河川ニ架セル從來ノ木造橋梁ハ腐朽速ニシテ且洪水毎ニ災害ヲ被リ易キヲ以テ明治四十一年ヨリ家稅特別賦

新	臺	南	嘉
竹	中	投	義
四六〇五	七六二二	四〇一八	九三〇一
縱貫道、新竹樹杞林道、新社新埔道、新竹舊港道、頭份南庄道、頭份中港道、苗栗大湖道、苗栗公司寮道、田寮後壠道、(零里三十一丁ヨリ) 樹杞林北埔道、各停車場道 (一里十六丁マテ)	縱貫道、后里庄大甲道、葫蘆墩東勢角道、蘆葫墩牛罵頭道、臺中牛罵頭道、臺中南投道、臺中犁頭店道、臺中琪雅道、烏日塗葛堀道、沙鹿大肚道、沙鹿塗葛堀道、沙鹿梧棲道、彰化鹿港道、彰化和美線道、員林鹿港道、田中央北斗道、北斗番兜道、員林北斗道、二八水濁水道、各停車場道	臺中南投道、草鞋墩埔里社道、南投埔里社道、南投林圯埔道、二八水集集道、林內林圯埔道	縱貫道、林內林圯埔道、斗六梅仔坑道、斗六西螺道、西螺崙背道、他里霧北港道、北港崙背道、大莆林梅仔坑道、打貓北港道、北港新港道、嘉義竹頭崎道、嘉義中埔道、嘉義東石港道、水堀頭後潭道、後壁寮店仔口道、店仔口關仔嶺道、新營庄布袋嘴道、樸仔腳鹽水港道、鹽水港北門嶼道、店仔口前大埔道、嘉義店仔口道、草店內角道、糞箕湖六重溪道、各停車場道

臺	阿	臺
南	縱	南
八一〇四	七六三二	三六二九
縱貫道、臺南安平道、鳳山打狗道、林鳳營六甲道、蕭壠蕃仔田道、臺南北門嶼道、鹽水港北門嶼道、蕭壠蕭壠道、灣裡吧咭道、新市街大目降道、臺南大目降道、臺南關帝廟道、大目降關帝廟道、楠梓坑蕃薯寮道、鳳山東港道、鳳山大林蒲道、山仔頂萬丹道、大林蒲東港道、臺南灣裡道、鳳山大林蒲道、各停車場道	縱貫道、阿緞蕃薯寮道、阿緞東港道、東港恒春道、蕃薯寮甲仙埔道、蕃薯寮瀾濃道、楠梓坑蕃薯寮道、嶺口阿里港道、阿緞枋寮道、東港潮州道、山仔頂萬丹道、萬丹潮州道、鳳山東港道、恒春大板橋道、恒春卑南道(恒春九棚間)、蕃薯寮六龜里道、大板橋鸞鑾鼻道(大板橋墾丁間)各停車場道	卑南花蓮港道、卑南馬太鞍道、恒春卑南道(知本卑南間) 花蓮港卑南道、卑南馬太鞍道、各停車場道

三河川 本島ノ河川ハ概シテ源ヲ急峻ナル中央山脈ニ發シ急勾配ノ谿谷ヲ直下シ一タヒ平野ニ出ツルヤ忽チ分派亂流シ其ノ流身一定セス一朝降雨ニ際シテハ氾濫横溢、良田ヲ浸蝕シ村里ヲ決潰シ間接直接ノ損害實ニ甚大ナリ是レ古來何等治水ノ施設ナク自然ノ放流ニ委

シタル結果ニ外ナラス治水ノ必要ナルハ當路ノ夙ニ認ムル所ナルモ歲計ノ許ササルモノアルカ爲久シク著手ノ機會ヲ得サリシカ本島諸般ノ經營ト各種事業ノ基礎ヲ確定スルニ方リ河川ノ改修ハ一日モ忽諸ニ附スヘカラサルヲ以テ先ツ全島主要河川ノ状態ヲ調査スルヲ第一著手トシ大正元年河川調査委員會ノ制ヲ定メ同年度ヨリ毎年約十萬圓ヲ支出シ五箇年間ヲ以テ淡水河、頭前溪、後壠溪、大安溪、大甲溪、烏溪、濁水溪、下淡水溪及宜蘭濁水溪ノ九大河川ヲ調査シ其ノ結果ニ基キ改修計畫ノ基礎ヲ定メ大正六年度ニ於テ先ツ濁水溪ニ著手セリ即チ同溪既成第三護岸第四號堤及第五號堤(爾後第六號堤ノ一ト改ム)間及其下流ニ於テ總延長三、〇一五間餘ノ護岸ヲ築造シ派川新虎尾溪ニ洪水ノ浸入スルヲ防キ下流沿岸田園民居ノ安全ヲ保護シ從來荒蕪ニ委セラレタル土地ヲ開發ヘルヲ目的トシ、其工費七九九、三三七圓餘ニシテ年度内ニ大部分ヲ竣レルモ一部ハ之ヲ七年度ニ繰越セリ七年度ニ於テハ濁水溪左岸下流及右岸既成下水埔及下壠堤防ノ下流並下淡水溪右岸ニ護岸堤防ヲ施工スルノ計畫ナリ

然レトモ河川氾濫暴漲ノ甚シク沿岸田園民居ニ及ホス損害危險焦眉ノ急ニ迫レルモノニ在リテハ將來ノ計畫ニ支障ナキ範圍ニ於テ應急保護ノ工事ヲ施行シタルモノ少カラス此等工事ノ中ニ就キ著シキモノヲ擧ケレハ左ノ如シ

四淡水河護岸及新店溪護岸工事 臺北市街ノ南ヲ流下スル新店溪ハ蜿蜒屈曲シテ大嵙崁溪ト合シ(合流以下ハ淡水河ト稱ス)更ニ市街ノ西ニ沿フテ北流シ増水毎ニ沿岸ハ浸水崩壞ヲ免レズ明治四十四年及大正元年ハ數次全市ニ浸水スルノ不幸ニ遭遇シタルヲ以テ元年度ニ於テ災害費六五、四二五圓ヲ以テ新店溪右岸古亭村庄ニ鐵線蛇籠ノ護岸ヲ作り更ニ市街西方防水ノ爲事業費ヲ以テ護岸擁壁ヲ築造スルノ計畫ヲ立テ大正二年度ヨリ之ニ著手シ同五年度ニ及ヘリ其ノ總延長一、四九八間五ニシテ工費總額六九三、二一〇圓トス

五北勢溪石堤復舊工事及後壠溪堤防復舊工事 北勢溪ハ後壠溪ノ派流ニシテ明治四十二年九月風水害ノ爲同溪及後壠溪本流ニ大ナル變動ヲ來タシ後壠圳及縱貫鐵道線路ニ危害アルヲ以テ工費豫算一二〇、〇〇〇圓ヲ以テ延長一、一一一之間ノ石堤ヲ築設シタリ然ルニ四十四

年九月再ヒ風水害ノ爲復舊ノ必要ヲ生シ工費一九九、七九六圓ヲ以テ延長一、二五七間ノ堤防ヲ築設シタリ

六 大安溪護岸工事 明治四十四年及大正元年ノ洪水ニ依リ大安溪縱貫鐵道線路橋梁及后里圳水門水路ニ危害ヲ及ホシタルヲ以テ之ヲ保護ノ爲混凝土方塊延長八二間五、鐵線蛇籠堤防延長一九一間六、其ノ他必要ナル附屬工事ヲ施行セリ此ノ工費三三一、五二二圓トス

七 濁水溪護岸工事 本島第一ノ巨流タル濁水溪ハ陳有蘭溪ヲ合セテ西ニ向フヤ流勢直下横溢右ヲ衝キ左ヲ拍チ殊ニ臺中、嘉義兩廳ノ平野ニ出テテ網狀ヲ成シテ分派亂流シ増水アル毎ニ沿岸ノ被害激甚ナルヲ以テ大正元年度右岸南投廳濁水庄ニ第一護岸延長三九一間ヲ、左岸嘉義廳林內庄ニ第二護岸延長五一〇間、第三護岸延長一、三四〇間ヲ築キ以テ一時ノ急ヲ拯ヒ大正二年度更ニ工費一三八、〇〇〇圓ヲ以テ第一護岸延長七三〇間ノ増築ヲ行ヒ又工費五萬圓ヲ以テ第三護岸復舊工事ヲ施行シ大正四年度ニ於テ工費一四五、一三〇圓ヲ以テ左岸下流ニ第四、第五兩護岸ヲ築造シ同五年度ニ於テ工費二五、四〇〇圓ヲ以テ第三護岸

復舊工事及工費三、二〇〇圓ヲ以テ第三護岸應急工事ヲ施行シ又右岸ニ於テハ大正二年度災害費三八、二〇〇圓ヲ以テ下壩堤防ヲ同三年度災害費三八、〇〇〇圓ヲ以テ下水壩堤防ヲ築造シタリ

八 鑽井 本島南部一帶ノ降雨ハ年内或時期ニ限ラレ而モ田園灌溉ノ必要時期ニ於テ雨量最少ナク蔗園ノ給水タモ尙不十分ナル状態ニ在リ甚シキハ飲料水ノ缺乏ニ苦シム地方アリ而シテ臺南、嘉義地方ハ東方一帶ノ山脈ヨリ海岸ニ向ヒ相當ノ傾斜ヲ有シ地下ニ礫砂含水層ヲ有スル箇所多キヲ以テ地下水ヲ得テ灌溉用ト飲料用トニ併セ供スルノ目的ヲ以テ調査ノ爲明治四十五年度ヨリ大正五年度ニ互リ臺南、嘉義兩廳内ニ順次鑽井施工ヲ試ミタリ其ノ結果ヲ擧ケレハ鑽井箇所一四箇所ニシテ内湧水スルモノ九箇所、湧水セサルモノ五箇所、湧水ノ量最多キハ地表上自然湧水一分間三斗八升、最少キハ七升五合ナリ
以上記述シタル外土木事業ニ屬スルモノニ水道、港灣、埤圳、電氣等ノ事業アレトモ是等ハ他ノ章節ニ記シタルヲ以テ茲ニ之ヲ略ス

領臺前ニ於ケル本島一般ノ建築ハ概シテ土塊、砂石又ハ脆弱ナル煉瓦ヲ用キ其ノ材料粗惡ニシテ其ノ構造耐久的ナラス且衛生上何等顧慮スル所ナカリシカ爲普通民屋ハ措テ論セス其ノ衙門、書院等ト稱スルモノニ在リテモ領臺後官廳、公署、學校、醫院又ハ各職員宿舍トシテ使用スルニ方リ之ニ適スルモノ殆ト絶無ナリキ依リテ領臺後財政ノ許ス限リ之カ施設ニカメ明治二十九年年度ヨリ大正六年度ニ至ル二十二箇年間ニ支出セル總工費約三、三七三萬圓ニシテ其ノ内官廳、公署、學校、醫院等ノ廳舎新營及修繕ニ約一、九四一萬圓、官舎宿舍ノ新築及修繕ニ約八七二萬圓ヲ支出シ、約四五九萬圓ハ特ニ本島ニ著シキ風水害、震害及蟻害等ニ起因スル災害復舊費ナリトス

紋上官廳、公署、其ノ他ノ建築ニ付テハ專ラ本島ノ氣候風土ニ適應セシムルヲ目的トシ地方廳舎ニ付テハ豫メ之カ規畫ヲ示シ又判任以下ノ官舎ハ一定ノ標準ヲ立テ居住者ノ待遇ニ厚薄ナカラシメンコトヲ期セリ尙之ト共ニ蟻害、菌害及夏秋ノ交襲來スル颱風ニ對スル

材料及構造上ニ注意シ成ルヘク木造ヲ避ケ主トシテ煉瓦、石材、鐵筋混凝土等ヲ用キ止ムヲ得スシテ木造建築ヲ施行シ又木材ヲ使用スル場合ハ防腐劑ヲ注入シ又ハ塗布ス

防腐劑ノ注入塗布ニ付テハ特ニ木材防腐工場ノ設置アリ「テルミトール」又ハ「クレオソール」ヲ注入シ蟻害ヲ豫防スルト共ニ木材ノ腐朽ヲ防キ其ノ使用年限ヲ増シ經濟的效果ヲ收メンカ爲公私一般ノ需要ニ應ジ之カ施工ニ當レリ

大正七年度ニ於ケル營繕工事費豫算ハ國庫ニ屬スルモノ一、六四五、一四二圓、地方稅ニ屬スルモノ五七七、〇五二圓合計二、二二二、一九四圓トス其ノ中ノ主ナルモノハ總督府廳舎及臺北醫院新營トス左ニ其ノ計畫ノ大要ヲ擧ケン

一臺灣總督府廳舎 現在ノ總督府ハ清國時代ノ建設ニシテ經年ノ久シキ其ノ主要部分ハ既ニ腐朽シ且蟻害ヲ受クルコト甚シク殆ト危險狀態ニ瀕スルヲ以テ其ノ新營ノ急要ナルヲ認メ之ニ著手スルニ先チ總督府ノ廳舎トシテ威嚴ヲ損セサル程度ニ於テ最經濟的ニシテ且亞熱帶地ノ氣候ニ適應スルモノヲ建築センカ爲其ノ設計ニ關シ懸賞募集ノ方法ヲ採リ其ノ結

果甲賞ニ擬スヘキモノナク漸ク乙賞ニ擬スルニ足ルモノヲ得尙設計上不備ノ點ヲ補正シ豫算二、五〇〇、〇〇〇圓トシ明治四十四年度ヨリ同四十七年度ニ至ル四箇年度繼續事業トシテ議會ノ協賛ヲ經タリ是ヨリ先明治四十四年一月ヨリ翌年三月ニ互リ敷地地層ノ試験ヲ行ヒ耐重力一平方尺約半噸ナルコトヲ實驗シタルヲ以テ之ニ適應スル工法ヲ研究シ基礎ハ「コムプレツソル」式ニ依リ建家ノ主要構造部ハ鐵筋混凝土トシテ之ニ煉瓦及石ヲ混用スル壁積ト爲スノ方法ヲ定メ専ラ實利ヲ旨トシ極メテ集約的の設計ニ依リ總建坪二、一〇〇坪餘ヲ有スル五層建(場所ニ依リ)トシ同四十五年五月九日起工スルニ至レリ然ルニ當初ノ豫算年割額ハ財政上ノ都合ニ依リ兩次ノ繰延ヲ行ヒ且工費ニ増額ノ必要ヲ來タシ(改定豫算總額二、七五八、三七〇圓)大正六年度ヲ以テ完成スヘキ豫定ナリシモ時局ノ影響ニ依ル物價騰貴ノ爲更ニ工費ノ不足ヲ來タシ從テ工事ノ進捗ヲ妨ケラレ七年度ニ於テ完成ト共ニ移轉ノ運ニアリ

二臺北醫院新營 熱帶ト亞熱帶トニ跨リ且地氣濕潤ナル本島ハ病源媒介ノ有機物ニ富ミ植

民地トシテノ施設ニ影響スル所多大ナルヲ以テ之ニ適應スル完全ナル醫院ノ必要ヲ認メ明治四十五年香港、菲律賓、瓜哇、海峽植民地及内地各所ノ醫院ニ就キ其ノ施設ニ關スル諸般ノ調査ヲ遂ケタル結果ニ依リ大體ノ設計ヲ立テ豫算二、四二〇、〇〇〇圓ヲ以テ同四十五年度ヨリ大正六年度迄六箇年度繼續事業トシテ起工セリ其ノ構造ハ廳舎ト病室トハ煉瓦造ニ階建ニシテ建坪三、二〇四坪之ニ附屬建物ヲ合シ總建坪實二六、一八八坪餘ナリ本工事モ亦豫算繰延ノ結果ニ依リ大正十年度ヲ以テ竣成ハルコトト爲レリ右ノ外既設建物中ニ就キ比較的重要工事ヲ舉クレハ左ノ如シ

重要營繕工事

工 事 名	工 費	著 手	竣 功
總 督 府 各 官 舎	五九八三〇・〇〇 円	明治二十九年	明治三十年
覆 審 法 院 廳 舎	一〇八〇〇〇・〇〇	同 三十一年	同 三十二年
總 督 官 邸	三七三八四・〇〇	同 三十二年	同 三十四年

專賣局	醫學校	豫備學校	工業	臺南	農事試驗場	研	臺南	土木	彭佳嶼	專賣局	彩票局	臺南	臺北	臺中	臺北	臺灣	神	社	
局	校	校	業	南	試驗場	究	南	木	佳	局	局	南	北	中	北	島	燈	臺	
廳	舍	舍	講	法	廳	舍	便	部	嶼	舍	(現在)	監	監	監	監	監	獄	獄	
舍	增	增	習	院	其	他	局	廳	燈	庫	圖	獄	獄	獄	獄	臺	臺	社	
三〇九六〇〇〇	二〇三六九〇〇〇	三三九六七〇〇〇	一五九九九〇〇〇	一五四六五〇〇〇	一二三九三〇〇〇	三五三〇四五〇〇〇	二二二七〇〇〇〇	一九三〇〇〇〇〇〇	一〇一七九二〇〇〇	五二二二七〇〇〇	一二三二八〇〇〇〇	一七九九九〇〇〇〇	一四九八七〇〇〇〇	二四九八一〇〇〇〇	二九五四三〇〇〇〇	二〇九九六五五〇〇			
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年	三十二年
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年	三十四年

打狗檢糖所	專賣局倉庫	打狗醫院	基隆郵便局	中學校校舍	高等女學校	國語學校	總督官邸	臺中醫院	臺南中學校
所	倉庫	院	局	舍	舍	舍	邸	舍	舍
廳	其	舍	其	及	其	附	改	及	及
舍	他	病	他	學	他	屬	築	病	寄
及	他	室	他	寮	寮	小	築	棟	宿
官	他	他	他	寮	寮	學	築	其	舍
舍	他	他	他	寮	寮	校	築	他	舍
二四一三一・三三〇	二九二二二・二八〇	一三九七一・三七〇	一〇四四〇・五〇〇	二二七八三・〇一〇	一〇六三八・二四〇	一〇八六五・〇〇〇	一五〇〇〇・〇〇〇	一九二一〇六・〇〇〇	三五〇〇〇・〇〇〇
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
元	三	二	四	四	四	四	四	四	三
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二年	三年	三年	三年	三年	三年	三年	三年	三年	三年
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二年	三年	三年	三年	三年	三年	三年	三年	三年	三年

第二十章 電氣及水道

第一節 電氣

本島ニ於ケル電氣事業ノ經營ニニアリ官營、私營即チ是ナリ左ニ之ヲ分説スヘシ

第一 官營

一沿革 本島ノ電氣事業ハ明治三十五年内地及本島ノ紳商等相謀リ臺北廳新店溪ノ落差ヲ利用シ水力發電ノ設備ニ依リ臺北市街ニ電燈供給ノ目的ヲ以テ株式會社ヲ設立シタルニ始ル時恰モ總督府ニ於テ本島地勢上高山峻嶺ヨリ發スル急斜ノ溪流多ク從テ水力發電ノ適所少カラサルヲ認メ諸般ノ水利事業ヲ企畫シ殖産興業ノ開發助長ニ資セントスルノ秋ニ際シタルヲ以テ民間ニ於ケル該計畫ハ寧ロ之ヲ官營ニ移シ設備ノ周到規模ノ擴大ヲ期シ燈火ト動力トヲ低廉ニ且安全ニ供給シ以テ利用厚生ヲ圖ルニ若カスト爲シ水力電氣ノ經營ハ總テ之ヲ官營ニ依ルノ主義ヲ採リ明治三十六年臺北ニ電氣作業所ヲ設ケ發電工事ニ著手シ同三

十八年工成ル臺北第一發電所(初メ六百六十馬力後チ一千馬力ニ擴張セリ)ニシテ先ツ臺北市街ニ供給ヲ開始ス
 是レ本島ニ於ケル電氣供給ノ嚆矢タリ次テ同四十年度ニ至リ第一發電所ノ下流ニ於テ新ニ
 三千馬力ノ發電所ヲ起シ同四十二年度ニ竣功セリ之ヲ第二發電所ト稱ス是ニ於テ北部ニ在
 リテハ第一、第二發電所ヲ合セ四千馬力ヲ得タルモ中、南部ニ在リテハ明治四十一年臨時
 臺灣工部官制發布セラレ水利事業ノ附帶事業トシテ適所ニ發電所ヲ建設シ漸次全島ニ普
 及セシムルノ方針ニ基キ同年度ニ於テ阿緱廳獅仔頭埤圳新設工事ニ伴ヒ蕃薯寮ノ東方竹仔
 門ニ發電所(一、〇〇〇馬力)ヲ建設シ同四十二年度ヨリ南部(臺南及打狗)ニ供給ヲ開始シ尋
 テ同四十三年度臺中廳后里圳新設工事ニ伴ヒ大安溪左岸ニ發電所(一、二〇〇馬力)ヲ建設
 シ后里庄發電所ト稱シ同四十四年度ヨリ中部(臺中及彰化)ニ供給ヲ開始セシカ更ニ大正六
 年度ニハ阿緱廳下六龜里土名土壠灣ニ於テ土壠灣發電所(四、〇〇〇馬力)ヲ完成シ同年度
 ヨリ之ヲ臺南、打狗ニ供給セルヲ以テ南部ハ合計六千馬力ヲ得ルニ至レリ電氣事業ノ管理
 機關ハ明治三十六年臺北電氣作業所ヲ設置シ同四十一年之ヲ國庫ニ移シ臨時臺灣工部ノ

主管ト爲シ後更ニ臺灣總督府土木部ニ屬シ毎ニ其一分課タリシヲ同四十四年官制ヲ改正シ
 テ獨立官衙ト爲シ臺灣總督府作業所ト更メ電氣及水道事業經營ノ衝ニ當リ現今ニ至レリ
 二營業 電氣營業ノ概況ヲ述ヘンニ明治三十八年八月臺北市街ニ供給ヲ開始セシ以來現今
 ニ至ル十二箇年間ノ發達ヲ見ルトキハ三十八年度末電燈四、九八一燈ヲ以テ大正七年三月
 末ノ二七、三二〇燈ニ比スレハ實ニ二十三倍餘ノ増加ヲ示シ收入ニ於テモ三十八年度ノ五
 七、九〇四圓ハ大正六年度ノ一、八二一、二九八圓(調定額)ト爲リ三十一倍強ノ膨脹ヲ見ル
 ニ至レリ然ルニ本事業ノ目的タルヤ徒ニ收入ノ増率ヲ企圖スルノミニアラサルヲ以テ收入
 増加ハ一面斯業ノ改良擴張ノ資源ニ轉用スルト共ニ一面ニハ料金ノ輕減スヘキハ努メテ之
 ヲ勵行シ本事業官營ノ趣旨ヲ體シ大正六年一月ヨリ料金ノ減額ヲ實施セリ
 尙之ヲ北、中、南部ニ分説スレハ左ノ如シ

イ北部 明治三十八年九月第一發電所工成リ始メテ臺北市街ニ供給ヲ開始セシ以來需要
 ハ頗ル好況ヲ呈シ忽チ全原動力(當時六六〇馬力)ニ超過シタルヲ以テ同四十年度ニ於テ

之ヲ一千馬力ノ能力ニ擴張シ以テ焦眉ノ急ヲ補ヒタルモ需要ノ一部ヲ充タシタルニ過キ
 サレハ次テ第二發電所ノ工事ニ著手シ同四十二年八月之カ完成ヲ告ケタリ是ニ於テ新ニ
 三、〇〇〇馬力ヲ得ルニ至リ始メテ臺北市街ノ供給ヲ充實セシメ同時ニ基隆市街並金瓜
 石鑛山ニ供給ヲ開始セリ爾來益々順調ニ發達シ大正元年度ニ士林、同二年度ニ北投、同三
 年度ニ淡水、錫口及南港、同四年度ニ枋橋、新庄及水返脚ニ而シテ同五年度ニ八更ニ九
 份、瑞芳ヲ供給區域ニ編入スルニ至リシカ近來電燈ノ著シキ増加ト工業發展ニ伴フ動力
 ノ需要激増トニ依リ後又原動力ニ不足ヲ告ケツ、アルノ狀況ナリ

□中部 中部ハ明治四十四年八月后里庄發電所完成セシニ依リ先ツ臺中市街ニ、同年十
 月ヨリ彰化市街ニ供給シ大正三年度ニ葫蘆墩市街ヲ、同四年度ニ鹿港市街ヲ、同五年度
 ニ后里、月眉、大甲ヲ同六年度ニ潭仔墘、南投街ヲ供給區域ニ加ヘタリ

ハ南部 南部ハ竹仔門發電所完成ニ依リ明治四十三年一月供給ヲ開始シ先ツ打狗築港ニ
 動力ヲ供給シ次テ臺南、打狗ニ電燈ヲ供給セシカ爾來益々好況ヲ以テ進ミ大正元年度新

ニ阿緞市街ヲ、同三年度ニ阿公店、橋仔頭、楠梓坑及蕃薯寮ノ各所ヲ、同四年度ニ大目
 降ヲ、同五年度ニ六龜里、鳳山及九曲堂ヲ同六年度ニ東港ヲ供給區域ニ編入シ現今ニ至
 レリ是ニ於テカ南部ノ原動力モ殆ト餘裕ナキニ至リ六年度ニ於ケル土壠灣發電所ノ竣功
 ニ依リ得タル四千馬力ヲ加フルモ近時同地方ニ於ケル工業ノ著シキ發展ハ動力ノ需要旺
 ナルヲ以テ原動力ノ補充ヲ訴フルノ時期遠キニアラサルヘキ狀態ナリ惟フニ南部ハ近時
 産業著シク發達シ且打狗及安平ノ要港ヲ控ヘ殊ニ製糖業ノ中心トシテ益々發達ノ素地ヲ
 有スルヲ以テ電氣事業モ亦頗ル多望ノ將來ヲ有ス

今大正七年四月ニ於ケル發電所別供給馬力ヲ示セハ左ノ如シ

發電所	發電能力		最大供給能力		販賣契約馬力	夜間最大供給馬力
	發電所別	計	發電所別	計		
北部	馬力	馬力	馬力	馬力		
第一發電所	1,000	5,000	900	4,500	6,748	5,111
第二發電所	3,000		1,700			
火力發電所	1,000		900			

南部	中部
火力發電所	后里庄發電所
土壠灣發電所	竹仔門發電所
五〇〇〇	一,〇〇〇
四,〇〇〇	二,〇〇〇
六,五〇〇	一,〇〇〇
四,五〇〇	九〇〇
三,六〇〇	一,八〇〇
五,八五〇	九〇〇
四,九五八	九七一
三,九二一	七五五

又各年度電氣供給增加ノ趨勢及收支ヲ示セハ左ノ如シ

六三〇

大正元	大正二	大正三	大正四	大正五	大正六	大正七
年	年	年	年	年	年	年
同	同	同	同	同	同	同
元	二	三	四	五	六	七
度	度	度	度	度	度	度
一五六七〇	一五二二四	一〇,四〇三	一一,九六一	一二,二一六	一二,二七七	一二,三三〇
八〇〇	四六七	一七	五四七	四八九	五四六	四,二二二
二二四	八三六	三七九	六六	四〇九	三,六四五	七,二〇八

大正元	大正二	大正三	大正四	大正五	大正六	大正七
年	年	年	年	年	年	年
同	同	同	同	同	同	同
元	二	三	四	五	六	七
度	度	度	度	度	度	度
五八	二八四	六七	六八	二九八	一二七八	二,六四五
六	一一八	二四九	七	二五	五五	八〇六
二六	三	八	三三	九八	二八	二,三三〇
四七	三一	八	八	四	二二	三,九八〇
一〇四	四〇〇	四七	五〇	一六	二〇六	三,一八〇
二二	八三六	三七九	六六	四〇九	三,六四五	七,二〇八

×ハ減ヲ示ス

地名	明治三十九年度末		同四十年		同四十年一年度		同四十年二年度		同四十年三年度		同四十年四年度		大正元年度		同二年度		同三年度		同四年度		同五年度		同六年度		同七年度末現在	
	計	打	計	打	計	打	計	打	計	打	計	打	計	打	計	打	計	打	計	打	計	打	計	打	計	打
北隆	133		175		152		50		203		7		58		284		67		68		298		178		244	
中隆							267		78		1		26		118		8		3		25		55		806	
南隆							16		4		36		47		3		8		8		98		28		232	
打狗	133		175		152		50		203		7		58		284		67		68		298		178		244	
計	133		175		152		50		203		7		58		284		67		68		298		178		244	

電力各營業所別増加累年比較

種別	明治三十九年度末		同四十年		同四十年一年度		同四十年二年度		同四十年三年度		同四十年四年度		大正元年度		同二年度		同三年度		同四年度		同五年度		同六年度		同七年度末現在		
	電燈(筒)	電扇(基)	電力(馬力)	電燈(筒)	電扇(基)	電力(馬力)	電燈(筒)	電扇(基)	電力(馬力)	電燈(筒)	電扇(基)	電力(馬力)	電燈(筒)	電扇(基)	電力(馬力)	電燈(筒)	電扇(基)	電力(馬力)	電燈(筒)	電扇(基)	電力(馬力)	電燈(筒)	電扇(基)	電力(馬力)	電燈(筒)	電扇(基)	電力(馬力)
電燈(筒)	850		1258		1824		1338		898		969		1360		1534		1050		1196		1177		1177		1177		1177
電扇(基)	154		320		94		464		685		722		800		467		17		486		546		546		422		422
電力(馬力)	133		275		152		353		581		468		224		836		379		66		409		364		710		710

電氣供給増加累年比較

又各年度電氣供給増加ノ趨勢及收支ヲ示セハ左ノ如シ

部	中	南
后里庄發電所	1000	
竹仔門發電所	2000	
土壠灣發電所	4000	
火力發電所	5000	
合計	10000	
同二年度	10000	
同三年度	9000	
同四年度	9000	
同五年度	9700	
同六年度	7550	

中部(后里庄發電所)		南部(竹仔門發電所)	
1,000	2,000	4,000	5,000
1,000	6,500	6,500	5,000
900	1,800	3,600	4,500
900	5,850	5,850	5,850
971	4,958	4,958	4,958
755	3,921	3,921	3,921

六三〇

又各年度電氣供給増加ノ趨勢及收支ヲ示セハ左ノ如シ

別	各年度						
	明治三十九年度末	同四十年	同四十一年	同四十二年	同四十三年	同四十四年	同四十五年
燈(筒)	八五〇三	一二五八	一八〇四	一二三〇八	八九八四	九六九二	一五七九〇
扇(基)	一五四	三二〇	九四	四六四	六八五	七二二	八〇〇
力(馬力)	一二二	一七五	一五一	三三三	三八一	四六八	二二四
同七年度末現在	一一七三〇	四、二二二	七、二〇八	一一、七二七	一五、四四六	二〇、二一七	二六、四四五

電力各營業所別増加累年比較

名	各年度						
	明治三十九年度末	同四十年	同四十一年	同四十二年	同四十三年	同四十四年	同四十五年
北	一三	一七五	一五二	五〇	二〇三	七	五八
隆	一	一	一	二六七	一	一	二八四
中	一	一	一	一六	四四	三六	二四九
南	一	一	一	二〇	四四	一九	三三
計	一三	一七五	一五二	三五三	三八一	四六八	六八
同七年度末現在	二六四四五	八〇六〇	二三、二〇〇	五五、二二一	九八、〇九八	一三二、二八	一七〇、六四五

ハ減ヲ示ス

收入支出累年比較

年 度	收 入	支 出	差 引 收 入 過
明治三十九年度	一二五、五五五 <small>円</small>	一〇五、四七四 <small>円</small>	二〇、〇八一 <small>円</small>
同 四十年 度	一五二、〇三九	六八、六九二	八三、三四七
同 四十一年 度	二〇三、七〇七	一三〇、〇三六	七三、六七一
同 四十二年 度	三二九、〇一〇	二六六、八七八	六二、一三二
同 四十三年 度	五五九、一一一	三二〇、一一三	二三八、九九八
同 四十四年 度	六八五、〇〇〇	五五二、二二三	一六九、八七七
大正元 年度	八六〇、七六一	五六五、九一一	二九四、八五〇
同 二 年度	一、〇八一、六九〇	六二七、一〇七	四五四、五八三
同 三 年度	一、一八〇、〇九八	七二七、七三一	四六七、三六七
同 四 年度	一、三五一、七一〇	七六四、六七八	五八七、〇三二
同 五 年度	一、六〇二、九六一	七七五、三八六	八二七、五七五
同 六 年度	一、八二四、六七六	九六八、二三五	八五六、四四一

以上官營ニ係ル電氣供給ノ外官廳所管ノ事業ノ爲自ラ施設ヲナスモノアリ其ノ主ナルモ

ノ左ノ如シ

施設官廳名	火力水別	使用區域	出力	電燈又ハ動力ノ別
營林局嘉義出張所 木材防腐工場	火力	嘉義廳嘉義街同所構内 臺北廳大加納堡後山陂庄同場構内	キロワット 八五〇 五	動力及點燈 點燈

六三二

第二私營

私營ニ係ルモノハ概テ瓦斯力ニ頼リ宜蘭、嘉義、新竹、澎湖、桃園、埔里社、花蓮港等ノ各會社アリ其ノ自家用ニ係ルモノハ各製糖業者、金鑛製麻等ノ各經營者ニシテ孰モ相當ノ施設ヲナセリ即チ左表ノ如シ

私營電氣

大正六年十二月三十一日

會社	資本金	火力、水力、瓦斯力ノ別	供給區域	出力	供給數 電燈電扇
----	-----	-------------	------	----	-------------

新竹電燈株式會社	二〇〇,〇〇〇	瓦斯力	新竹街、崙仔庄、水田庄、樹林頭庄、客雅庄、苦苓脚庄、樟榔庄、牛埔庄、苗栗街社寮崗庄、二張犁庄、新港庄、後壠庄、嘉義街、臺斗坑庄、埤仔頭庄、鹽水港街、北港街、斗六街	一四五	四九八四
嘉義電燈株式會社	一五〇,〇〇〇	火力	宜蘭街	二四五	七九〇七
宜蘭電燈株式會社	五〇,〇〇〇	瓦斯力	媽宮街、紅木呈鄉、文瀾鄉、大埤脚山鄉、小埤山鄉	五五	二二二〇
澎湖電燈株式會社	五〇,〇〇〇	瓦斯力	埔里社街	六〇	二〇一〇
埔里社電燈株式會社	一〇〇,〇〇〇	水	桃園街、大崙坎街	五五	七二〇
桃園電氣株式會社	一五〇,〇〇〇	瓦斯力	花蓮港	四〇	二〇三八
花蓮港電燈株式會社	二五〇,〇〇〇	瓦斯力		六〇	二二七四
計	九五〇,〇〇〇			六六〇	三二二五三

円

キロワット

本表ノ外大正七年五月事業經營ヲ認可シメルモノ臺東電燈株式會社(資本金二十萬圓)

第二十章 電氣及水道

六三三

樸仔脚電燈株式會社(資本金二十萬圓)アリ共ニ瓦斯力ヲ用キ前者ハ卑南街ニ後者ハ樸仔脚街ニ電燈電力ヲ供給スルモノトス

自家用電氣

事業業者	火力、水力別	供給區域	出力 キロワット	電燈又ハ動力ノ別
臺灣製糖株式會社橋仔頭工場	火力	臺南廳仁壽里橋仔頭庄工場構内	一六〇	動力及點燈
灣裡工場	同	臺南廳善化里西堡六份寮庄灣裡工場構内	三點	燈
三崁店工場	同	臺南廳内武定里三崁店庄工場構内	二點	同
車路墘工場	同	臺南廳仁德南里田厝庄工場構内	一七五	動力及點燈
埔里社工場	同	南投廳埔里社堡大肚城庄工場構内	二五點	燈
鳳山工場	同	臺南廳鳳山下里道爺廟庄工場構内	六五同	同

同	同	阿緜工場	同	阿緜廳港西中里歸來庄工場構内	三五	動力及點燈
同	同	後壁林工場	同	臺南廳鳳山下里港仔墘庄後壁林工場構内	一七五	同
同	同	臺北工場	同	臺北廳大加蚋堡下崁庄工場構内	二〇點	燈
同	同	打狗鑄造場	同	臺南廳大竹里打狗哨船頭工場構内	六五同	同
同	同	明治製糖株式會社蕭壠工場	同	臺南廳蕭壠堡蕭壠庄工場構内	二〇動力及點燈	
同	同	蒜頭工場	同	嘉義廳大棟榔西堡蒜頭庄工場構内	三五同	
同	同	總爺工場	同	臺南廳蕭壠堡蕭壠庄工場構内	一七五同	
同	同	南投工場	同	南投廳南投堡三塊厝庄工場構内	一七五同	
同	同	新高製糖株式會社嘉義工場	同	嘉義廳打猫北堡大湖庄工場構内	二〇同	
同	同	中發庄工場	同	臺中廳線東堡中發庄工場構内	四〇點	燈

淺野セメント株式會社 同	臺南廳大竹里打狗土名哨船 頭工場構内	八〇	動力及點燈
平高寅太郎製糖所 同	新竹廳苗栗一堡大湖庄工場 構内	二點	燈

第二節 水道

一 臺北水道 臺北ハ本島ノ首府ニシテ北部平原ノ中心ニ位シ淡水河其ノ西ヲ流レ舟楫ノ便アリ東及ヒ北ニ基隆、淡水ノ兩港ヲ控ヘ運輸交通ノ便備ハリ百貨集散ノ要地ニシテ人文日ニ隆盛ニ商工年ヲ逐フテ殷賑ヲ極メ市街ノ發展モ亦豫測スヘカラサルモノアリ然ルニ職ヲ領臺當時ノ狀況ヲ顧ルニ全ク衛生的觀念ナク街路ハ狹隘、下水溝渠ハ不完全ニシテ汚物所在ニ堆積シ家畜其ノ間ニ跋扈シ恰モ人畜同棲ノ觀アリテ其ノ不潔ナルコト名狀スヘカラサリキ隨テ飲料水ハ溷濁セル瀦水又ハ河水ヲ使用シ恬トシテ顧ル所ナク偶々井水ヲ見ルト雖其ノ水質ハ多ク石灰分ヲ含有シ全ク飲用ニ適セス故ニ一朝惡疫ノ流行ヲ見シカ猛烈ナル速度ヲ以テ四方ニ瀰蔓スル等到底看過スヘカラサルモノアリケレハ總督府ハ夙ニ茲ニ留意シ

水道敷設ノ急務ナルヲ認メタリシト雖新事業ノ創設タルヤ各般ノ調査研究ヲ要シ工事施行ヲ見ルニ至ル迄相當ノ歲月ヲ要スルカ故ニ此ノ間鑽井工事ヲ起シ以テ焦眉ノ急ヲ救ヒ致々調査研究ノ結果淡水河ヨリ導水スルノ計畫ヲ立テ明治三十一年第十三議會ニ當リ工費二百五十萬圓ヲ要求シタリシモ財政上ノ都合ニ依リ削除セラレ漸ク第二十三議會ニ於テ之ヲ可決セラレタルヲ以テ明治四十度愈々工事ニ著手シ同四十二年度ニ於テ其ノ功ヲ竣リ同年度ヨリ給水ヲ開始スルニ至レリ而シテ之カ經營ハ臺北水道事務所ヲ創設シ專ラ其ノ衝ニ當リシカ明治四十二年十月臺灣總督府土木部官制發布ト共ニ同部ニ合併セラレ超エテ四十四年十月臺灣總督府作業所官制發布ニ依リ同所ノ管掌スル所トナリテ現今ニ及ヘリ

臺北水道給水累年比較

年 度	總 戶 數	給 水		計	普及割合%
		專 用	共 用		
明治四十二年度	二四一七九	九〇六	一一六六	二五〇	九六
同 四十三年度	二五五八五	一八〇一	二〇四四	三四〇	一六三

同 四十四年度	二五、五八五	二、三一九	二、九〇九	四四一	五、六六九	二、二二
大正 元年度	二五、五八五	二、九四九	三、三三六	五四八	六、八六九	二、六九
同 二年度	二八、三三三	三、六七〇	四、〇四二	七三五	八、四四七	二、九八
同 三年度	三〇、六三九	四、二一〇	四、七九四	八三七	九、八四一	三、二一
同 四年度	三五、三二一	四、六五六	五、一七〇	九六〇	一〇、七八六	三、〇五
同 五年度	三八、二二五	四、六九二	五、五四一	六九〇	一〇、九二三	二、八七
同 六年度	三八、二二五	四、八八一	五、九九三	七五三	一一、五六七	三、〇三

二 打狗水道 打狗ハ本島南部ノ要港ニシテ近時築港事業ノ進捗ニ依リ巨船ノ碇泊自由トナリ縦貫鐵道ノ便ト共ニ海陸ノ交通益々完備シ本島南部ノ關門トシテ日ニ月ニ繁榮チ加ヘ南部産業ノ發展ヲ促進セシムルニ至レリ然ルニ居民日常ノ用ニ供スル井水ハ頗ル粗惡ニシテ孰モ多量ニ鹽分ヲ含ミ飲料水トシテ不適當ナルノミナラス其ノ水量ニ乏シク冷ク出入船舶ニ供給スルコト能ハサルノ憾アリテ打狗水道敷設ノ必要ハ衛生上將々南部開發上築港事業ト相俟チ缺クヘカラサルモノナルヲ以テ明治四十三年以降三箇年間ノ繼續事業トシテ起工シ大正元年度ニ於テ工成リ之カ經營ヲ作業所ニ指定シ大正二年度ヨリ一般給水並船舶給水

ヲ開始シ以テ今日ニ及ヘリ

左ニ給水開始以來ノ狀況ヲ示サン

打狗水道給水累年比較

年 度	總 戶 數	供 給 戶 數			普及割合%
		專 用	共 用	計 量	
大正 二年度	四、六八七	三三二	三九〇	一一九	一、八〇
同 三年度	四、六八七	三九一	五四二	一三八	一、〇七一
同 四年度	四、六六六	五六二	六三四	一四二	一、三三七
同 五年度	四、七二八	五九四	八三四	一七九	一、六〇七
同 六年度	五、二三八	六四二	一、一〇一	二二一	一、九五四

三 阿蘇水道 阿蘇街ハ本島ノ南部ニ在リ人口七千ヲ有シ本島主要産業タル砂糖及米ノ生産上屈指ノ地位ヲ占メ打狗築港ノ完成及鐵道ノ貫通ト共ニ益々發達ノ機運ニ際會セントス然ルニ同街ハ中、北部ニ比シ一層暑熱烈シク加フルニ日常必要ナル市民ノ飲料水ハ多量ノ石灰分ヲ含有スル掘井水ニシテ健康狀態甚不良ナリ依リテ水道布設ノ急務ニ迫ラレ打狗水道

水源地ヨリ下淡水溪ヲ經テ給水スルノ計畫ニヨリ三箇年間ノ繼續事業トシテ大正三年四月起工同五年十二月通水ト同時ニ其ノ經營ハ打狗水道同様作業所ニ移シ大正五年十二月ヨリ給水ヲ開始セリ而シテ大正五六年度ニ於ケル給水狀態ハ左ノ如シ

阿緞水道給水累年比較

年 度	總 戶 數	供 給 戶 數		普 及 割 合 %
		專 用	共 用	
大 正 五 年 度	二五八二	一四〇	二一七	二九三
同 六 年 度	二五九一	二二七	二六八	二九三
		計		計
		五四	五五九	二・六

四其ノ他 以上ハ作業所所管ノモノニシテ他ニ地方廳ヲシテ管理セシムルモノアリ
今既成水道ヲ一括表示スレハ左ノ如シ

所 在	施 設 年 度	工 庫 費		計
		國 庫	地 方 稅 一 公 共 衛 生 費	
淡 水	明 治 三 十 二 年 度	一〇二、六八九	—	一〇二、六八九

所 在	施 設 年 度	工 庫 費	地 方 稅 一 公 共 衛 生 費	計
基 隆	自 明 治 三 十 一 年 度 至 同 三 十 五 年 度	四六七、〇〇〇	—	四六七、〇〇〇
彰 化	明 治 三 十 八 年 度	—	三三、三六三	一七、四九六
臺 北	自 明 治 四 十 一 年 度 至 同 四 十 一 年 度	一九〇、〇〇〇	—	一九〇、〇〇〇
士 林	明 治 四 十 三 年 度	四〇、〇〇〇	—	五五、〇〇〇
金 包	同	—	—	三二、九六六
北 投	自 明 治 四 十 三 年 度 至 同 四 十 四 年 度	—	—	二〇、四五〇
璞 石	明 治 四 十 四 年 度	陸軍 二五、〇〇〇	—	八八、〇〇六
大 甲	同	—	—	三五、〇〇〇
打 狗	自 明 治 四 十 三 年 度 至 大 正 二 年 度	一、三〇〇、〇〇〇	—	一、三〇〇、〇〇〇
嘉 義	自 明 治 四 十 四 年 度 至 大 正 二 年 度	四〇〇、〇〇〇	—	六三〇、〇〇〇
恒 春 (墾丁寮 種畜場)	明 治 四 十 四 年 度	八八、七五	—	八八、七五

斗	大正元年度	四五〇〇〇	四五〇〇〇
叭	同二年度 <td>一五〇〇〇 <td>一五〇〇〇 </td></td>	一五〇〇〇 <td>一五〇〇〇 </td>	一五〇〇〇
阿	自大正三年度 <td>一五〇〇〇 <td>二九四〇〇〇 </td></td>	一五〇〇〇 <td>二九四〇〇〇 </td>	二九四〇〇〇
臺	至同六年度 <td>一五〇〇〇 <td>二九四〇〇〇 </td></td>	一五〇〇〇 <td>二九四〇〇〇 </td>	二九四〇〇〇
中	同 <td>一五〇〇〇 <td>二九四〇〇〇 </td></td>	一五〇〇〇 <td>二九四〇〇〇 </td>	二九四〇〇〇

五 工事中ノ水道 以上既設水道ノ外現ニ國費ヲ以テ施行中ニ屬スルモノハ臺南及花蓮港ノ兩水道トス

臺南水道ハ臺南市街ヲ距ル約五里ノ山仔頂庄ニ水源地ヲ設ケ唧筒式ニ依リ曾文溪ノ水ヲ導キ豫定人口十萬人ニ供給スルノ計畫ヲ以テ沈澱池一、濾過機室一、淨水池一ヲ具フ明治四十五年工事中著手シ大正七年度ヲ以テ完成スルノ豫定ナリシモ時局ノ影響ニ因ル鐵管類ノ暴騰ノ打撃ヲ蒙リ豫定ノ工費ヲ以テ竣功スル能ハサルニ至レリ尙工中全部完成ニ先ダチ市街ノ一部給水可能ノ區域ニ公共栓七十箇所ヲ設ケ大正六年五月ヨリ放任給水ヲ開始セリ花蓮港水道ハ同市街ヲ距ル西方約二里半「サバト」溪ノ上流ヨリ取入レ自然流下ニ依リ市街ノ北方米崙山ニ水源地ヲ設ケ豫定人口二萬人(水源地設備ハ當分一萬人ノ程度ニ止ム)ニ供給スルノ計畫ヲ以テ大正六年度ヨリ三箇年繼續事業トシテ工事中ニ在リ

第二十一章 警察

第一節 要旨

一沿革 本島警察機關ハ改隸以來幾多ノ變遷アリシト雖明治三十四年十一月地方官官制ノ改正ニ依リ縣及辨務署ヲ全廢シ從來ノ三級制度ヲ二級制度ト爲シ全島ヲ通シテ二十廳ヲ置キ廳ニ警務課ヲ置キ警部ヲ以テ課長トシ廳長ヲ補佐シテ警察事務ヲ掌理セシメ廳ノ下ニ支廳ヲ置キ警部ヲ以テ支廳長トシ廳ノ事務ヲ分掌セシム而シテ總督府ニ警察本署ヲ置キ警視總長ヲ以テ之カ署長トナシ警視三人ヲ置キ以テ全島警察機關ヲ監シ之方統一實行ヲ期セシメ茲ニ本島警察制度ノ面目ヲ一新セリ同三十四年ヨリ同三十五年ニ至リ土匪剿滅ノ功ヲ奏セシハ蓋シ主トシテ此ノ制度ノ機宜ニ適シ全島歩調ヲ一ニシ警察機關ノ運用其ノ宜シキヲ得タルニ因ラスンハアラス

爾來本島ノ天地廓清ニ歸スルト共ニ百般ノ施設駢ヒ興リ事端從テ繁密ヲ加フ而シテ常ニ人

民ニ直接スル者警察官ニ如クハナキヲ以テ各般ノ行政概ネ警察官ノ手ヲ藉ラサルナキノ状態ニシテ警察事務ハ土匪鎮定以來却テ益々繁多ヲ加ヘ又一面ニハ蕃界警備ノ範圍益々擴張セルヲ以テ警察力ヲ要スルコト毫モ土匪鎮定前ニ讓ラス殊ニ同三十八年臨時戸口調査ノ終了ト共ニ戸口ニ關スル事務ハ總テ警察ノ手ニ依リテ處理スルニ至リ一層ノ繁多ヲ極メタリ同四十二年十月官制改正ニ依リ廳ノ廢合ヲ行ヒ廳ヲ減シテ十二廳ト爲スヤ廳、支廳ノ樞要箇所ニ警視ヲ配置シ總督府ニ警視總長、蕃務總長ヲ置キ以テ普通警察事務ト理蕃事務トヲ區分シ各別ニ統一スルニ至レリ

理蕃事業ノ進捗ハ分課規程ノ改正ト爲リ大正二年六月十日以降隘勇線内及隘勇線ノ設置ナキ蕃地事務ハ普通警察事務ニ移屬シ隨テ隘勇線ノ設置ナキ阿緞、臺東兩廳蕃務課ハ之ヲ廢止セリ又同年九月一日ニ至リ南投廳蕃務課ヲ廢シ該事務ハ普通警察事務ニ編入セリ而シテ總督府ニ於ケル分課規定改正ノ結果普通警察事務ニ移屬シタル理蕃事務ハ總テ警察本署長ノ管掌ニ歸セシメタリ而シテ同四年七月蕃務本署ヲ廢シ其事務ハ總テ警察本署ニ併合セリ

二警察官ノ配置 警察定員ノ配置ハ數次ノ變遷ヲ經タリ其ノ主ナル原因左ノ如シ

一 匪徒ノ跋扈及其ノ剿滅

二 戸口、阿片犯罪即決及防疫、其ノ他各般行政施設ノ進歩ニ伴フ警察力ノ増進

三 蕃地經營及警備ノ擴張

而シテ今ヤ警察官職務範圍ノ膨脹ト民情ノ趨勢ハ益々定員ノ不足ヲ訴ヘ増員ノ必要アリト雖經費之ニ伴ハス而モ治安ノ維持ハ各種施設ノ根本ヲ爲スニ依リ大正五年度ニ於テハ從來緊縮セシ平地配置ニ巡查五〇〇人ヲ増員シ蕃地配置ニ於テ巡查二五〇人ヲ減シ之ニ代フルニ巡查補二五〇人ヲ以テセリ而シテ更ニ大正七年度ニ於テ平地配置巡查二〇〇人ヲ増員シ派出所ハ總テ巡查二人以上ヲ配置スルコトト爲セリ

最近ノ配置定員ヲ舉ケレハ警視一四人、警部二一三人、警部補四〇七人、巡查五、八八六人、巡查補一、四六一人、警手七三〇人、隘勇二、七八六人ナリ(警察本署ノ定員ヲ包含セス)警察機關ハ之ヲ平地蕃地ニ區分シ面積、人口、距離、蕃情等ニ依リテ其ノ標準ヲ定メ配置セリ

最近ノ警察機關數ヲ舉ケレハ警察本署一、廳警務課一二、支廳八五(內蕃地支廳五)派出所九三三、駐在所二五八、警戒所六〇、分遣所五〇九箇所ナリ

第二節 保安

一 保甲制度 本制度ハ清國政府時代ノ古制ヲ參酌シテ明治三十一年八月律令第二十一號ヲ以テ保甲條例ヲ制定シ警察ノ下級補助機關ト爲シタリ爾來其ノ成績漸次良好ナルヲ以テ諸般ノ下級行政事務ヲ補助セシムル必要ヲ認メ明治四十二年保甲條例ノ一部ヲ改正シテ保甲役員ニ區長ノ職務ヲ補助セシムルコトト爲シタル結果現今ニ在リテハ警察ノ補助機關タルニ止ラス諸般ノ下級行政事務ノ補助機關トシテ甚有用ノモノタルニ至レリ

保甲ノ組織ハ凡十戸ヲ以テ一甲ト爲シ十甲ヲ以テ一保ト爲スチ例トシ街庄ノ區域ニ從テ編成ス然レトモ各街庄戸數ニ多寡アリ悉ク一街庄一保ノ制ト爲シ難シ故ニ小ナルモノハ合シテ一保ト爲シ大ナルモノハ割キテ二保以上ト爲スコトヲ得レトモ一街庄ヲ二保以上ニ分屬セシムルヲ得サルモノトス而シテ各保聯合會議ヲ開催スル必要アルトキハ保正ハ廳長ノ

認可ヲ受ケ保甲聯合會ヲ組織シ各保關係ノ事項ヲ議定スルコトヲ得

保甲役員ハ保ニ保正、甲ニ甲長アリ保正ハ保ニ於テ甲長ハ甲ニ於テ選舉シ廳長ノ認可ヲ受クヘキモノトシ名譽職ニシテ無報酬タリ保甲ノ責任ハ主トシテ其ノ區域内ノ安寧ヲ保持スルニ在リテ規約ヲ定メ保甲内ノ戸口ヲ明ニシ其ノ異動ヲ整理シ出入者ヲ取締リ不良ノ子弟ヲ警戒シ德ヲ勸メ惡ヲ懲ラシ保甲民ハ連座ノ責任ヲ負ヒ以テ保甲内ヲ肅清シ治安ヲ維持スルモノトス又保甲ニハ匪徒竝風水火災ノ警戒防禦ノ爲壯丁團ノ設アリ

壯丁團ノ組織ハ一保若ハ數保ヲ合シテ一壯丁團ヲ編成ス壯丁ハ區域内ノ人民ニシテ通常十七歳以上五十歳以下ノ品行善良、身體強健ナル者ヲ選抜シテ之ニ充テ一朝事アルハ互ニ警ヲ傳ヘ變ニ備フ壯丁團エハ團長一名、副團長若干名ヲ互選シ壯丁ノ指揮監督ニ當ラシム又壯丁團ハ警察官吏ノ指揮監督ヲ受ケ時ニ警察官署ニ召集セラレ諸般ノ訓練ヲ受ケ壯丁團員ハ總テ無報酬ナルモ出役又ハ召集ノ場合ニ限り食費ヲ給スルコトアリ

保甲經費ハ通常一保一箇年二十五圓、聯合保ニ書記ヲ置クトキハ一保五十圓ノ範圍内ニ於

テ保正豫算ヲ編成シ廳長ノ許可ヲ受ケ保甲内ノ各戸ニ之ヲ賦課徵收ス若シ保甲費ニ不足ヲ生シ臨時徵收ノ必要アルトキハ廳長ハ警察本署長ノ承認ヲ受ケ之ヲ認可スルモノトス
大正六年末ニ於ケル保甲及壯丁團員左ノ如シ

保		甲		壯		丁		團	
保數	保正	甲長	團數	團長	副團長	壯	丁		
四九九七	四九九二	四八七〇五	九五二	九五二	四五三三	四〇、四七〇			

二戸口制度 明治二十八年日清講和條約ニ依レハ明治三十年五月八日迄ニ本島ヲ退去セサル住民ヲ日本國臣民ト看做スコトニ規定セラレタルヲ以テ明治二十九年八月一般住民ニ告諭シテ新ニ戸籍ヲ編成シ本島住民確認ノ證據タラシムヘキヲ以テセリ然レトモ本島住民ノ狀態ハ由來不規律ノ統治ニ馴レ國法ヲ遵守スルノ觀念甚薄弱ナルヲ以テ單ニ届出ノミニ依頼シテ戸口ヲ完備スルコトハ到底不可能ニ屬ス故ニ明治三十八年十月臨時臺灣戸口調査ノ

名ニ依リテ第一次國勢調査ヲ施行シ始メテ臺灣住民ノ靜態ヲ明ニスルコトヲ得タルモ未タ民籍ノ基本ヲ確實ニスルコト能ハサリシヲ以テ同年十二月戸口規則ヲ發布シ一面戸口調査規程ヲ改正シテ從來ノ戸籍ハ之ヲ廢止シ警察ノ戸口調査簿ヲ以テ戸口ノ異動ヲ明ニスルノ制ト爲セリ今茲ニ戸口規則ノ趣旨トスル所ヲ列舉スレハ本島人ニ對シテハ本居籍ヲ認メ内地人、支那人、朝鮮人ニ對シテハ寄留籍ヲ認メタリ而シテ又之カ整理ノ方法トシテ届出主義ト實查主義トヲ併用セシモノナルカ故ニ若届出ヲ怠ル者アル場合ニハ警察官吏ノ實查報告ニ依リ戸口調査簿ヲ整理シ戸口ノ實體ヲ正確ナラシム

三浮浪者取締 一定ノ住所又ハ生業ヲ有セサル無爲徒食ノ輩ハ社會害惡ノ萌芽タルニ拘ラス現行法ハ之ヲ處罰スルニ極メテ輕微ノ刑ヲ以テスルカ故ニ何等反省ノ效ナシ故ニ斯ル輩ニ對シテハ勞働ヲ強制シ漸次其ノ習慣ヲ養成シ獨立自營ノ方法ヲ得ルニ至ラシムル必要アリ而シテ強制勞働ハ交通ノ隔絶セル地方ニ於テ一定ノ場所ニ收容シ勞働ニ從事セシムルヲ最適當ト認メ明治三十九年三月律令第二號ヲ以テ浮浪者取締規則ヲ制定シ同四十一年九月

臺東廳加路蘭ニ定員六〇名ノ收容所ヲ設ケ強制労働ヲ實行セシニ其ノ實績大ニ見ルヘキモノアルヲ以テ同四十四年八月更ニ臺東廳火燒島ニ定員一〇〇名ノ收容所ヲ増設セリ
 浮浪者取締ノ要旨ハ浮浪者ヲシテ獨立自營ノ民タラシムルニ在ルヲ以テ浮浪者ニ對シテハ廳長ハ就業又ハ定住ヲ戒告シ保甲役員又ハ警察官ニ於テ常ニ其ノ行動ヲ視察シ改悛ノ情アル者ハ其ノ戒告ヲ解除シ改悛ノ情ナキ者又ハ戒告スルモ其ノ效ナキ者ト認メタルトキハ廳長ハ警察本署長ノ承認ヲ經テ之ニ強制就業ヲ命令シ浮浪者收容所ニ送致ス收容後一年ヲ經過シ改悛ノ情顯著ナル者アルトキハ收容所長ハ其ノ解除ヲ所屬廳長ニ稟申シ廳長ハ警察本署長ノ承認ヲ經テ強制就業ヲ解除シテ歸郷セシム
 浮浪者收容所職員ハ警部、警部補、巡查及醫員ニシテ所長ハ警部ヲ以テ之ニ充テ職員ヲシテ浮浪者ノ就業ヲ監督セシメ時々教誨的訓戒ヲ爲シ改過遷善ノ實ヲ擧ケシム
 浮浪者ノ作業ハ開墾、耕作、籐細工、指物、養鶏、養豚等ニシテ其ノ收益ハ浮浪者ニ支給ス官衙又ハ私人ヨリ浮浪者使役ノ求メアルトキハ之ヲ認容シ土工、其ノ他諸種ノ労働ニ從

事セシメ相當ノ賃金ヲ支給ス

浮浪者ノ食費及藥價、手術料ハ各自ノ自辨ニシテ已ムヲ得サル事情アル場合ニ非サレハ官給スルコトナシ

浮浪者收容所ノ收容定員ハ加路蘭六〇名火燒島一〇〇名ニシテ收容現在員ハ一七二名ニ達シタルヲ以テ定員外ノ者ハ已ムヲ得ス臺東廳元旭村移民指導所ノ建物ニ一時之ヲ收容セリ而シテ加路蘭收容所ハ明治四十一年ノ建築ニ係リ白蟻ノ被害甚シキヲ以テ改築ノ必要アルノミナラス其ノ所在地ハ卑南ヲ距ル北方二里ニシテ其ノ中間ニ卑南大溪アリ雨期ニ際シテハ交通ノ杜絶スルコト多ク且浮浪者ヲシテ労働ニ從事セシムルニ甚不便ヲ感シ浮浪者ノ就業上適當ノ場所ニアラサルヲ以テ之ヲ卑南附近ニ移轉改築ノ必要アリ又從來ノ浮浪者取締上ノ成績ニ鑑ミ大正六年度ヨリ其ノ收容定員ヲ少クモ三〇〇名ニ増加セシメントノ希望ナリシモ豫算ノ關係上遂ニ其ノ希望ニ副ハサリシヲ遺憾トス

浮浪者取締規則實施後大正六年末ニ至ル浮浪者戒告人員及強制就業人員左ノ如シ

戒		告		強 制 就 業	
現在人員	解除人員	死亡人員	現在人員	解除人員	死亡人員
八五二	一五五	三	一七二	一七七	三

四支那労働者取締 支那労働者ニ對シテハ領臺當時本島ノ安寧秩序ヲ維持スル必要上明治二十八年日令ヲ以テ清國人臺灣上陸條例ヲ制定シ一時其ノ上陸ヲ禁止セリ爾來時勢ノ變遷ト勞力ノ需要トニ應シ同三十一年清國人茶工券規則ヲ、翌三十二年清國労働者取締規則ヲ發布シ労働者本島上陸ノ途ヲ開キシモ此等ノ規則ハ當時ノ狀勢ニ照シ重キヲ治安上ニ置キ制定シタルモノナルヲ以テ民情平靜ニ歸シ殖産、工業ノ勃興スルニ從ヒ労働者ニ關シテハ經濟上ニ及ホス影響少カラサルヲ以テ取締規則改正ノ必要ヲ認メ明治三十七年九月清國人茶工券規則及清國労働者取締規則ヲ廢止スルト同時ニ現行清國労働者取締規則ヲ制定セリ労働者取締ノ概況ハ労働者ニシテ本島ニ渡航希望ノ者ハ労働者取扱人ヨリ渡航證明書ヲ受

ク本島上陸ノ際其ノ地ノ警察官署ヨリ上陸許可證ノ下付ヲ受ケ労働者ハ常ニ其ノ許可證ヲ携帶シ歸還ノ際ハ之ヲ返納セシムル制度ナルヲ以テ労働者ト非労働者ノ區別、労働者ノ上陸歸還及現在人員ヲ明ニスルコトヲ得保安警察上ノ便宜ヲ得ルト同時ニ勞力供給ノ狀勢ヲ知悉スルコトヲ得

労働者取扱人ハ南國公司ニシテ本店ヲ臺北ニ、支店ヲ廈門ニ、出張所ヲ淡水、基隆、安平、打狗、福州及汕頭ニ設置セリ労働者取扱人ハ總督ノ許可シタル者ニシテ指定シタル保證金ヲ納付セシム而シテ労働者取扱人ハ一人ニ對シ金四圓四十錢ノ手数料ヲ徴シ労働者疾病、其ノ他ノ災害ニ罹リタルトキハ之カ救濟ヲ爲シ歸還旅費ナキ者ニ對シテハ之ヲ送還スルノ義務ヲ負ヒ尙本島在住中官廳ニ提出スル願届等ニ付便宜ヲ與フルモノトス大正六年末現在労働者八一九、七九三人ナリ

五海賊取締 本島沿岸ニ出沒スル海賊ハ大正元年ヨリ著シク増加シ沿岸及對岸航行ノ危險少カラス今最近數年間ニ於ケル被害概況ヲ見ルニ大正元年六回、同二年一四回、同三年二

同、同四年一一回、同五年五回ノ襲來ヲ受ケタルモ幸ニ同六年ニハ其ノ被害ナシ而シテ該海賊ハ南支那沿岸ニ根據ヲ有スルモノニシテ毎年六、七、八、九月ノ季節風ニ乘シ本島沿海ヲ窺ヒ或ハ長船ノ假面ヲ被リ本島ニ近寄り機ヲ見テ巧ニ沿岸航行ノ戎克船ヲ襲ヒ掠奪ヲ行フモノナリ是ヲ以テ總督府ニ於テハ爾來戎克船ノ出入スル港灣ノ取締ヲ嚴密ニスルト同時ニ沿岸航行ノ戎克船ニ警察官ヲ便乘セシメ或ハ馬公要港部ニ交渉シテ警戒ノ爲驅逐艦ヲ出動セシムル等警戒搜索懈ル所ナシト雖尙其ノ間隙ニ乘シ前記ノ如ク襲來ヲ受ケタリ狀況以上ノ如クナルヲ以テ從來ノ警戒方法ニテハ到底其ノ目的ヲ達スルコト能ハス將來有力ナル警備船ヲ備ヘ專ラ海賊船ノ警戒搜索ニ當ラシムル必要アリ

六民有銃砲ノ整理 明治三十五年末ニ於ケル匪徒大剿討ノ結果全島 匪徒其ノ跡ヲ絶チ地方平靜ニ歸シ復タ昔日ノ如ク個人ニ於テ武裝警戒ヲ爲スノ必要ヲ認メサルニ至リシヲ以テ本島人私有ノ軍用銃砲取締ヲ勵行シ同年末及明治四十四年ノ二回ニ於テ本島人私有銃砲全部ヲ引揚ケ廢棄ヲ爲シ尋テ大正二年臺灣銃砲火藥類取締規則改正ノ際本島人ノ私有セル非

軍用銃砲全部ノ廢棄其ノ他ノ處分ヲ爲サシメタリ然ルニ本島人中今尙銃器ヲ隱匿スルノ形跡アルヲ以テ其ノ發見ニ努メタル結果大正四年銃器七六挺、同五年銃器一七五挺、銃身六〇五挺ヲ發見シ之ヲ廢棄セリ

第三節 司法

一犯罪即決例 本例ハ明治三十七年三月律令第四號ヲ以テ發布シタルモノニシテ同年四月一日ヨリ之ヲ實施シタリ其ノ内容ハ輕微ナル犯罪事件ニ關シ繁瑣ナル刑事訴訟ノ手續ヲ省キ以テ治罪ノ敏速ヲ期スルニ在リ然レトモ若被告人ニ於テ不服アルトキハ何等ノ手續ヲ要セス唯、其ノ申立ニ依リ正式裁判ヲ請求スルコトヲ得爾來十有餘年間ニ於ケル實施ノ狀況ヲ見ルニ其ノ成績良好ニシテ毎年廳、支廳ニ於テ處理セシ件數實ニ四萬數千件ニ達シ之ニ對シ正式裁判ヲ請求セル者僅ニ三〇件内外ニ過キス以テ其ノ一斑ヲ窺フニ足ラン

二罰金及笞刑處分例 本例ハ明治三十七年一月律令第一號ヲ以テ發布シタルモノニシテ其ノ要ハ本島人及支那人ノ犯罪者ハ文化ノ程度低キト共ニ生活ノ狀態亦卑キカ故ニ之ニ對シ

テ短期間ノ自由刑ヲ科スルモ比較的苦痛ヲ感セス却テ安居ノ思アラシム乃チ短期自由刑ノ效果ハ寧ロ多年慣熟シ來リタル笞刑ノ效果ノ顯著ナルニ如カス又其ノ天性拜金思想強キヲ以テ之ニ對シテ短期自由刑ヨリモ罰金ヲ科スルヲ以テ優レリト認メ本島人及支那人ノ犯罪ニ對シテハ其ノ情狀ニ依リ短期自由刑ニ換フルニ罰金又ハ笞刑ヲ以テスルハ實驗ニ鑑ミ事情ニ照シ適切ナル制度ニシテ且之ニ伴ヒテ監獄費ノ節約ヲ期スルヲ得ヘシ而シテ本例實施ノ當時ハ學者宗教家等ノ非難アリシモ爾來十有餘年著々其ノ效果顯ハレ今日ニテハ一般ニ本島人支那人ニ對スル刑事政策上適當ノモノト認メラレツツアルノ實況ナリ

第四節 理 蕃

一 概況 領臺當時ノ蕃政ハ專ラ懷柔主義ヲ執リ明治二十九年三月撫墾署官制ヲ發布シ大嶽炭外十箇所ニ撫墾署ヲ置キ蕃人綏撫並蕃地内事業取締等ニ從事セシメタリ超エテ同三十一年六月地方官官制ヲ改正シテ撫墾署ヲ廢シ其ノ管掌シタリシ事務ハ之ヲ新ニ設置シタル辨務署ニ移管シタリ同三十四年十一月又地方官官制ヲ改メ全島ニ二十廳ヲ置キ蕃地ヲ管轄ス

ル廳ニ在リテハ其ノ總務課ヲシテ蕃務ヲ處理セシメタルモ背後ニ威力ヲ有セサル對蕃政策ハ功ヲ收ムルコト至難ナルノミナラス當時匪徒未タ戡定セス加之惡疫ノ瀰蔓スルアリ蕃人ニ對スル威壓、綏撫兩ナカラ殆ト見ルニ足ルモノナカリシモ同三十五年匪徒全ク平定シタルヲ以テ同三十六年一月從來殖産局ノ管掌セシ蕃人、蕃地ノ事務ヲ警察本署ニ移管シ從テ地方ニ於テモ之ヲ警察事務ニ移シタリ同三十九年四月警察本署内ノ蕃務係ヲ擴張シテ蕃務課ト爲シ專ラ力ヲ理蕃事業ニ致シ同四十二年ニ至ル迄ノ間ニ屢、隘勇線前進又ハ蕃社討伐ヲ實行シ著々效果ヲ收メ得タリト雖北蕃中ノ大部族ハ尙險ニ據リ衆ヲ恃ミ橫暴ヲ逞フスルニ由リ同四十二年以降五箇年間ヲ期シ威力ヲ以テ蕃人ノ所有セル銃器ヲ押收スヘク計畫シ同四十二年十月總督府官制ヲ改正シ府内ニ蕃務本署ヲ置キ蕃地關係ノ各地方廳ニハ蕃務課ヲ置キ「ガオガン」蕃、「マリコワン」蕃、「キナジ」蕃、「北勢蕃」、霧社蕃、白狗蕃、「マレツバ」蕃、「シカヤウ」蕃、「サラマウ」蕃、「シヤカロウ」蕃、太魯閣蕃等ヲ處分シテ銃器彈藥ヲ提供セシメ大正三年八月迄ニ略、其ノ目的ヲ達シタルヲ以テ同年十月ヨリ阿緞、臺東兩廳下「ブヌ

ン」族ノ銃器押収ヲ開始シ已ニ之ヲ了ラントスル時ニ當リ阿緞廳ノ「パイワン」族蜂起シ「リ
 キリキ」駐在所、其ノ他ヲ襲撃シテ警察官ヲ慘殺シ兇惡至ラサルナキニ因リ臺東方面ニ在リ
 シ搜索隊ヲ轉進セシメテ之ヲ脅懲シ銃器ヲ提供セシメテ其ノ歸順ヲ許シタリ然ルニ施武群
 蕃ノ一部ハ不逞ノ本島人ニ煽惑セラレ同四年五月「カシバナ」、「タアフン」等ノ駐在所ヲ襲
 ヒテ殺掠ヲ肆ニセリ是ニ於テ一面之ヲ鎮壓シ一面之ヲ操縱シ同年十月ヨリ臺東、花蓮港兩
 廳ニ亙ル二十三里ノ間ニ鐵條網ヲ架設シ十一月下旬其ノ工ヲ竣レリ之ニ依リ兩廳蕃界接壤
 地ノ民庄ハ勿論東部臺灣ノ幹線タル交通路ノ安全ヲ保ツテ得ルニ至レリ
 鐵條網ヲ以テ封鎖サレタル花蓮港廳ノ「ブヌン」族ハ屢々南投廳丹大方面ニ出沒シ同族蕃人
 ヲ煽動シ形勢漸ク險惡ナルニ因リ此ノ方面各駐在所間ノ道路ヲ改修シ且丹大駐在所ニ堅牢
 ナル防禦工事ヲ施スコトトシ大正五年七月起工同十月竣功セリ而ルニ翌六年一月花蓮港廳
 下ノ施武群蕃大舉シテ丹大ニ來リ同社及附近蕃へ強要シテ己レニ黨セシメ同地駐在所ヲ包
 圍攻撃スルコト五日間ニ及ヒタルモ巡查以下二十一名ノ所員ハ死力ヲ竭シテ拒守シツツア

リシカ集集方面ヨリ進出シタル應援隊ハ花蓮港ヨリ來レル兇蕃ヲ擊攘シ同月之ニ加擔シタ
 ル丹大方面ノ兇蕃ヲ脅懲シ終ニ之ヲ歸順セシメタリ又阿緞廳ノ「ブヌン」族ハ同方面ノ製腦
 地又ハ民庄附近ヲ侵シ兇害ヲ加フルヲ以テ之ヲ防遏スル爲茅瀉溪畔約十二里ノ間ニ鐵條網
 ヲ架設スルコトトシ同十月起工十二月竣工セリ

臺東、花蓮港兩廳下ノ施武群蕃ハ鐵條網ヲ以テ封鎖セラレタル爲漸ク食鹽、綿布其ノ他日
 用品ノ缺乏ニ困ミ大正七年二月マテニ歸順シタルモノ花蓮港廳下ニ在テハ十六社七十戶其
 ノ人口四百四十三、臺東廳下ニ在テハ十八社二百十八戶其ノ人口千九百九十人ニシテ未歸
 順蕃百戶内外ニ過キササルニ至レリ

以上概記シタルカ如ク大正四年七月迄ハ専ラ蕃人威壓ニカメタルヲ以テ勢ヒ撫育ニハ重キ
 ナ置ク能ハサリシト雖從來柔順ナルカ又ハ歸順シタル蕃社ニ對シテハ種々ノ方法ヲ以テ之
 ナ撫育セリ其ノ機關トシテハ警察官吏駐在所ノ外之ニ附設セル交易所五十六箇所、蕃童教
 育所六十六箇、所蕃人施療所百一十箇所アリ

二種族 本島ニ棲息セル十三萬有餘ノ蕃族ハ盡ク馬來系統ニ屬シ支那大陸ヨリ移住シタル漢人種トハ全ク其ノ骨節、容貌、言語竝風俗、慣習等ヲ異ニセリ而シテ之ヲ南蕃、北蕃ノ二種ニ分ツハ其ノ分布ノ位置ニ由レルモノニシテ之ヲ「タイヤル」(北蕃)、「ブヌン」、「ツオオ」、「パイロン」、「アミ」、「ヤミ」(以上南蕃)及「サイセツト」ノ七種族ニ分ツハ其ノ自稱ヲ用キタルナリ(七種族ノ生蕃中汎キ意義ノ人ト曰フ言語ヲ有スル者少ク其ノ「タイヤル」、「ブヌン」、「ツオオ」等自稱スルハ單ニ自己ノ種族ヲ限レル狹キ意義ノ人ナリ故ニ他種族ニ對シテハ其ノ異ナル毎ニ適宜ノ名ヲ被ラシムルヲ常トス尙詳ニ之ヲ言ヘハ「ブヌン」ト呼ビ「タイヤル」ト呼フハ恰カモ我國民ノ大和民族ト自稱スルニ異ナル所ナシ而シテ我亦彼ノ自稱ヲ用キテ其ノ種族ノ名トシタルハ猶北海道原住民ノ「アイヌ」ト自稱スルヲ他ヨリモ亦之ヲ「アイヌ」ト呼フト相同シ)而モ自稱ノ異ナルニ從ヒ各其ノ言語及風俗、慣習ヲ異ニセルニ由リ此ノ名稱ヲ以テ直ニ人類學上ノ區別トモ爲スコトヲ得ルナリ

「サイセツト」族ハ元來平埔蕃中ノ「タオカス」ト稱スル一種族ナレトモ往昔「タイヤル」族ノ

壓服スル所ト爲リシニ由リ自己本來ノ風俗ヲ棄テ「タイヤル」族ニ模倣シ男子ハ額ニ黥セルヲ以テ蕃俗ニ通セサル人之ヲ一見スルトキハ「タイヤル」族ト辨別シ易カラス是レ他ノ平埔蕃カ漢人種ニ接觸シタル爲漸ク支那化シタルニ反シ此ノ「サイセツト」族ハ「タイヤル」族ニ接觸シタルカ爲漸ク蕃化シタルモノニシテ唯、言語、慣習ノミハ依然固有ノモノヲ使用ス

大正二年五月理蕃概要ヲ刊行セサル以前ハ「パイロン」、「ツアリセン」、「ブユマ」ハ各別個ノ種族トシタルモ此ノ三者ハ體質、歴史、言語、風俗、慣習ヲ同フシ之ヲ種別スヘキモノニアラサルヲ以テ最古キ口碑上ノ歴史ヲ有シ且戸數、人口亦最多數ヲ占ムル「パイロン」族中ニ「ツアリセン」、「ブユマ」ヲ加ヘテ一種族ト爲シタリ若然ラスシテ悉ク其ノ自稱ニ從ハンカ「セエテツカ」ト自稱スル太魯閣蕃、霧社蕃等ハ之ヲ「タイヤル」族中ヨリ分離シテ一種族ト爲シ「サアルヤ」ト自稱スル嘉義廳ノ四社蕃ハ之ヲ「ツオオ」族中ヨリ分離シテ一種族ト爲ササルヘカラサルニ至リ其ノ煩ニ堪ヘサルヲ以テナリ

本島ノ生蕃ヲ分テ七種族ト爲スコトハ既ニ前ニ述ヘタル所ノ如シ而シテ更ニ其ノ種族ヲ分

チテ數十部族ト爲シタルハ各種族中其ノ先祖ヲ同ノセルカ爲祭典、年中行事等ノ時期チ一ニシ且攻守ノ際ニハ必ス同盟スル三、四社乃至數十社ヨリ成ル團體アリテ明瞭ニ之ヲ區別シ得ヘク猶且統治上ニモ資スヘキモノ有ルヲ以テナリ即チ左ニ種族別ヲ表示シテ一覽ニ便ナラシム(大正六年末)

種族	社數	戸數	人		口計
			男	女	
タイヤル	二六五	六、五八八	一五、五三八	一六、四七六	三二、〇一四
サイセツト	一〇	一八九	五七五	五六二	一一、一三七
ブ・ヌン	二一九	一、九二八	九、〇五六	八、四六八	一七、五二四
ツ・オ・オ	二四	二四九	一、二六四	一、一三六	二、四〇〇
パイワ	一七五	八、五七〇	二二、一〇六	二〇、九三七	四三、〇四三
ア・ミ	六八	四、八八五	一八、六六八	一八、七五九	三七、四二七
ヤ・ミ	七	三一五	七八七	六九一	一、四七八
計	六六八	二二、七二四	六六、九九四	六七、〇二九	一三四、〇二三

三分布 臺灣ノ脊梁ヲ形成セル山脈ハ島ノ北端三貂角ヨリ起リテ蜿々トシテ南ニ向テ走リ

南端ノ鸞鑾鼻ニ至リテ盡ク所謂中央山脈之ナリ此山脈ノ西部ハ率ネ平原ニシテ清國政府時代ニ於テ多クハ之ヲ開拓シテ田園ト化セシメ森林ノ如キハ既ニ伐盡シテ幾ント剩ス所ナカリキ乃チ今ノ縱貫鐵道沿線ヨリ恒春地方ニ至ル一帶ノ地域ニシテ其ノ東部ニ於ケル山地ハ總テ蕃界ナリトス臺東、花蓮港兩廳ノ所轄セル東海岸ノ平野ハ行政區域ニ編入シテヨリ日已ニ久シト雖其ノ住民ノ大部分ハ生蕃ノ一種タル「アミ」族ナリ今左ニ蕃族ノ分布狀態ヲ概説セントス

「タイヤル」族ハ南投廳埔里社以北ノ中央山脈ニ傍ヘル一帶ノ山地ニ蟠踞シ或ハ集團部落ヲ成シ或ハ點々散居セリ其ノ位置ハ海拔八百尺乃至五千尺ノ間ニ在リ「ブ・ヌン」族ハ埔里社以南ノ中央山脈及其ノ東側ニ傍ヒ知本主山以北ニ至ル山地ニ棲息シ或ハ小部落ヲ成シ或ハ散居ス其ノ位置ハ海拔千五百尺乃至六千四百尺ノ間ニ在リ「ツ・オ・オ」族ハ新高山ノ正面ニ流下スル諸谿ノ流域ニ占居シ集團部落ヲ成ス其ノ位置ハ海拔千三百尺ヨリ三千五百尺ノ間ニ在リ「パイワ」族ハ知本主山ノ南ヨリ恒春ノ南端ニ至ル一帶ノ山地ニ蟠踞シ多クハ集團部落

ヲ成ス其ノ位置ノ最高キモノハ三千五百尺ノ處ニ在リ「アミ」族ハ臺東、花蓮港兩廳ノ平地ニ棲息シ集團部落ヲ成ス「ヤミ」族ハ卑南ヲ距ル南東四十海里ノ大洋中ナル孤島紅頭嶼ニ棲居シ海瀕ノ各處ニ小部落ヲ成ス「サイセツト」族ハ新竹廳南庄附近ノ山地ニ棲息シ不整頓ナル集團部落ヲ成セリ

四 橫斷道路ノ開鑿 南投廳霧社支廳所在地ヨリ花蓮港廳初音ニ至ルマテノ里程ハ約二十里ニシテ此ノ間峯巒重疊シ葑萊主山、能高山等一萬尺以上ノ高山アルニ拘ラズ山腹ノ緩傾斜地ニ傍ヒ道路ヲ開鑿スレハ良好ナル交通路ト爲シ得ヘキノミナラス南北兩蕃ノ制壓上ニモ甚有利ナルヲ以テ警察官ヲ以テ搜索隊ヲ編成シ之カ開鑿ノ事ニ從ハシムルノ議ヲ決シ花蓮港廳方面ハ大正六年九月十五日ヨリ南投廳方面ハ同十月十日ヨリ工ヲ起シタルモ同年末ヨリ今年初春マテノ間ハ沍寒大雪ノ妨クルトコロトナリ工事ヲ中止シタルカ本年二月以來殘工事ニ著手シ同三月二十四日ヲ以テ全部完成スルヲ得タリ此ノ道路ノ南投廳ニ屬スル分ハ八里、花蓮港廳ニ屬スル分ハ十二里ニシテ本島改隸以來東西連絡橫斷道路ヲ新ニ開鑿シタルハ之ヲ以テ嚆矢ト爲ス

第二十二章 裁判及監獄

第一節 裁判

一 沿革 本島ノ我カ版圖ニ歸スルヤ兵馬倥傯ノ際司法事務ノ如キモ軍法會議又ハ地方行政官ニ於テ便宜之ヲ處理セシカ後軍令ヲ以テ臺灣總督府法院ノ編成ニ關スル法令ヲ發布シ總督府ニ法院ヲ置キ地方樞要ノ地ニ其ノ支部ヲ設ケ單獨ノ審判官ヲ以テ臺灣住民ノ犯罪及民事訴訟ヲ裁判セシメシカ明治二十九年五月軍政ヲ解キ民政ヲ布クニ及ヒ律令第一號ヲ以テ臺灣總督府法院條例ヲ制定シ始メテ法院ヲ置キ地方、覆審及高等ノ三級審ト爲シ凡テノ事件ノ裁判ヲ掌ラシム地方法院ハ單獨判官ニテ民事事ノ第一審裁判及刑事豫審ヲ爲ス所トシ其ノ管轄區域ハ行政區劃ニ依リ十五箇所ニ之ヲ設ケ高等及覆審法院ハ總督府所在地ニ各一箇所ヲ置キ覆審法院ハ三人、高等法院ハ五人ノ合議制ト爲シ覆審法院ハ地方法院ノ裁判ヲ覆審シ高等法院ハ覆審法院ノ裁判ニシテ適法ニアラサルモノヲ破毀矯正スル所トス明治三

十一年七月法院條例ヲ改正シ高等法院ヲ廢シ地方及覆審ノ二級審ト爲シ以テ現今ニ至レリ
二司法機關 臺灣總督府法院ハ總督ニ直屬シ民事刑事ノ裁判及非訟事件ニ關スル事務ヲ掌
ル通常法院ノ外臨時法院ノ制ヲ設ケ普通ノ裁判管轄ニ拘ラス政治犯罪及匪徒刑罰令ニ掲ケ
タル犯罪ニ付審理セシムルコトヲ得

通常法院ハ覆審及地方ノ二級審トシ臨時法院ハ一審ヲ以テ終審トス覆審法院及臨時法院ハ
判官三人ノ合議制トシ地方法院ハ單獨制トス覆審法院ハ總督府所在地ニ一箇所ヲ置キ地方
法院ノ位置及管轄區域ハ總督之ヲ定ムルコトトシ地方法院管内ニ出張所ヲ置クコトヲ得各
法院ニ院長及判官ヲ置ク院長ハ判官ヲ以テ之ニ補ス
覆審法院ニ一若ハ二以上ノ部ヲ設ケ各部ニ部長ヲ設ケ判官ヲ以テ之ニ補ス但シ院長ヲ以テ
一部ノ長ニ充ツ現時ニ部ヲ設ケ各部共民事刑事ヲ取扱フ又書記長ヲ置キ上官ノ命ヲ承ケ書記
ノ事務ヲ指揮監督セシム

各法院ニ檢察局ヲ附置シ檢察官長及檢察官ヲ置ク検査官長ハ檢察官ヲ以テ之ニ補ス地方法

院檢察官ノ職掌ハ警部ヲシテ之ヲ代理セシムルコトヲ得

判官及檢察官ハ勅任又ハ奏任トス裁判所構成法ニ於テ判事、檢事タル資格アルモノニアラ
サレハ判官、檢察官タルコトヲ得ス判官ハ終身官トシ其ノ意ニ反シテ轉官免官セラレルコ
トナキモ唯、轉所ノ保障ヲ缺キ及總督ニ於テ必要ト認ムルトキハ休職ヲ命シ得ル點ニ於テ
裁判所構成法ト異ナルノミ又各法院及檢察局ニ通譯、書記ヲ置キ通譯ハ法廷ニ立會ヒ通譯
ノ外翻譯事務ニ從事シ書記ハ民事事ノ審判ニ關スル準備及法廷ニ立會ヒ調書ヲ作り其ノ他
諸般ノ事務ニ從事スルモノトス

法院ノ位置及管轄區域ハ左ノ如シ

法院ノ位置及管轄區域

名	稱	位	置	管	轄	區	域
臺北地方法院	臺	北	臺北廳、桃園廳、新竹廳、宜蘭廳、臺東廳、花蓮港廳	各管	下一	圓	

臺北地方法院 宜蘭出張所	宜 蘭	臺北地方法院管轄ノ内宜蘭廳、臺東廳、花蓮港廳各管 下一圓
臺中地方法院	臺 中	臺中廳、南投廳各管下一圓
臺南地方法院	臺 南	嘉義廳、臺南廳、阿緱廳、澎湖廳各管下一圓

三登記事務 建物及船舶ニ關スル登記ハ内地人關係即チ民法商法及其ノ附屬法律ノ適用ヲ受クル者ニ限り明治三十二年以來民法上ノ權利名義ニ依リ不動産登記規則及船舶登記規則ヲ準用登記シ土地ニ付テハ明治三十八年登記ノ制ヲ定メ舊慣上ノ權利タル業主權、典權、胎權及購耕權ニ付登記ス而シテ土地登記ハ強制登記ノ制ヲ採用ス即チ土地ニ關スル權利ノ設定、移轉、變更及處分ノ制限又ハ消滅ハ相續遺言ニ因ル場合ヲ除クノ外登記ヲ必要條件トス要スルニ本島土地登記制ハ内地登記法ノ如ク單ニ第三者ニ對抗スル公示方法ニアラスシテ土地ニ關スル法律行為ノ成立要件ト爲セリ

明治三十八年土地登記ノ實施セララルルヤ地方法院及其ノ出張所管内ニ登記所ヲ置キ法院書

記ヲシテ登記及公證事務ヲ取扱ハシムルコトトシ登記所ノ位置及管轄區域ハ總督之ヲ定ムルコトトセリ現行登記所ノ位置及管轄區域ハ左ノ如シ

名 稱	位 置	管 轄 區 域
臺北地方法院淡水登記所	淡 水	臺北廳管下淡水支廳管內一圓
同 基隆登記所	基 隆	臺北廳管下基隆支廳、頂双溪支廳、金包里支廳、水返脚支廳各管內一圓
同 新店登記所	新 店	臺北廳管下深坑支廳、新店支廳各管內一圓
同 桃園登記所	桃 園	桃園廳管下廳直轄、三角湧支廳各管內一圓及大嵙崁支廳管內ノ中員樹林區、大嵙崁區、三層區各一圓
同 中壢登記所	中 壢	桃園廳管下中壢支廳、楊梅壢支廳、咸菜礮支廳各管內一圓及大嵙崁支廳管內ノ中龍潭區、三坑仔區各一圓
同 新竹登記所	新 竹	新竹廳管下廳直轄、北埔支廳、樹杞林支廳、新埔支廳、頭份支廳、南庄支廳各管內一圓
同 苗栗登記所	苗 栗	新竹廳管下苗栗支廳、通霄支廳、三叉河支廳、大湖支廳各管內一圓

同	宜蘭出張所	臺北地方法院	臺東登記所	臺中地方法院大甲登記所	彰化登記所	北斗登記所	南投登記所	埔里社登記所	臺南地方法院斗六登記所	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
花蓮港	花蓮港	花蓮港	臺東	大甲	彰化	北斗	南投	埔里社	斗六	北港	嘉義	樸仔脚							
花蓮港廳管下一圓	臺東廳管下一圓	臺中廳管下大甲支廳管內一圓	臺中廳管下彰化支廳、鹿港支廳各管內一圓	臺中廳管下北斗支廳、員林支廳、二林支廳各管內一圓	南投廳管下廳直轄、草鞋墩支廳、集集支廳、林圯埔支廳各管內一圓	南投廳管下埔里社支廳管內一圓	嘉義廳管下斗六支廳、西螺支廳、土庫支廳各管內一圓	嘉義廳管下北港支廳管內一圓	嘉義廳管下廳直轄、打猫支廳、竹頭崎支廳、中埔支廳各管內一圓	嘉義廳管下樸仔脚支廳、東石港支廳各管內一圓									

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	鹽水港	
嘉義廳管下鹽水港支廳、店仔口支廳各管內一圓	臺南廳管下大目降支廳、灣裡支廳、礁吧哖支廳各管內一圓	臺南廳管下阿公店支廳、楠梓坑支廳各管內一圓	臺南廳管下鳳山支廳、打狗支廳各管內一圓	阿緞廳管下東港支廳、枋寮支廳、枋山支廳各管內一圓	阿緞廳管下恒春支廳管內一圓	阿緞廳管下廳直轄、阿里港支廳、潮州支廳各管內一圓	阿緞廳管下蕃薯寮支廳、六龜里支廳、甲仙埔支廳各管內一圓	澎湖廳管下一圓												

四辯護士及公證人 本島ニ於ケル訴訟代理ニ關シテハ明治三十一年訴訟代人ノ制ヲ設ケ辯
 第二十二章 裁判及監獄

護士タル資格アル者又ハ總督府ノ檢定ヲ經タル者ヲシテ訴訟代人タルヲ得セシメタリシカ
同三十三年臺灣辯護士規則ヲ發布シ内地ノ辯護士法ヲ準用シ翌三十四年訴訟代人ヲシテ一
定ノ期間内ニ辯護士名簿ニ登錄スルコトヲ許シ訴訟代人規則ヲ廢止シ今日ニ及ヘリ
公證制度ニ關シテハ別ニ公證人ヲ置カス法院ノ所管トシ地方法院判官及登記所書記ヲシテ
之ヲ取扱ハシム而シテ證書ノ作成ニ關シテハ公證人法ニ依據ス

五 犯罪人名簿 犯罪行為犯人ノ狀態等ヲ調査シ其ノ他處罰上ノ參考ニ資スルノ便ヲ計ルノ
目的ヲ以テ其ノ材料ヲ各法院檢察局、各廳、支廳及陸軍法官部ニ之ヲ求メテ蒐集シ明治二
十九年八月ヨリ犯罪人名簿ヲ編纂シ現今ハ毎月一回之ヲ關係官衙ニ配布ス

第二節 監獄

一 沿革 明治二十八年十一月臺灣監獄令及監獄假規則ヲ制定セリ當時軍務匆忙ノ際ナリシ
カハ一時警察署若ハ憲兵隊ノ留置場ヲ以テ獄舎ニ代フルノ便法ヲ執リシモ翌二十九年四月
民政施行ニ當リ初メテ臺北、新竹、宜蘭、臺中、苗栗、鹿港、埔里社、雲林、臺南、鳳山、

嘉義、恒春及澎湖島ノ十三箇所ニ監獄ヲ設置シ事務ヲ開始スルニ至レリ其ノ後屢々廢置分
合ヲ行ヒ超エテ三十二年二月臺灣監獄則ノ發布アリ翌三十三年九月總督府監獄官制ノ發布
セララルニ及ヒテ終ニ全島ノ監獄ヲ總督ノ直轄ニ移シ以テ現今ニ至レリ左ニ現時ノ監獄數
及官吏ノ定員ヲ掲ク

監獄		職							員	
本監	支監	典獄	監吏	通譯	監獄醫	教誨師	教師	藥劑師	看守	女監取締
三	一	三	三五	三	六	七	一	一	五二六	一六

二 獄舎 現今ノ監獄ハ臺北、臺中、臺南ノ三監獄及宜蘭ノ一支監トス領臺當初ニ於テハ清
國時代ノ廳舎廟宇若ハ倉庫等ヲ假用シタルモ檢束、衛生、作業等ノ設備完全ナラサルヨリ囚
徒ノ病死逃走等多カリキ是ニ於テ監獄新營ノ計畫ヲ立テ明治三十二年度ヨリ臺北、臺中、
臺南ノ三監獄ノ工事ニ著手スルニ至レリ而シテ其ノ設計ハ之ヲ歐米ノ最新式ニ則リ監房ヲ

第二十二章 裁判及監獄

扇面狀ニ排列シ分房制及雜居制ノ折衷主義ヲ採用シ檢束、衛生、作業等ニ最適應スヘキ考案ノ下ニ多數ノ囚人ヲ使役シテ工事ヲ進メ三十七年三月ニ至リ悉ク竣工シタリ而シテ三監獄ノ新營費總額ハ實ニ八十萬圓ヲ算ス

三在監人員 改隸以來明治三十六年ニ至ル迄ハ在監人員年々増加シ一日平均四、〇〇〇人ヲ超エシコトアリシモ三十七年以降漸次減少シテ四十年以來ハ一日平均三、二〇〇人内外ト爲レリ之カ主因ハ犯罪即決例並罰金及笞刑處分例施行ノ結果ニ歸スヘク續テ大正元年以來ハ相次テ恩赦ヲ行ハセラレタルカ爲非常ニ減少シ一時二、三〇〇人ニ降りシコトアルモ近時又匪徒事件ノ爲三、三五〇人ヲ算スルニ至レリ

在監人員ト犯數ノ比例

大正六年十二月三十一日

監 獄	刑 事 被 告 人	受 刑 者	留 置 者	計	犯罪百分比	
					初 犯	累 犯
臺北監獄	一七七	一、〇〇一	一	一、三八六	六七二	三二八
宜蘭支監	二元	一一〇		一四九	六六七	三三三

臺 中 監 獄	臺 南 監 獄	計
四八	九六	三五四
六二八	一、〇二六	一、六五四
九	七	一六
六七五	一一九	七九四
六四・五六	六九・〇一	一三三・五七
三五・四四	三〇・九九	六六・四三

四在監人ノ待遇 ニ關シテハ内地人、本島人、支那人ノ區別ヲ置カス是レ皇化ノ露被ハ一視同仁其ノ間ニ輕重ノ差ナキヲ示スモノニシテ唯、本島人ニ對シテハ舊慣ニ依リ辮髮ヲ許セルト衣服ノ制式ニ幾分ノ斟酌ヲ加ヘタルト又女囚ニ對シテハ纏足ヲ許シタルトノ三、三特例アルノミ是レ辮髮、纏足等ノ久シキ慣習ヲ打破スルニ於テハ寧ろ酷ニ失シ刑ノ平等ヲ缺ク嫌アルニ因ル其ノ他食糧、役業及檢束上ニ關シテハ内地人、本島人悉ク之ヲ同一ニ待遇セリ

五作業 監獄新營ノ功竣リ諸般ノ設備完成スルト共ニ銳意改善ニ努メタルカ爲各種ノ作業大ニ發達セリ其ノ作業ノ主ナルモノハ指物細工、籐細工、草履工、洋服裁縫等ニシテ三十類、八十三種ノ多數ニ達セリ而シテ出獄後監獄ニ於テ習得シタル職業ニヨリ生計ヲ立ツル者多ク相當ノ成功者モ亦少カラス左ニ經費ト收入ヲ掲グ

年 度	監 獄 費		在 監 人 費		作 業 收 入	
	支 出	在監人一人 一日平均	支 出	在監人一人 一日平均	收 入	就業者一人 一日平均
明治三十一年度	二四四、三三七	三〇八	九〇、五三八	一一四	一七八五五	五九
同 三十九年度	四六八、八二五	四〇九	一七一〇八七	一四九	一一二、一一三	一一九
大正三年度	四一七、九二七	四五四	一三、三九四	一四三	九二、四七六	一五三
同 四年度	四五五、九七七	四四四	一四七、五五四	一六五	九八、八三八	一四五
同 五年度	五〇五、〇一八	四一五	一七六、五六三	一四五	一四六、五一六	一七一
同 六年度	五六〇、四五九	四五七	二二九、七〇三	二〇三	一六九、一六二	一九三

六教誨教育 言語風俗ヲ異ニスル本島人ヲ本位トセル監獄ニ於テ之カ教誨感化ヲ行フノ困難ナルハ言ヲ俟タス教誨師トシテハ内地人ノ外特ニ本島人ノ名望アル者ヲ採用シ又教師トシテハ本島人ニシテ國語學校ヲ卒業シ公學校教員タル資格アル者ヲ採用シ大ニ教誨教育ニ勗メタル結果良好ノ成績ヲ得假出獄ヲ許サレタル者既ニ六四六人ニ及ヘリ又幼年囚ニ對シテハ特ニ臺北監獄内ニ幼年監ヲ設ケテ公學校ノ制度ニ準シ前記教師ヲシテ教育ヲ施サシメ

其ノ成績良好ナリ

七衛生 當初獄舎ノ設備未タ完カラス監獄醫モ亦容易ニ得難キノ時ニ於テ而モ衛生思想ニ乏シキ本島人ヲ收容シタルコトトテ疾病死亡ノ多數ナリシハ寔ニ止ムヲ得サリシカ明治三十四年專任監獄醫十數名ヲ配置シ専ラ衛生ニ努メタル結果漸次良好ノ成績ヲ收メ其ノ死亡率ハ現今百分ノ二ナリ

八免囚保護 本島ニ於テモ夙ニ斯業ノ必要ニ逼リ明治三十八年臺南監獄ニ於テ始メテ出獄者ノ保護ヲ試ミタルヲ端緒トシ其ノ組織略々成ルニ及ヒテ累功舎ト稱ス超エテ四十年臺北ニ一新舎成リ尋テ臺中ニ再生舎成リテ執モ斯業ニ努ムル所アリ然レトモ皆是レ監獄職員公餘ノ事業ニシテ其ノ間幾多ノ困難ト戦ヒ特ニ資金ノ窮乏ニ苦ミシカ幸ニ臺灣婦人慈善會及民間ヨリ土地若ハ家屋等ヲ以テ援助スルアリ總督府亦斯業補助ノ喫緊ナルヲ認メ明治四十年度ヨリ年々三千圓ノ補助ヲ給シ茲ニ基礎確立シ其ノ成績亦見ルヘキモノアルニ至リシカ尙益々事業ノ發展ヲ期センカ爲大正四年九月臺北、臺中、臺南ノ三保護場ヲ併合統一シテ

財團法人ヲ組織シ臺灣三成協會ト稱スルニ至レリ
 保護ノ成績ハ明治三十八年開始以來大正六年末ニ至ル迄保護シタル人員一、三〇六人ニ上
 リ保護ノ成績良好ニシテ獨立生計ノ途立チ又ハ父兄等ニ引取ラレタル者一、〇七七人、逃走
 其ノ他成績不良ノ者一五三人ニシテ其ノ保護ノ成績良否不明ノ者七六人中現在者三二人及
 死亡者其ノ他四人ナリトス

出獄人保護場現在人員

大正六年十二月三十一日

名	稱	内地人	本島人	支那人	計
臺灣三成協會	臺北一新舍	一五七	一八六	七	二二〇
	臺中再生舍				
計	臺南累功舍	一三	一	一	一五
		一三	一八	一	三二

臺灣事情終

大正七年十一月十四日印刷

大正七年十一月十六日發行

臺灣總督府

臺北撫臺街二丁目一四六番戶

印刷者 遠藤祐太

臺北撫臺街二丁目一四六番戶

印刷所 臺北印刷株式會社

大清光緒二十一年

正月二十一日

正月初一日

正月初二日

正月初三日

正月初四日

正月初五日

364
85

終